

吉井町文化財調査報告書第1集

吉井町文化財調査報告書第1集

1991

長崎県吉井町教育委員会

吉井町文化財調査報告書第1集

NAO

YA

JYO

ATO

吉井城示谷道





直谷城跡出土の中国製輸入陶磁器



同 上



直谷城跡出土の中国製輸入陶磁器



同 上



直谷城跡出土の中国製輸入陶磁器



同 上



直谷城跡出土の中国製輸入陶磁器



直谷城跡東麓出土の中国製輸入陶磁器

表紙の題字は
兵衛翠苑氏の筆による。

発刊にあたって

このたび、当町にとりましてかけがえのない史跡であります中世の山城「直谷城跡」の発掘調査報告書を刊行するはこびになりました。

吉井町は、北松浦半島のほぼ中央に位置し、町の中心部は佐世保市の北方13kmにあり、東は世知原町、西は江迎町・佐々町、南は佐世保市、北は松浦市に接し、県下ではまれな海のない町です。

「直谷城跡」は、町の北西部に位置していまして、南流します福井川南岸に屹立する砂岩の残丘上に築かれた中世松浦党の志佐氏の居城で、周囲は、直谷という地名のとおり、垂直にそびえたつ懸崖をなす天然の要害であります。

その中世の山城として往時の原形を残しているといわれる直谷城跡を、町としましては史跡公園として環境整備し、活用したいという構想のもと、その基礎資料を得るために3カ年の計画で調査をいたしました。

第1年次（昭和63年度）は、町単独予算で城跡の全体像の把握、第2年次（平成元年度）と第3年次（平成2年度）は、国庫補助事業で範囲確認調査と発掘調査を行い、城跡の変遷、遺構の存在と保存状態の把握等に取り組み、新しい遺構の発見並びに貴重な出土遺物を得ることができました。

これはひとえに、種々ご指導とご助言を賜りました、県教育府文化課の先生、調査指導をいただきました、県文化財保護審議委員並びに指導員の先生、そしてこの調査にご協力いただいた先生方、地主の方々、さらに炎天下のもと作業に従事していただいた皆さま方のご協力によることと大であり、ここに深甚の謝意を表します。

「直谷城跡」の具体的保存事業は、本調査を基盤に、平成2年度に発足しました専門家によります「吉井町史跡等保存整備委員会」におきまして、さらに調査・研究をいただきその建議を受け、具体的な方策を樹立し、「直谷城跡公園」として保存整備を積極的に推進することをご報告し、発刊のごあいさつをいたします。

平成3年3月31日

吉井町教育委員会

教育長 橋 本 十九三

例　　言

1. 本書は、昭和63年度は町単独事業、平成元、2年度は国庫補助事業として実施した。長崎県北松浦郡吉井町直谷免字内裏1007番地の1他に所在する直谷城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の事業主体は吉井町教育委員会で、調査期間は次のとおりである。
 - 1次調査 昭和63年8月1日～8月12日（12日間）
 - 2次調査 平成元年7月17日～8月11日（21日間）
 - 3次調査 平成2年7月19日～8月10日（21日間）
3. 調査関係者は以下のとおりである。

調査指導	外山 幹夫 長崎大学教育学部教授
	吉福 清和 県立猶興館高校教諭（県文化財保護指導員）（調査担当）
吉井町教育委員会	橋本十九三 教育長
	長谷川正夫 教育次長
	平井 謙二 社会教育係長（調査担当）
長崎県教育庁文化課	宮崎 貴大 主任文化財保護主事（〃）
	村川 逸朗 文化財保護主事（〃）
調査協力	川畠 敏則 佐世保市山手小学校教諭、馬場 聖美 吉井町立北小学校事務職員（町文化財審議委員）、坂梨咲子、古木寿子（奈良大学学生）
4. 本書は分担執筆した。I-1、III-4を吉井町教育委員会平井謙二社会教育係長、I-3、II-1、2、II-3-(1)、(2)、(3)、(4)-(1)、II-3-(1)-(2)-B、III-1、5を村川、II-3-(1)-(2)-A、II-3-(2)-(2)、II-3-4-(2)、III-2を宮崎が執筆した。
5. I-2は、県立猶興館高校西村暉希教頭、I-4は、長崎大学教育学部外山幹夫教授、III-3は、県立猶興館高校吉福清和教諭に玉稿を賜わった。
6. 直谷城跡の遺構の名称については、まず、福井内裏山古御城図に記載されている名称を用い、それ以外の新しく発見された遺構については、県立猶興館高校吉福清和教諭、吉井町教育委員会平井謙二社会教育係長、村川の三者で協議をもち、その案を外山幹夫教授に監修していただくという形をとった。
7. 本書の編集は、村川による。

本文目次

I. 序 章	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 直谷城跡の地形と地質	2
3. 直谷城跡の周辺の遺跡	7
4. 直谷城主志佐氏の動向について	8
II. 調 査	
1. 調査経緯	15
2. 測量調査	16
3. 発掘調査	27
(1) 主郭地区	
① 遺構	27
② 遺物	35
A. 中世の土器・陶磁器	35
B. その他の遺物	50
(2) 東麓地区	
① 遺構	54
② 遺物	59
A. 中世の土器・陶磁器	59
(3) 北小学校地区	
① 遺構	62
(4) 南麓地区	
① 遺構	64
② 遺物	64
III. 総 括	
1. 遺構について	67
2. 遺物について——中世土器・陶磁器の様相を中心として	69
3. 県北部の中世山城と直谷城	73
4. 近世以降における吉井町直谷地区の様相	85
5. ま と め	88

挿図目次

第1図 内裏山周辺の地質図	3
第2図 内裏山の地質構造模式図	3
第3図 吉井町内の遺跡	5
第4図 直谷城跡地形測量図（1/1,000）	17
第5図 主郭地区（A～I）トレンチ配置図（1/750）	21
第6図 主郭地区（本丸、櫓台跡）遺構検出状況	23
第7図 主郭地区（二の丸、天守台跡）遺構検出状況	25
第8図 A、Cトレンチ遺構検出状況（1/60）	28
第9図 Bトレンチ遺構検出状況（1/60）	29
第10図 Dトレンチ遺構検出状況（1/60）	30
第11図 H、Eトレンチ遺構検出状況（1/60）	31
第12図 F、Gトレンチ遺構検出状況（1/60）	33
第13図 Iトレンチ遺構検出状況（1/60）	34
第14図 主郭地区出土上器①（1/3）	37
第15図 主郭地区出土土器②（1/3）	39
第16図 主郭地区出土土器③（1/3）	40
第17図 主郭地区出土土器④（1/3）	42
第18図 主郭地区出土土器⑤（1/3）	44
第19図 主郭地区出土土器⑥（1/3）	47
第20図 昭和41年主郭地区採集資料①（1/3）	48
第21図 昭和41年主郭地区採集資料②（1/3）	49
第22図 主郭地区出土、その他の遺物①（1/2）	51
第23図 主郭地区出土、その他の遺物②（1/2）	53
第24図 東麓地区、北小学校地区、南麓地区（1～15）トレンチ配置図	55
第25図 東麓地区（1～4）トレンチ遺構検出状況（1/60）	56
第26図 東麓地区4トレンチ遺構検出状況（1/40）	57
第27図 東麓地区（6、7、11）トレンチ遺構検出状況（1/60）	58
第28図 東麓地区10トレンチ遺構検出状況（1/40）	60
第29図 東麓地区出土土器（1/3）	63
第30図 北小学校地区（8、9）トレンチ土層図（1/60）	65
第31図 南麓地区（12、14）トレンチ遺構検出状況（1/60）	66
第32図 南麓地区採集土器（1/3）	66

第33図	松浦市櫻楷田遺跡の敷石道路状遺構	68
第34図	中世土器・陶磁器組成グラフ	71
第35図	主郭地区における区域別出土状況	72
第36図	青磁・白磁・青花碗・皿からみた時代別数量表	72
第37図	県北部の主要城郭分布図	79
第38図	直谷区、明治初期の字図	87
第39図	直谷城跡俯瞰図	91

表 目 次

第1表	県北部の主要城郭一覧表	77
第2表	直谷城関係年表	90

図 版 目 次

図版1	直谷城跡遠景	95
図版2	“姫落とし”部の遠景と近景	96
図版3	“姫落とし”近景	97
図版4	主郭地区伐開後の状況	98
図版5	主郭及び追手郭地区の伐開後の状況	99
図版6	追手郭地区的伐開後の状況①	100
図版7	追手郭地区的伐開後の状況②	101
図版8	追手郭地区的伐開後の状況③	102
図版9	主郭地区的発掘調査風景	103
図版10	主郭地区的遺構検出状況①	104
図版11	主郭地区的遺構検出状況②	105
図版12	主郭地区的遺構検出状況③	106
図版13	主郭地区的遺構検出状況④	107
図版14	主郭地区的遺構検出状況⑤	108
図版15	主郭地区出土土器・陶磁器①(1/2)	109
図版16	主郭地区出土土器・陶磁器②(1/2)	110
図版17	主郭地区出土土器・陶磁器③(1/2)	111

図版18	主郭地区出土土器・陶磁器④（1/2）	112
図版19	主郭地区出土土器・陶磁器⑤（1/2）	113
図版20	主郭地区出土土器・陶磁器⑥（1/2）	114
図版21	主郭地区出土土器・陶磁器⑦（1/2）	115
図版22	主郭地区出土土器・陶磁器⑧（1/2）	116
図版23	昭和41年主郭地区採集資料①（1/2）	117
図版24	昭和41年主郭地区採集資料②（1/2）	118
図版25	主郭地区出土、その他の遺物①（1/2）	119
図版26	主郭地区出土、その他の遺物②	120
図版27	主郭地区出土、その他の遺物③（1/1）	121
図版28	東麓地区・北小学校地区・南麓地区遠景等	122
図版29	東麓地区的調査状況	123
図版30	1、3トレンチ遺構検出状況	124
図版31	東麓地区的調査状況①	125
図版32	東麓地区的調査状況②	126
図版33	東麓・南麓地区出土土器・陶磁器（1/2）	127
図版34	北小学校地区的調査状況	128
図版35	南麓地区的調査状況	129
図版36	直谷城主墓石塔群他	130
図版37	福井内裏山古御城図・内裏山近影	131
図版38	今福城山（梶谷城）・志佐城（陣之内城）跡遠景	132

I. 序 章

1. 調査にいたる経緯

吉井町には国指定の福井洞窟を始め、橋川内洞窟(町指定)・直谷岩陰・辻田遺跡等、旧石器時代から弥生時代前期に至る多くの遺跡が見られると同時に、国指定の天然記念物である御橋観音シダ群落・県指定の吉田大明神社叢が大事に保存されており、合わせて国無形文化財に選択されている北松浦の収穫儀礼「お蔵入れ」が今なお地区の人の手によって伝えられている。

そのほかにも熊頭遺跡、福井塚跡、猪追い祭り、牛神祭り等、有形・無形の文化財が数多く残っていて、町のキャッチフレーズも「史跡とフルーツの町」とついているほどである。

吉井町直谷免に古来より内裏山と呼ばれている山があり、ここは壇ノ浦の戦いにおいて二位尼に抱かれて入水した安徳天皇が脱出して数年の間、身を潜め内裏を営まれたと伝えられており、この地区には安徳天皇にまつわる地名（お草の尾様・御手洗・朕の瀬・藏人屋敷）が今も残っている。

また内裏山には饒城天皇を高祖として、8代目久が槐谷城（松浦）を築き、孫の峯^{タケシ}披が平戸松浦家始祖となり田平城を築城し、松浦党を率い壇ノ浦において平氏の水軍と戦った。披の甥の志佐六郎貞^{タケル}始祖して16代（約400年）続いたと伝えられる中世山城の「直谷城」がある。

この間、直谷城主志佐氏は1281年2世糺のとき、弘安の役に奮戦し執権北条時宗より神崎の庄を賜り、7世重のときには毫岐の国を併領して勢力範囲を広大なものにしたが、9世純昌の時代に佐賀の龍造寺・大村の連合軍に敗れて、主なき城になっていたのを宗族の田平城主純元が直谷城主となり再び広大の領地を有するようになった。

14世純意・15世純高は豊臣秀吉の征韓に手兵千人を連れ出陣したが戦死したため、実質的に平戸松浦氏の勢力下に入り、直谷城は廃城となったが、自然の地形を利用した堅固な中世山城として古くから伝えられてきた。

昭和62年8月31日に九州地方を襲った台風で、直谷城の天守台跡に自生している椎の大木が根こそぎ倒され、その下から石積みらしいものが見つかったのがきっかけとなり、また、宅地や運動公園造成等、開発の波も押し寄せている為、これまで調査が行われていなかったこの城跡を保存・整備し史跡公園として活用するための範囲確認調査を昭和63年度から平成2年度までの3カ年にわたって実施することになった。

（平 井）

調査協力者

土肥ハルエ（土地関係）	土肥 龍夫（土地関係）	小山 悅代（土地関係）
徳田 勝彦（　　）	馬渡 正隆（　　）	西侯 審三（倉庫提供）
吉本 茂治（　　）	山本 周二（　　）	佐藤 昭壽（区長）
穂田 穂子（　　）		

2. 直谷城跡の地形と地質

県立猶興館高等学校教頭 西 村 晉 希

吉井町は長崎県の中で海岸線を有しない数少ない町のひとつである。吉井町北部の町境は、松原一元尾岳一合戦原一福井岬一高法知岳一刀ノ越一牧の岳の分水嶺にほとんど一致しておりそれに開まれた凹地の中を、福井岬の谷から発した福井川が南進している。南進する福井川は内裏山の北で南東へ向きを変え内裏山（直谷城跡）を迂回し内裏山の南方で西進し、さらに江迎町との町境で直角に折曲し約1km南進して佐々川と合流している。

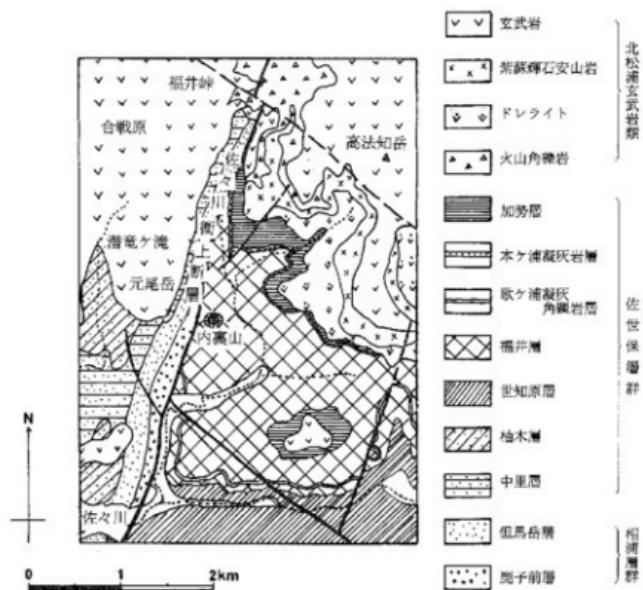
直谷城跡のある内裏山は標高167.2mを最高点とした、南北500m、東西200mほどの小高い丘である。内裏山の北東直下を流れる福井川が標高約90mであるため、山と川の比高は最大80mしかない。この山の地形の特徴は山の北東側に福井川が数十mまで接近しており、河川による下刻浸食でできたと考えられる急崖で囲まれていることである。内裏山のある吉井町北部の地質の概要は次のようになっている。

本地域の地質の最下部は、新生代新第三紀中新世前期の堆積岩である相浦層群（下位より、尼鶴層、鹿子前層、石蹴凝灰岩層、但馬岳層）とその上位の佐世保層群（下位より中里層、袖木層、世知原層、福井層、歌ヶ浦凝灰角礫岩層、本ヶ浦凝灰岩層、加勢層）からなっている。これら相浦層群及び佐世保層群の地層は炭層をほとんど伴っており、かつては、盛んに採炭されたものであり、佐世保市、北松地域の地質を特徴づけるものである。内裏山付近のこれらの地層は、北→北東へゆるやかな傾斜で広がっている。

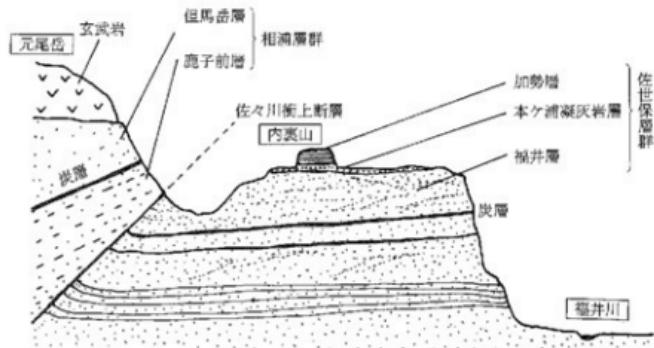
吉井町北部の町境をなす尾根線の地質の9割は玄武岩である。火山の噴出でできた玄武岩の溶岩は、福井川の西方の斜面では標高250~300m以上、東方斜面では標高約200m以上に分布している。この溶岩台地をつくっている玄武岩も佐世保市や北松地域の地質を特徴づける岩石で、「北松浦玄武岩」とよばれている。800万年前の火山噴火で、佐世保、北松一帯に溶岩台地ができたのである。玄武岩は佐世保層群などの砂岩や泥岩に比べてはるかに堅くて、浸食に対する抵抗が強いため、佐世保層群を覆った玄武岩台地として残り、又、浸食の残丘である山頂部や稜線にほとんど分布している。そのため、福井川沿いには玄武岩の転石が普通にみられるのである。

内裏山は福井川（一部は昔、江迎川の上流であった）により浸食された残丘といえるが、標高は160mほどであり、玄武岩の部分は浸食されてしまい、玄武岩の下にある佐世保層群の砂岩や泥岩でできた岩山となっている。

福井岬子産坂付近より発する福井川は、北松地域の代表的断層である佐々川衝上断層に起因した川であるといつていい。佐々川衝上断層は断層線が佐々川の河口、佐々浦から北北東に新町、栗林、吉井駅、住吉、松原、福井岬付近へと10数kmに及ぶ長いもので、この地域の地形の



第1図 内裏山周辺の地質図 (松井他1989による)



第2図 内裏山の地質構造模式図

形成に大きな影響をあたえ、川の流路までも変えてしまっている。

直谷城跡付近におけるこの断層は、内裏山の西200~300mを町道内裏山線に沿って、断層面、N20°E、70°Wでのびている。この断層は旧潜滲炭礦坑内で落差750mが観察され、又、福井岬付近では落差約50mと推定されている。内裏山の西においては、断層線より西側がつき上げた衝上断層で、断層線の西側には相浦層（鹿子前層、但馬岳層）が露出し、東側即ち内裏山には佐世保層群（福井層、加勢層）が露出している。

内裏山を構成する地層は三層に区分される。最下層は北小学校裏の崖をつくる砂岩、泥岩の互層や直谷城跡の天守台跡、姫落とし、武者溜まり、など、城の土台をなす部分をつくる塊状砂岩からなる地層であり、佐世保層群福井層とよばれている地層に属する。内裏山は斜層理のある砂岩優性の地層で、一部に炭層が挟在し採炭坑跡も残っている。

北松地域では、福井層を覆って本ヶ浦凝灰岩層とよばれる厚さ2~5mの凝灰岩層が分布している。本層は灰白色のやわらかい凝灰岩層で内裏山の中部層となり、直谷城跡では本丸、二の丸の面に相当するが、露出は表面ではほとんどみられない。

内裏山を構成する地層の最上層は、直谷城跡物見台跡の台地をつくる砂岩の地層で約7~8mの厚さである。この砂岩層は佐世保層群加勢層に属する地層で、内裏山では天守台跡だけに分布している。

直谷城跡の地質を総括すれば、最上部の物見台は加勢層の砂岩であり、本丸、二の丸の平坦面は本ヶ浦凝灰岩層であり、姫落としをはじめとした本城跡の急崖は福井層の砂岩でできており、地形と地質の対応がみられる。地層は全体として走向EW、傾斜5°Nで水平に近い地層といえる。

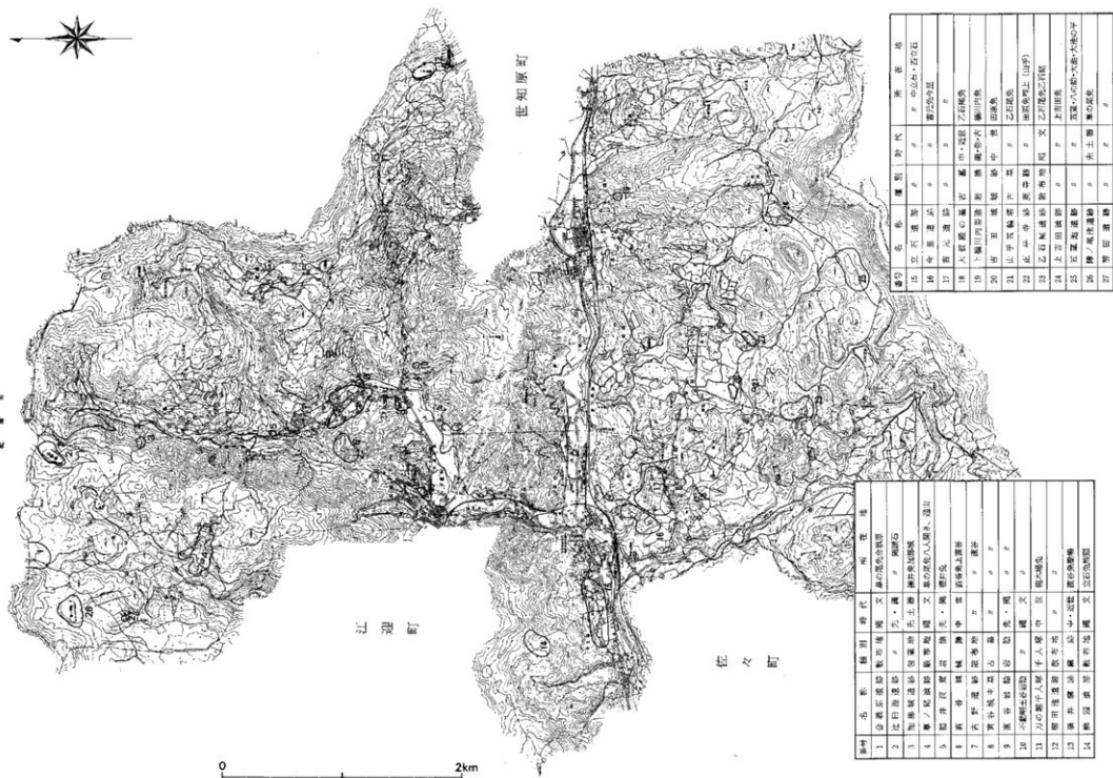
直谷城跡にみられる黒い転石はほとんど玄武岩であるが、内裏山には玄武岩の露出はなく、人為的に運ばれたものである。また、サヌカイト質の緻密な黒色の転石も時にみられるが、この無斑晶質岩は紫蘇輝石安山岩で、近くでは高法地岳周辺に分布しているため、転石が直谷城に使われていてもさほどおかしいことはない。

<主要文献>

辯田泰彦（1974）：表層地質図佐世保、土地分類基本調査、長崎県

倉沢一（1970）：長崎県北松浦郡吉井町子産板付近の佐々川断層と玄武岩類（I）
防災科学技術総合研究報告第22号

松井和典・古川俊太郎・沢村孝之助（1989）：佐世保地域の地質、地質研究報告（5万分の1地質図）、地質
調査所



第3図 吉井町内の遺跡

3. 直谷城跡の周辺の遺跡（第3図）

直谷城跡がある吉井町は、北松玄武岩台地のほぼ中央に位置し、この台地を浸食する形で、佐々川、そして佐々川の支流である福井川が流れている。特にこの福井川が流れている町の北部は、断層の作用もあり深く切れ込んだ谷間を形成している。これらの地理的な条件が吉井町内の遺跡立地の要因ともなっている。

古い時代からみていくと、町の北西部の玄武岩台地上には旧石器時代の遺跡として辻田池遺跡、陣の尾池遺跡、前田遺跡等があり、旧石器時代のナイフ形石器が盛行する時期の遺跡に恵まれている。また、この台地の東側の谷間の旧傾斜面には尖頭器が出土し、安山岩の原石産地である金城遺跡があり、この谷間の谷底には河成洞穴で、国指定史跡である福井洞窟がある。この福井洞窟は、第II・第III層の細石器文化と、第X・V層の両面加工石器が出土する文化層を主なものとするが、これらの間にある。第VII～IX層の丁度ナイフ形石器の時期が空白であるといわれている。この福井洞穴の空白の時期のナイフ形石器の時期のものが至近距離にある玄武岩台地上に濃密に分布するのは興味深い。恐らくナイフ形石器文化と細石文化との遺跡立地のあり方を際立った形であらわしているものと思われ、旧石器時代においても注目される場所である。この福井洞窟と直谷城跡は直線距離にして600m程しか離れていない。

縄文時代の遺跡としては、早・前・中期の遺物が採集される熊頭遺跡。曾畠式土器が多く出土し、縄文時代から弥生時代、古墳時代までの遺跡である上橋川内岩陰等がある。

中世の遺跡としては、吉田氏もしくは松瀬氏の旧城と伝える吉田城が田原免にあり、この吉田城の南、150mには、古墓である山手五輪塔があるが、これは縁泥変岩製で台座には、「永正一三年四月五日宗禪門也」と刻まれており、また、後世の恐らくは平戸松浦藩の調査の記録によるものと思われるが、「この墓は松浦継殿の家臣、山口萬左衛門の先祖である」と記されているということである。

直谷免勘場には、豊臣秀吉の征韓の役帰郷に際し、従軍した平戸の松浦鎮信に伴われて来日した陶工、金九永一の築窯によって創業されたと伝えられる福井窯跡がある。絵唐津の皿等が採集されているが、佐世保市の薩摩の本窯の開窯者である金九永の築窯によることは歴史的価値が高いものと思われる。

町外の直谷城跡の同時代の遺跡で関連がある山城としては、第IV章の3の中で触れてあるので詳述は避けるが、松浦市の陣の内城跡、江迎町の深江氏館跡、佐々町の東光寺山城、平戸市の箕坪城跡、佐世保市の飯盛城跡等がある。

(村川)

註1. 一連の玄武岩台地で、勝町の江迎町に属する白岳遺跡や七腕遺跡では発掘調査によりナイフ形石器の時期の包含層が確認されている。村川逸朗 II白岳遺跡『長崎県埋蔵文化財調査集報X』長崎県文化財調査報告書第86集 1987 長崎県教育委員会。他。

4. 直谷城主志佐氏の動向について

長崎大学教授 外 山 幹 夫

直谷城主であった志佐氏の性格とその動向について、直谷城との関係に注意しながら、文献を中心に論じるのが本稿の目的である。

1. 鎌倉時代の志佐氏

志佐氏は、肥前国松浦郡を主な基盤として、古代末から中世にかけて広く活動した松浦党の一族である。松浦党の出自と、初期における発展、及び武士團としての構造については、いまだなお不明な点が多く残されている。これらについては、別に私見を述べており、これに譲ることとする。

(1)
志佐氏の興起について、江戸時代の松浦藩で編纂された松浦氏の家譜である『家世伝』によると、志佐氏の祖は松浦党の御崩直の子である清の二男貞であるとされている。それによれば、貞は清から、「志佐・五島之東辺及び西島、並壱岐地」を分割譲与され、その所領の一つ肥前国松浦郡志佐（長崎県松浦市志佐町）の地を本拠とし、その地名をとって志佐氏と称したという意味のことを記している。何分、時代的に降った江戸時代に記されたものであり、鶴呑みできないが、「山代文書」寛元二年（1244）四月二十三日付の関東裁許状に、肥前國御家人として志佐六郎貞がみえ、さきにあげた『家世伝』に記された志佐貞の実在が裏付けられるのである。なお、さきの『家世伝』にその所領としてあげているもののうち、志佐については、同氏の「名字之地」であることを思えば、史料的裏付けはないとはいえ、地頭職を貞が帯していたことは、まず疑えぬところであろう。一方、壱岐については、戦国時代初期のわが文明三年（1471）、朝鮮政府高官申叔舟の著になる『済東諸国紀』に、志佐氏の所領として、同島の「唯多只郷」をあげている。中村栄孝氏は、これを芦辺町湯岳の地としている。⁽²⁾ひとまず従っておくこととする。この地の知行が、恐らくは『家世伝』にいう壱岐の所領を裏付けるもので、鎌倉時代以来のものとみられる。ただ、同書にいう「五島之東辺及び西島」については、裏付けるものがなく、これだけでは否定も肯定もできない。

志佐貞には数人の男子があり、糺（別名繼）が嫡子として志佐氏を継承し、他の庶子が松野尾・白浜等の各氏を創出したらしい。とくに白浜氏については、「山代文書」永徳四年（1384）二月二十三日下松浦住人等一揆契諾状に、その加盟者の一つに、「白浜後家代弘」という者がみえ、白浜氏の実在が裏付けられる。なお嫡子となったとはいえ、糺は必ずしも長男ではなかつたようであって、長男が嫡子とされる鎌倉時代一般のありかたからして、やや特異な、非嫡系的構造の松浦党のありかたがここにも窺われる。「志佐氏系図」によると、さきに述べたように貞の嫡子が糺、そして、さらにその嫡子が祝であるとする。「山代文書」によって、この商人共に實在が裏付けられる。すなわち、この親子が共に元寇に際して出陣して活躍した。とくに

札（継）は、弘安の役の後、多くの松浦党の者が含まれる宇野御房庄の地頭二十数名の者が、大挙して所領の訴訟のため鎌倉に参向しようとしたとき、弘安八年（1285）十一月、異国警固が手薄になると判断した幕府当局から阻止された。その際、志佐札が、他の有田次郎深、山代又三郎栄と共に、彼らを代表して幕府に参向を許されており（「山代文書」）、松浦党のなかで、一目おかれる存在であったことを窺わせる。

2. 南北朝・室町時代の志佐氏

志佐祝の子の有（別名尚有）は鎌倉木、他の地頭・御家人と共に鎮西探題北条英時を追討し、幕府滅亡に功があった。南北朝時代に入ると、志佐氏をはじめとする松浦党の多くは北朝方に属した。志佐有は、肥後の犬塚原の合戦に、宇久氏や青方氏らと共に出陣した（「青方文書」）。

志佐有は、また観応三年（1352）九月十日、足利直冬から箱崎宮領壱岐國瀬戸・柏原両村を、石浦小豆弥五郎・大島三郎左衛門尉・町田平三以下の者が押妨狼藉したことについて、彼らを排除し、下地を雜掌に沙汰付するよう命ぜられている（「箱崎宮文書」）。当時のありかたからして、有が壱岐国内に所領を知行していたことを前提としているところであろう。

志佐有には四人の子息があり、そのうち定が後を嗣いだ。しかし、他の三人の男子のことについての詳細は不明である。ただ『家世伝』は、この三人の男子が、それぞれ志佐・辻・津吉三氏に入嗣したとしているが、裏付けるべき史料がなく、それ以上のことは分からぬ。志佐有・定の親子は、延文四年（1359）八月の筑後川の戦で少弾頼尚軍に加わって出陣したが、菊池軍に攻撃され、共に戦死したと「志佐氏系図」は記している。『太平記』も筑後川の戦で松浦党の参戦に触れてはいるが、とくに志佐のことについては記すところがない。

志佐定の子の調は、永徳四年（1384）二月二十三日付の下松浦住人一揆契諾状（「山代文書」）に、「壱岐守護」として花押を加え、この時加盟していることが分かる。松浦党一揆は、応安六年（1373）五月六日の五島住人の一揆契諾状（「青方文書」）以後、永享八年（1437）十二月二十九日の下松浦住人一揆契諾状（「青方文書」）にいたるまで、合計九回交わされている。その結成の最初の契機は、九州探題今川了俊によって、その北朝方の軍事力として組織されたものである。志佐調もまたこの一揆の一員として加盟したのである。

さて志佐調の子は志佐重である。彼は、志佐氏の中で朝鮮との通交を行なった最初の人物である。その際、彼は「一岐州志佐源朝臣重」（『世宗実錄』世宗十一年<1429>四月甲午日条）と称して朝鮮に臨んだ。壱岐を知行していたことを根拠に通交することが、何らかの利便があつたものと思われる。

志佐重の子の志佐義について、「志佐氏系図」は壱岐国守護であるとしている。はたして事実であろうか。この点について、残念ながら裏付ける史料がない。彼は至徳二年（1385）五月六日、及び明徳三年（1393）十二月十五日の両時期において、今川了俊から書下を与えられているが、（「宗像神社文書」）、このとき彼は、共に「志佐壱岐守殿」と宛書に記されており、壱岐

守護とは記されていない。志佐氏は、歴代ほぼ巣岐守の官途であった（『家世伝』）。これからすれば、巣岐守の官途を巣岐守護と混同したのではないかとも憶測される。なおこの二通の書下は、筑前宗像宮大宮司氏頼及び氏重が、その地頭職を知行する巣岐国薬師丸の地に対し、浜田安芸守が押効狼藉したことを九州探題に訴えたことについて、今川了俊が志佐義に対して、下地をまず氏頼に沙汰付するよう命じた。しかし、これが実施されなかったため、再度このように沙汰付を命じたものである。義は、後述するように、巣岐には単に代官を派遣して所領の知行を行なわせ、自身は現地にいなかった。そのため、このような事態を招いたものであろう。

一方、「海東諸国紀」によると、彼は「一岐州太守源義」と称して対鮮通交したとみえる。志佐義の巣岐の所領の代官は真弓武であった。同じく「海東諸国紀」に、「志佐代官源武」、「一岐守護代官真弓兵部少輔源武」などと記されている。さらに「世祖実録」世祖元年（1456）七月丁酉日条によると、朝鮮に赴いた対馬出身の早田藤九郎なる者の言として、彼は志佐氏（義）について、

一岐太守也、居肥前州上松浦、使真弓為代官、守此地。
としている。さらに「世祖実録」世祖十二年（1467）八月庚子日条には、真弓武と近い位置にあつたらしい真弓永について、「一岐州守護代官真弓兵部少輔源永」、そして真弓武についても、「成宗実録」成宗元年（1470）三月半卯日条には、「一岐州守護代官真弓兵部少輔源武」と記されている。

このように、「海東諸国紀」・「李朝実録」共に、真弓氏が志佐氏の巣岐における代官、或いはその巣岐国守護代であるとすることは、志佐氏（義）が、やはりこの時期に巣岐国守護だったものよりも受けとられる。しかし、朝鮮側の史料にみられるわが国の領主の肩書は、誇張されたものが少なくない。また真弓武自身についても、「成宗実録」成宗元年（1470）九月丙子日条には、「呼子一岐守護代官源武」とも記されている。従って「志佐氏系図」や、これら朝鮮側史料をもって、志佐義が巣岐国守護職であったことの根拠とすることはできない。では、この時期の巣岐国守護は誰であろうか。この点に関し、同じく「海東諸国紀」によると、當時巣岐は、「志佐・佐志・鴨打・塙津留分治」とある。志佐氏をはじめ、佐志・鴨打・塙津留の四氏が分割知行していたというのである。このうち、志佐氏に関しては、前にも少し触れたが、

唯多只郷

志佐代官源武主之、
とある。志佐義はこの地を、真弓武を代官として知行していたのである。「海東諸国紀」が記す、当時における巣岐の四名の領主の冒頭に志佐義を置いていることは、同氏がその最有力者であったとみられることを裏付けるものである。かつまた後述するように、彼がこの四名中では勿論、松浦党の中でも九〇回に上る最も多くの対鮮通交を行なっている。これらの実績を背景として、彼が巣岐国守護であった可能性が全くないとは断言できないが、断定することは控えねばならない。

『世祖実録』世祖元年（1456）七月丁酉日条によると、この日、朝鮮の礼曹が、先にも記した朝鮮政府に信頼があり、護軍という官職さえ授けられていた早田藤九郎に接見し、豊後守護大友持直が九州探題渋川教直、及び志佐氏と「族親」であるか、またそれらと比較して大小いかがかを問うた。これに対して藤九郎は、三者相互に「族親」ではなく、渋川氏が慶尚道觀察使のごときものとすれば、大友氏は慶尚府尹のごときものであり、また大友氏が、兵一萬一〇〇〇名を出動させることができるのでに対し、志佐氏は五〇〇から六〇〇名程度出動させができるに過ぎないと答えている。志佐氏が、九州探題渋川氏や、豊後守護大名大友氏と比肩されるほどのものという誤解を朝鮮側が持つ程になっていたことを示すものとして興味あることであろう。

3. 志佐氏の対鮮貿易

志佐氏のわが国内における所領については、これまで述べた程度のことしか明らかではない。志佐氏については、むしろその対鮮貿易に関し『李朝実録』・『海東諸國紀』等の朝鮮側の史料によって多くを知ることができる。

志佐氏の中で、最も早く対鮮貿易したのは「志佐殿」で、わが応永九年（1402）、すなわち朝鮮の太宗二年六月に行なっている（『太宗実録』太宗二年六月庚申日条）のをはじめ、応永二十三年（1416）まで、合計一七回貿易をしている。しかし、この人物が志佐氏のうち何者なのか確定できない。この他にも「松浦志佐」なる者が、嘉吉三年（1443）に貿易をしている（『世宗実録』世宗二十五年<1443>二月丁未日条）が、これも人物の特定ができない。また「松浦志佐源武」（『成宗実録』成宗十年<1479>正月丁丑日条）がみえ、あるいは先に記した真弓武を指すのかともみられるが断定できず、ひとまず別人としておこう。

志佐氏のうち、「志佐系図」にみえる人物で、対鮮貿易者であることが明らかな人物は、志佐重とその子志佐義である。このうち志佐重は、応永二十八年（1421・『世宗実録』世宗三年八月癸巳日条）以後永享元年（1429）までの八年間にわたって、八回対鮮貿易を行なっている。重の子義は、宝徳二年（1450・『文宗実録』文宗即位年六月丙申日条）以後、永正元年（1504）までの五四年間に実に九〇回に上る貿易を行なっている。さきにも述べたように、志佐氏中では勿論、松浦党全体の中でも、彼ほど多く対鮮貿易を行なった者は他に例を見ない。とくに文明十六年（1484・成宗十五年）には、八回に上った。

志佐氏にあっては、この他にも、「志佐秋高」（応永十七年<1410>・『太宗実録』太宗十年四月庚戌日条）。「志佐源茂子千代若」（『世宗実録』世宗十七年<1435>四月丁未日条）・「一岐志佐男寿丸」（『世宗実録』世宗二十年<1438>六月丁亥日条）などが太宗から世宗時代の貿易者としてみえる。その後も、「上松浦志佐源氏女」（『世祖実録』世祖元年<1456>八月乙丑日条）・「上松浦志佐源次郎」（『世祖実録』世祖八年<1463>五月壬戌日条）などの者が貿易者としてみえる。
(5)

以上にみると、志佐氏は対鮮貿易に極めて積極的であった。志佐義をはじめ、その父重、及びこれらの周辺の人物含めて十名近い者が貿易に進出していることが分かる。

志佐義の突出した貿易回数についてみると、興味ある事実を指摘しよう。わが享徳三年（1454）七月、端宗治世下の朝鮮で内乱が生じた。ところが干はこれを鎮定することができなかった。これを知った義は、よければ自ら渡鮮して鎮圧に協力し、「藩臣之忠」を表わしたいと申し出た（『端宗実錄』端宗二年<1454>七月己卯日条）。義の朝鮮王室に対する忠誠が、以後彼の貿易拡大に繋がった一因ではあるまいか。

その貿易の内容についていきさかみてみよう。まず最も初期の通交者である「志佐殿」の場合、応永九年（1402）、二人の朝鮮人を故国に返還した（『太宗実錄』太宗二年<1402>六月庚申日条）。恐らく彼がこれ以前使臣としての活動の中で、これらを拉致していたもので、通交貿易時代を迎える。また志佐重は応永三十年（1422）、蘇木八〇〇斤・硫黄二三〇〇觔・蘇香油二觔五両・正布四七〇匹・犀角三斤六両・藿香三〇斤・檀子三〇斤を朝鮮に輸出する一方、正布四七〇匹を輸入した（『世宗実錄』世宗五年<1423>二月丁丑日条）。ここで注目されるのは、輸出品の中に、東南アジア産の犀角、染料としての蘇木、さらに檀子などが含まれていることである。これは重が琉球との間の貿易を通して得たものを朝鮮に輸出する三角貿易をも行なっていたことを示している。しかし、十五世紀後半にはこうした貿易は認められない。また享徳三年（1454）、志佐義は白緬苧布・白細紗各五四、雜彩花席五張、駒具馬一匹・屏風一座・松子五〇斤・焼酎五〇瓶・桂茶食各四角・虎豹皮各二張・乾青魚二〇〇〇尾・大口魚二〇〇尾・乾鰯魚五〇尾・乾鮎魚四〇〇尾・乾柿子五〇貼・正布一三匹の多数の品々を輸入した（『端宗実錄』端宗二年<1454>七月己卯日条）。これらが同氏の経済的基盤となったことは明らかである。

4. 直谷城と志佐氏の衰退

志佐氏の「名字之地」が、肥前国松浦郡志佐（松浦市志佐町）であることはすでに述べた。今日、松浦市志佐町に寿昌寺があり、この所在地が現地では陣の内城の跡であるとの口伝がある。「陣の内」という呼称や、その地形からして、本来は鎌倉時代の志佐氏の地頭館であったものと思われる。しかし、『壹陽錄』によると、戦国時代の永祿年間（1558～1570）に、「陣の内城主志佐源次郎純次」とみえる。もしこれが事実であれば、その後この地頭館に修築が加えられ、城としての性格に変わったものとみられる。その後、永祿九年（1566）十二月、純次の三男純元が後述する直谷城に拠っていたが、一族の志佐純量のために直谷城を追われ、陣の内城に逃れたとある。このことからすれば、一時遅れの拠城として機能していたことを窺わせる。

つぎに直谷城についてみてみよう。直谷城とは今日の長崎県北松浦郡吉井町直谷免にあった山城である。直谷城の称は、この直谷の地に由来するとみられるが、一方、ときに直屋城とも書かれる（『大曲記』）。また壇之浦合戦に敗れた平家に擁せられた安徳天皇がここに逃れたと

の所伝から、内裏山城などともいわれるとされるが、これは荒唐無稽であろう。

その築城の時期について、『志佐物語』によれば、寛治二年（1088）に肥前国松浦郡に下向してきた安倍宗任の次男源次郎が築城したものであるとするが、保証の限りではない。

志佐氏における最初の人物がすでに述べたように貞であり、寛元二年（1244）に『山代文書』に初めてみえる。かりに直谷城がこれ以前からあったとしても、志佐氏の拠城となったのはこの寛元前後からのことということになる。

この点に関して今回の直谷城本丸跡発掘による出土品をみてみると、別の個所で触れられるように、その出土する磁器をみると、十二世紀の白磁片一点、十三世紀の青磁片一点、そして十四世紀及び十五世紀の青磁片が各々若干数がみられた他、十六世紀初頭の染付磁器片等二百点程が認められている。これによれば、部分的な発掘ではあるが、十六世紀初頭において、城が頻繁に利用されたことは明らかである。そしてこれ以前のものが若干認められることをもって、直ちに十二世紀に築城されたと見なすことができるかについてはいささか慎重でなければならない。つまり後代の者が、前代の作成にかかる磁器を利用した可能性も捨てきれないものである。とはいへ部分的発掘に拘わらず、以上のような出土状況であることは、基本的に志佐氏の興起する以前の平安末期から存在した城であって、後年志佐氏がこれに拠ったものと推測すべきものであろう。ただその時期の城主がなにものであるかは不明である。

鎌倉時代における直谷城は、その出土品が乏しいことも併せ、合戦はさして認められず、それほど活用されたとはいえない。むしろ南北朝・室町・戦国各時代に合戦が頻発した時期において機能を発揮した筈である。さきに述べたように、志佐の地における陣の内城が、構造的に戦略拠点としての機能を十分備えていないところから、義の時代には、勢い直谷城に依拠することが多くなったものと思われ、陣の内城は、その補助的性格のものとなったものであろう。

さきにみたように、志佐氏は義の段階までは対鮮貿易にも進出するなど勢威を振ったとみられるが、十五世紀末、その子純勝の時代を迎え、ようやく衰退に向かった。純勝とそれ以後の者の対鮮貿易を示すものも認められない。十六世紀初頭の三浦の乱（永正七年・1510）以後、対鮮貿易は途絶したのである。

戦国初期の明応年間（1492-1501）、志佐純勝は大村・龍造寺氏の連合軍に攻められ、五島へ逃れたが、その地で彼は家臣に討たれてしまった。彼には松房・徳房の二人の子があり、島原の領主有馬晴純の下に寄寓していたが、その後は不明である（『家世伝』）。志佐氏が直谷城を追われてから、一時直谷城は無主の城となつたとみられる。やがて、田平（長崎県北松浦郡田平町）にあった松浦党の一つ峯昌が、平戸を本拠とする松浦弘定と合戦のち、田平の地を松浦弘定に譲り、自らは純勝なき後の志佐氏の名跡を相続して志佐純本と名乗り、直谷城主となつた。十六世紀初頭のことである。ここに鎌倉時代以来の志佐氏に代わり、新たに峯氏系志佐氏の時代を迎えたのである。そして直谷城は、志佐氏一族の内紛の舞台となり、激しい攻防が行なわれたのである。先に述べた十六世紀初頭に出土する多くの染付磁器は、このころのもので

あって、江戸時代の記録である『壹陽錄』の記述が、かなりの信憑性をもつものであることを示唆している。

すなわち同書によれば、志佐純本には四人の男子があり、長男太郎は、平戸の松浦弘定の婿となり、松浦興信と名乗って平戸の領主となった。そして二男純次が志佐氏を嗣いで、いたん陣の内城主となり、三男を江迎の深江の地に据え深江純忠と名乗り、そして四男の桃野定治が世知原に居を据えた。そのうち深江純忠は長兄の松浦興信と連合して、直谷城に拠っていた志佐純次を攻めてこれを降した。そこで純次は家督を嫡子純正に譲り、自らは法体となり、宗舜と号して隠棲した。天文頃（1532～1554）のことかと思われる。その後、純正の嫡子純量が直谷城主となっていた。しかし、彼は平戸勢の圧迫に苦しみ、直谷城を脱して山代（佐賀県伊万里市）にあったが、永祿九年（1567）十二月二十三日、当時直谷城主となっていた純正の弟（純量の叔父）純元を攻め、これを陣の内城に迫って自ら直谷城主となった。しかし純量は、今度は龍造寺隆信から同年晦日に攻められた。実は純元は隆信の婿となっていたのである。純量は肥前高来郡に逃れたが討取られてしまった。その首は直谷往還に晒されたという。

その後、直谷城主は志佐純元から純高・純昌へと推移した。ところが純高は秀吉の命によって朝鮮に出陣中に戦死した。その後、江戸時代に入った元和元年（1615）、一国一城令が公布されて、直谷城も近世体制のもと幕府の命によって破却されたものとみられる。そして寛永二年（1625）、平戸藩政下において御厨の地に移居させられてしまった。

注

- (1) 外山幹夫「松浦党に関する一考察」（『中世日本の諸相』下巻）。
- (2) 中村栄孝『日鮮関係史の研究』上、431ページ。
- (3) 永享八年は、通常1436ADとして扱われる。しかし、十二月二十九日の時点では太陽暦ではすでに1437ADにかかっているので、この様に記した。
- (4) 注(3)同様の趣旨から、1392ADではなく1393ADとして取扱った。
- (5) これら志佐氏一族の各年にわたる通交貿易の詳細について述べることは、本稿の狙いとするところではなく、かつ膨大な記述となるので、これ以上記すのは控えたい。この部分の詳細については、外山「松浦党のすがた」（松浦市役所）を参照せられたい。
- (6) これらについては、外山・高島忠平『日本城郭体系』17、長崎・佐賀、79ページ。
- (7) これらについても、早く前掲93ページで或る程度触れている。
- (8) 注(3)同様の趣旨から、1566ADとせず1567ADとした。

II. 調 査

1. 調査経緯

町当局において、直谷城を史跡公園として環境整備して公開・活用したいという構想がありそのための基礎資料を得るために3箇年の調査が計画された。その内容としては、1次調査は詰めの城といわれる山城本城の地形測量調査。2次調査は山城本城の発掘調査。3次調査は山城本城の麓に想定される根小屋（居館跡や屋敷跡）の発掘調査である。

1次調査は町単独事業で、昭和63年8月1日～8月12日の12日間、縮尺1/250の平板測量を実施した。精密な図面で遺構を地形的におさえ城の縄張（なわぱり）・構（かまえ）を把握することが主たる目的であった。測量調査の結果、城の縄張が大づかみにとらえられ、新知見もつけ加えられた。ただ、地形が複雑で、新しく遺構が発見されたことから次年度へ地形測量を残すこととなった。本丸、大手門付近で、中国製輸入陶磁器が23点表面採集された。13世紀後半から14世紀前半の青磁碗1点以外は、16世紀明代の白磁皿と染付碗である。

2次調査は平成元年度の国庫補助事業で町教育委員会が主体となり、山城本城の範囲確認調査を平成元年7月17日～8月11日まで21日間実施した。

本城の縄張は、大守台跡、本丸、二の丸等がある主郭と近世城郭の大手に相当する谷間の追手郭に大別される。

2次調査の当初の計画では、主郭・追手郭ともに発掘トレンチを設けて発掘調査を行い、前年度に残された追手郭の補完測量を行なう予定であったが、伐採作業で各種の防護施設が発見されたことにより測量の範囲が広がり、発掘は主郭に限定せざるを得なかった。

発掘トレンチは、本丸に5箇所、二の丸に2箇所、天守台跡に1箇所、橹台跡に1箇所の計9箇所を設定し、235m²を発掘した。発掘トレンチにはA～Iのアルファベットを付している。発掘の結果、以下に述べるような成果があった。

- ① 主郭の発掘調査では、9箇所全ての発掘トレンチに柱穴等の遺構が検出され、出土遺物から16世紀代を中心とする掘立柱建物群が存在したことが明確となった。また、柱穴は多数群在するところから、建物は一時期のものではなく、数次にわたって立て替えがあったことが推測された。
- ② 追手郭では、従来の知見に加えて、種々の防護施設が発見され、城の備えがかなり複雑な構造をもっていたことが判明した。平場・堅堀①付近は、今回の調査では充分に測量できなかつたが、2次以降に補完調査を行なうことになった。
- ③ 2次調査では1,900点程の遺物が出土したが、圧倒的に多いのは土器・陶磁器であった。緊張時の施設である山城跡から、中国製の輸入陶磁器が大量に出土したことは驚きであったが、中国製の輸入陶磁器をみてみると、16世紀代のものが大半を占めることから、この時期に集

中してこの詰めの城が利用されたことを物語っている。

また、前回の調査で出土していた13世紀後半～14世紀前半頃の青磁よりも古い、11世紀後半～12世紀初め頃の白磁が出土したことにより、城の初源が遡ることになった。

3次にあたる平成2年度の調査は、前年度に引き続き国庫補助を得て、町教育委員会が主体となり、平成2年7月19日～8月10日の21日間実施した。

3次調査の目的は二つあり、山城の麓に存在すると考えられる領主館と武家屋敷跡を発掘して確認を行なうことと、追手郭から追手道付近を伐採し地形測量を行なうことであった。

発掘トレンチは、2m×5mを14箇所、3m×4mのトレンチを1箇所の計15箇所152m²を発掘した。発掘トレンチには主郭の発掘トレンチと区別するため1～15の算用数字を付している。発掘の結果、中世の土器・陶磁器を中心とした650点程の遺物が出土した。発掘区域は大別すると、山城の東麓付近（第1～7、10・11トレンチ）、北小学校付近（第8・9トレンチ）、祥雲寺付近の南麓（第12～15トレンチ）の三地区に分けられる。

発掘調査において、山城東麓に中世期の建物群の存在が明らかになり、武家屋敷の可能性をもつことが考えられるが、領主館については、断定できる資料の確認には至らなかった。また、測量調査においても、新たな防御施設や遺構が確認され、山中にはまだ未発見の遺構が存在することが考えられた。

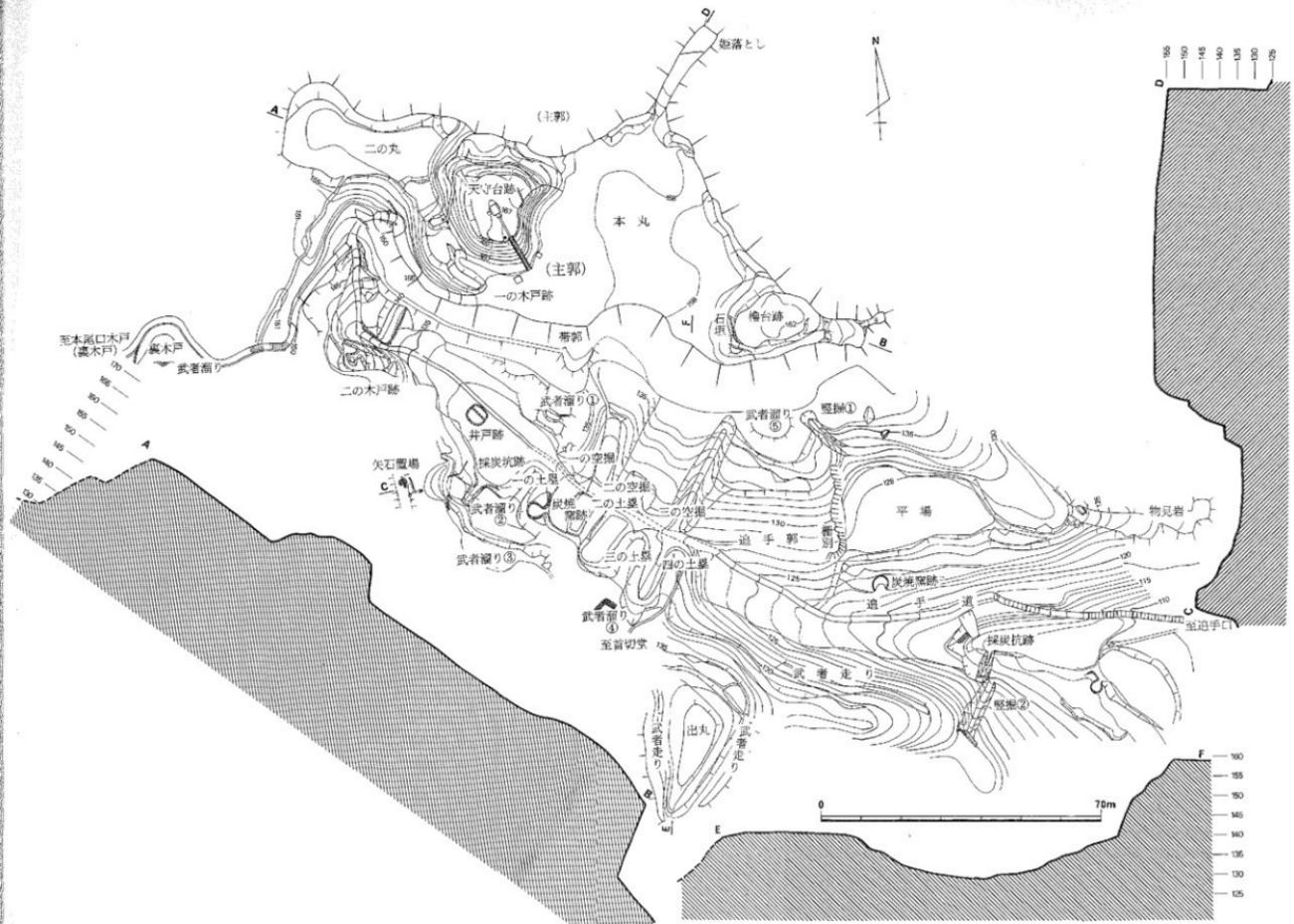
（村　川）

2. 測量調査

(1) 1次調査〔昭和63年度〕

從来の知見に加えて新発見の遺構や事象が確認されるなどの成果がみられた。以下、成果について記述する。

- ① 1次調査の伐採作業によって、本丸中央部にある天守台跡の西側に、幅約60m長さ約140mほどの平坦な平場が発見された。これは二の丸としてとらえられよう。
- ② 天守台跡の頂部には内裏神社が祀られ、東側に石段がある。これは近世（安政五年）に造られたもので、裏側にあたる西側がむしろ傾斜がゆるやかになっている。したがって、こちらが天守台頂部への本来の登り道と考えられた。
- ③ 主郭から揚手（からめて・城の裏門）への道は、現在整備されている遊歩道ではなく、二の丸から尾根ぞいに続く道であることが確認された。
- ④ 主郭南側の谷にある土壘は従来3本としてとらえられていたが、伐採した結果4本あり、土壘間が3条の空堀になっていることが確認された。また、土壘の根本部には数箇所の平場（武者溜まり）が認められた。
- ⑤ 本丸、大手門付近で、中国製輸入陶磁器が23点表面採集された。13世紀後半から14世紀前半の青磁碗1点以外は、16世紀明代の白磁碗と染付碗・皿である。青磁は一点であるが、寛



第4図 直谷城跡地形測量図（1/1,000）

元年間（1243～1247年）に築城されたといわれている年代に近い資料として注目される。また、16世紀代の資料が多いことは、城郭としての利用がこの時期に集中していたことを示唆しているように思われた。

（2）2次調査〔平成元年度〕

追手郭の補完測量のために伐採を行なったところ、土塁両翼や南側の砂岩の断崖上等に矢石置き場等の防御施設が発見され、複雑な構成をもっていることが明らかになった。以下、2次の調査で発見された施設について記述する。

- ① 一の土塁の北側の基部に少し小高い平場が確認された（武者溜まり①）。これは5m×7mほどの広さがあり、南端には径10cmほどの小穴が五個ならんでおり、合戦時の旗差穴の可能性を吉福清和氏が指摘された。平場の南端は、簡単な野面積みの石垣で固めている（図版6）。
- ② 本丸の南端から落ちる崖の中位に帯郭がある。壁状の砂岩の基盤に梁を渡す穴が4個穿ってあった（図版6）。また、この場所から二の木戸跡の上まで絶壁の中位をめぐる形で幅50cm、長さ60mほどにわたって連絡路が通じている（帯郭）（図版5）。
- ③ 一の土塁の南側基部には、北側の武者溜まり①に対応する武者溜まり②と③がある。また武者溜まり③に通じる連絡路には砂岩を掘りこんで階段が造られていた（図版7）。
- ④ 南側の砂岩の断崖上には人頭大の玄武岩を多数集積した場所が発見された。これは南側の谷筋から攻めてくる敵や、追手郭に攻め込んだ敵に対する“矢石”を置いた所と考えられる。（図版7）。
- ⑤ 武者溜まり④の東側には首切堂へ通じる小道があるが、この部分は尾根状の丘陵を掘り切って造ってある（図版8）。
- ⑥ 武者溜まり⑤の東側に長さ13m、幅4mほどの堅堀①があり、また出丸の東側にも堅堀②が発見された。現時点で2条の堅堀が確認されている（図版8）。
- ⑦ 堅堀②の南側に東西35m、南北20m程の平場が発見された。四の土塁の外側下方に存在するため、城の機能とどのような関係をもっていたのか、今のところ明瞭でない。
- ⑧ 追手郭には含まれないが、主郭から元尾口へ至る裏木戸道に、裏木戸武者溜まりがあり、この平場の西側には谷筋から攻めてくる敵に対する防護壁として造られた石垣が発見された（図版5）。

（3）3次調査〔平成2年度〕

3次調査では、追手郭の平場周辺から下の部分約8,000m²の地形測量を実施し、伐採によって新しい遺構の発見があった。

以下、3次調査の成果について述べたい。

- ① 首切堂へ行く尾根を掘り切った場所の南東部分に出丸が発見された。これは、尾根の丘状に盛り上がった部分の頂部が平らになっているもので広さは80m²ほどある。また、この出丸の東と西の両側にそれぞれ幅2m、長さが東側25m、西側が35mある“武者走り”が確認さ

れた。これは南側の谷筋から攻めてくる敵に対しての防衛線の意味があるものと思われる。

- ② 堅堀②から四の土塁にかけても幅2mの“武者走り”が確認された。途中が切れている部分があるものの、これは急傾斜地であるため崩落したことも考えられる。

また、この“武者走り”は、尾根筋の連絡路（登城路）の可能性もあるが、現時点でははつきりしない。

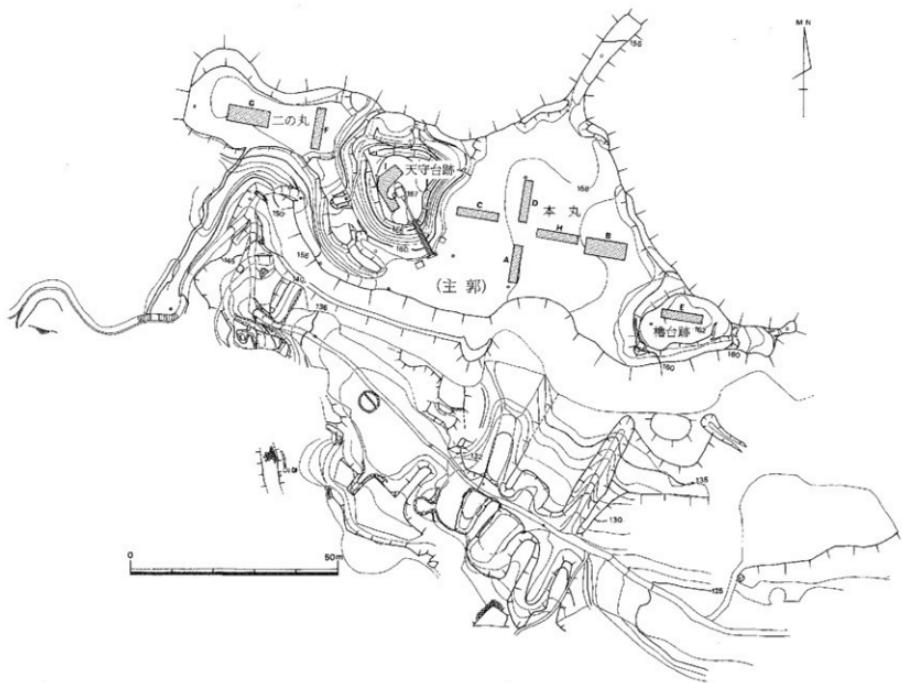
- ③ 平場の西側の大きな岩の上に径10cm内外の大きさの穴が20個ほど確認された。この穴は南北方向に一直線に並んでおり、部分的に2列に並んでいる部分もある。また、東西方向にも並んでいる（図版8）。この小穴の列は柵列の跡と思われる。

- ④ 平場の東側部分で、先端の岩の上まで連絡路があるのが確認された。岩の上には遺構らしきものは発見できなかったものの、見晴らしが利くところから、下からの敵に対する物見岩的な性格をもつものと思われる（図版8）。

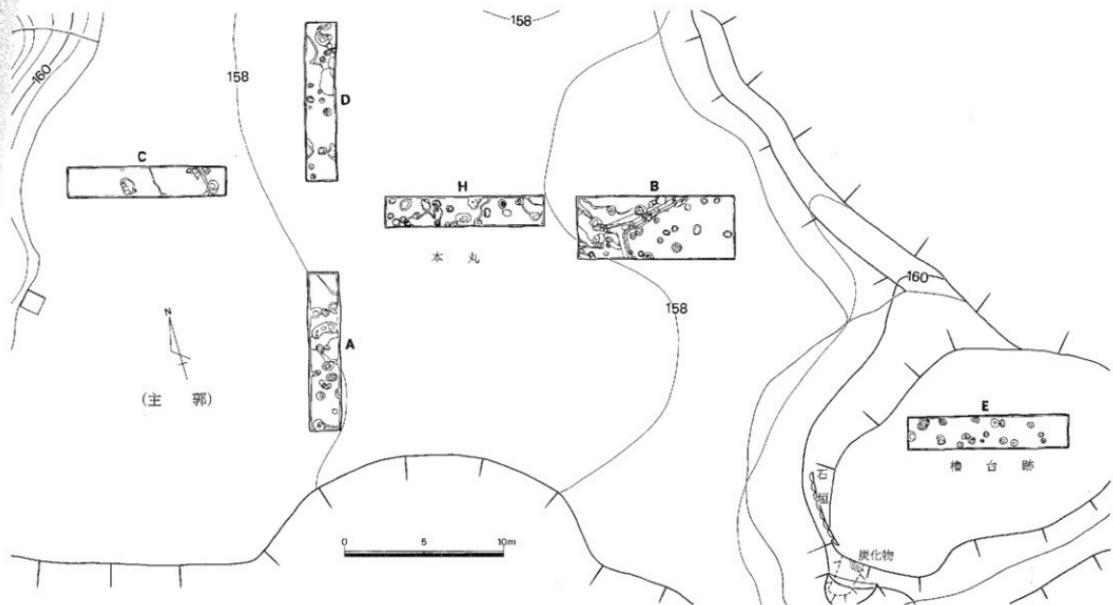
- ⑤ 堅堀②の南東部20m程の所に谷筋に降りていく為の、砂岩を掘り込んだ石段が発見された（図版36）。この石段を降りて谷筋を横切る道を辿っていくと出丸がある尾根の下方まで通じている。この山道の性格は不明であるが、この道の途中に採炭抗跡が発見されたことから石炭を運び出した運搬路だとも考えられるが、山城の使用時に使っていた道を再利用していた可能性もある。

以上、述べてきたように1、2次の調査でわかつていた防衛施設の他にも、3次調査によつて出丸、“武者走り”、柵列、物見岩等の遺構が確認され、今次の調査でも地形測量までは至らなかつたが、平場の北東の山中にも堅堀が確認されており、他にも未発見の遺構が発見される可能性がある。

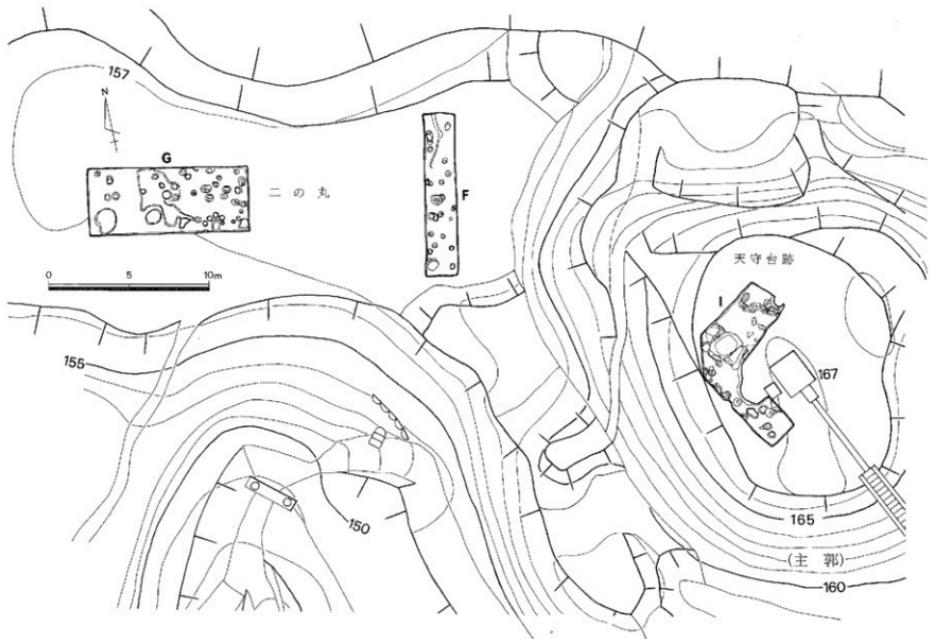
(村川)



第5図 主郭地区（A～I）トレンチ配置図（1/750）



第6図 主郭地区(本丸、櫓台跡)遺構検出状況



第7図 主郭地区（二の丸、天守台跡）遺構検出状況

3. 発掘調査

(1) 主郭地区

① 遺構

本丸に5箇所、二の丸に2箇所、大守台跡に1箇所、櫓台跡に1箇所の計9箇所の調査トレンチを設定し120m²を発掘した。トレンチには、発掘した順番にアルファベットのA、B、C……Iをついている。

本丸は、2,000m²余の平場で5箇所の調査トレンチを設定し120m²を発掘した。設定の仕方は、本丸中央の任意の基準点から東西南北それぞれの方向に十字形にトレンチを配置した。Bトレンチは、砂岩の基盤を掘り込んだ柱穴や溝が検出されたので、2m×10mのトレンチを倍の4m×10mに拡張し、また中央とBトレンチの間にHトレンチを追加設定した。

Aトレンチ

中心の基準点から南方向に伸ばしたトレンチである。最初は表土から30~40cm掘り下げて、柱穴を1か所と不定形の落ち込みを検出したが、次のBトレンチで砂岩の基盤を掘り下げた柱穴等が多数検出されたため、もう少し掘り下げたところ、その下から14箇所の柱穴が検出された。トレンチの幅が2mと限定された狭い範囲であるので建物の規模等はわからないが、建物の角の部分と思われる。建物の方向としてはBトレンチの溝の方向と同じ方向になる。土鍤が出土。

Bトレンチ

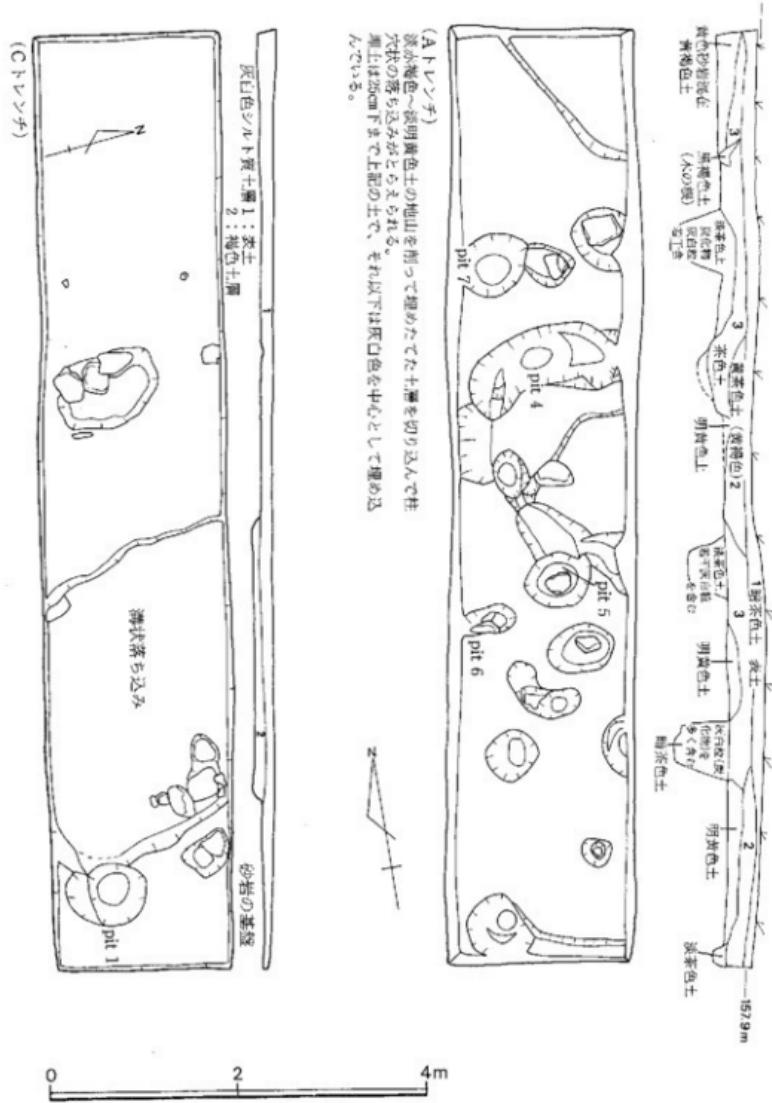
表土を20cm程剥がした段階で砂岩の基盤に当たり、その基盤に柱穴が掘り込まれていた。大小合わせて21箇所の柱穴を確認したが、第9回にやや太い線で示した大小10箇所の柱穴は掘削具の跡が縦に多数の条痕となって残っていた(図版10)。また、この砂岩の基盤を掘り込んで東西に走る溝と、それに直交する形で南北に走る溝が接続している。この溝を上からみるとT字形をしている。東西に走る溝の底面はU字形をしていてツルツルしている。南北に走る溝の底面はJ字形で平らになっている。東西に走る溝はレベル的に東側が低く、東の方へ排水していたものであろう。また、この東西に走る溝の上端には、石が溝の上端にそろえて基盤の上にのっており(S1~S6)、溝中の石も、溝の瀬に並べてあったものが落ち込んだ可能性が大である。柱穴の中の石は柱を支える石の可能性有り。柱穴の中の覆土には砂岩のブロックを含んでいる。

Cトレンチ

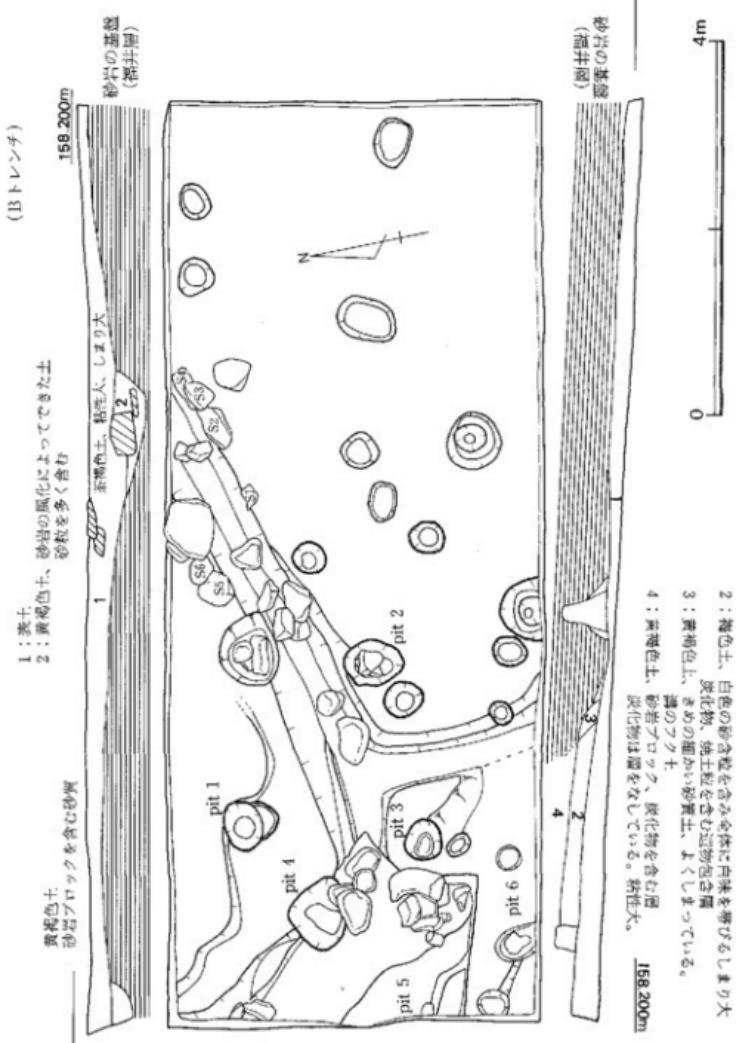
表土を10cm剥がした段階で砂岩の基盤に当たった。確実に柱穴と思われるものは東端のものだけである。この柱穴も砂岩の基盤を掘り込んでいて掘削具の跡が縦に走る多数の条痕として残っていた。この柱穴の西には幅1m50cm程の南北方向の溝状落ち込みが検出された。深さは10cm程で浅く、平らである。

Dトレンチ

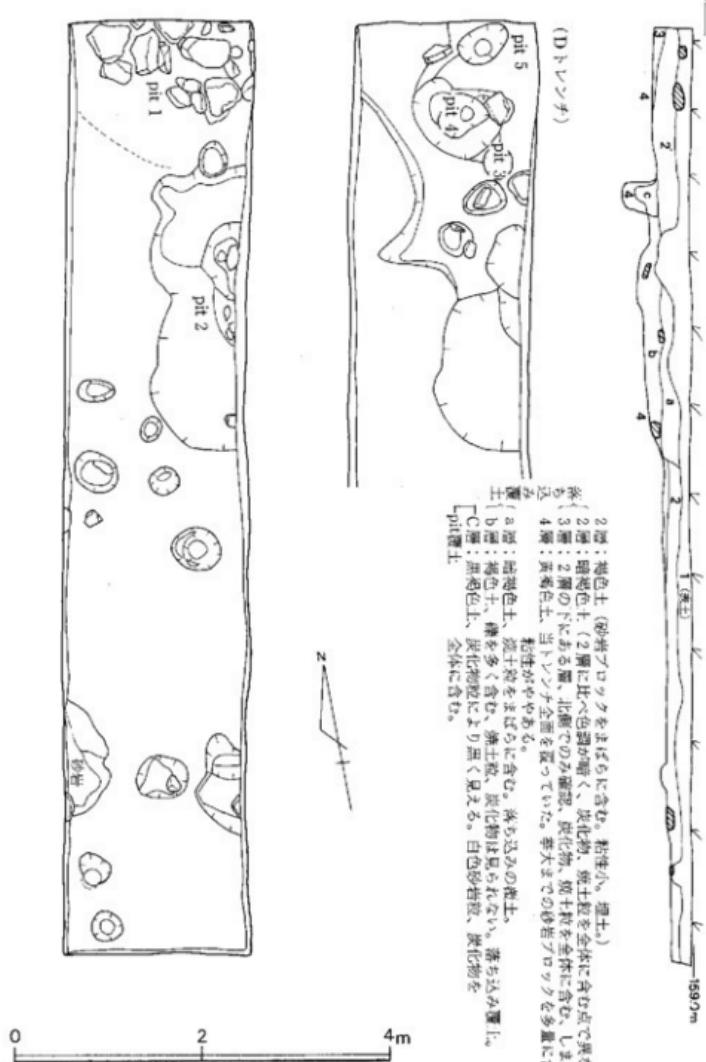
中心から北側に伸ばしたトレンチである。表土から20~30cm掘り下げた段階で、最初の10箇所の柱穴、北半部に落ち込み、集石を検出した。そして北端に検出した集石を除去したところ、



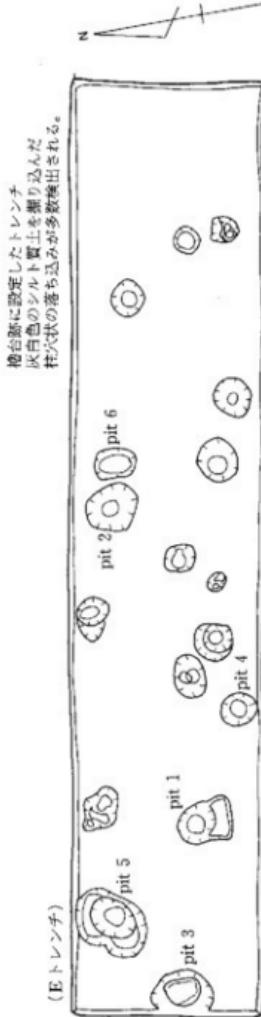
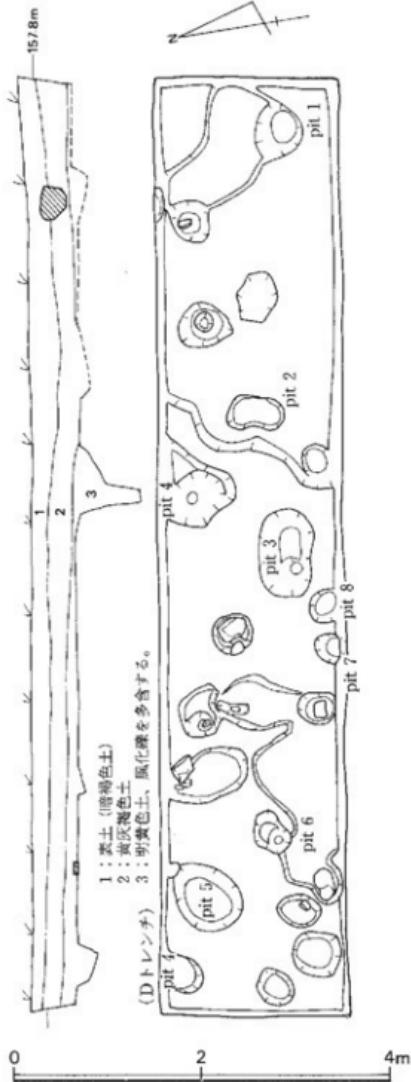
第8図 A、Cトレンチ遭構検出状況（1/60）



第9図 Bトレーニング構造検出状況 (1/60)



第10図 Dトレンチ遺構検出状況 (1/60)



第11図 H、E トレンチ遺構検出状況 (1/60)

その下からも柱穴を5個検出した。

Hトレンチ

中心の基準点とBトレンチの間に設定したトレンチである。Bトレンチで多数の柱穴や溝を検出したので設定した場所であるが、やはり多数の柱穴、落ち込みを検出した。このトレンチは、表土から50~60cm、柱穴の深いところで1m17cm程掘り下げているが、砂岩の基礎には当たっていない。鉄釘、鉄滓等を出土。

以上の発掘結果より、本丸の平坦面のそれぞれ東西の端にあたるB、Cトレンチでは砂岩の基礎に当たったものの、A、D、Hの中央のトレンチでは砂岩の基礎には当たらなかったところから、この中央部は元々は狭い谷状に埋んでいたものと思われ、この埋んだ面を埋め立てて本丸の平坦面を造成していることが判明した。

二の丸は、天守台跡西側にある東西37m、南北20m程の平場で、南側には裏木戸への小道がつけられている。F、G2箇所のトレンチを設定し、60m²を発掘した。灰白色のシルト質土の基盤（本ヶ浦凝灰岩層）に柱穴が掘り込まれており、特にGトレンチは多数の柱穴が検出され、遺物の出土も多くみられた。

Fトレンチ

二の丸の東端、天守台跡のすぐ下に設定したトレンチ。地表より20cm程掘り下げて大小18箇所の柱穴を検出した。南端に1辺が70cm程の大きさの石が検出されたが楚石かどうかは不明。

Gトレンチ

二の丸の西寄りの位置に東西を長軸として設定したトレンチ。最初は2m×10mのトレンチであったが、柱穴が多数検出され、遺物の量も多いことから4m×10mに拡張した。多数の柱穴と落ち込みを検出したが、建物の規模等を特定するまでには至っていない。柱穴が一列に並んでいるのはわかるが、いくつかの時期にわたって重複して建てられているとみられ、今の段階では建物の規模等を特定するのは無理のようである。

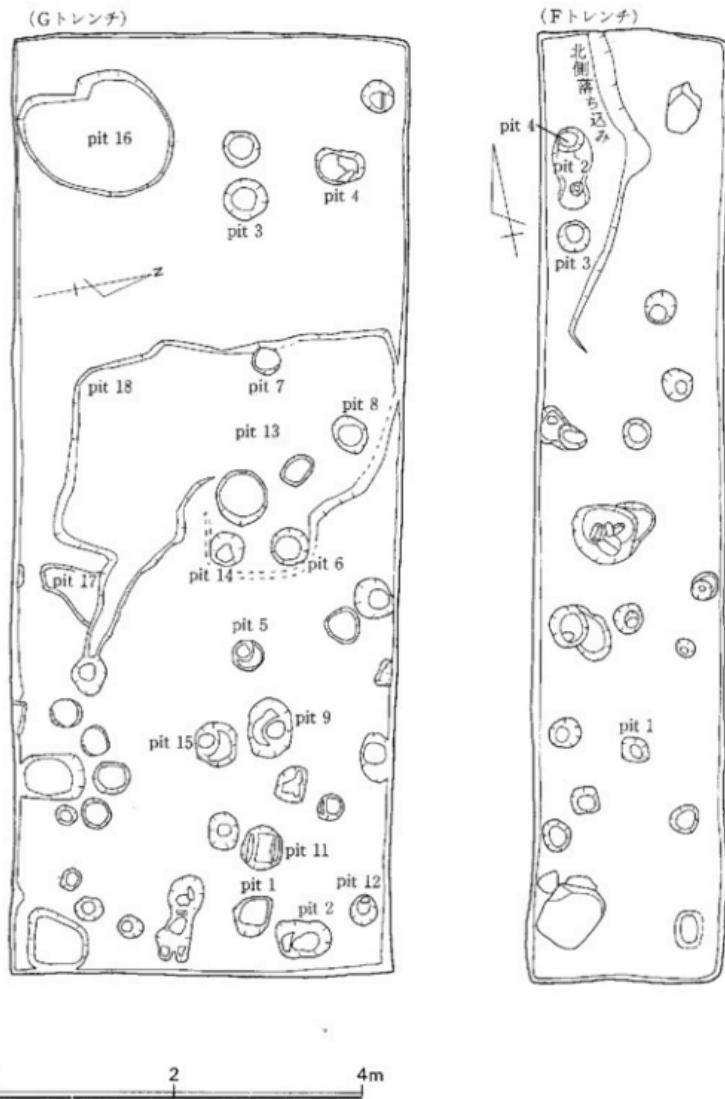
Eトレンチ

櫓台跡には東西軸のEトレンチを設定し、20m²を発掘した。その結果、灰白色のシルト質土の基盤（本ヶ浦凝灰岩層）を掘り込んだ柱穴等が17箇所検出された。列状に柱穴が並ぶようにも観察されるが、2m幅では建物の規模等は不明である。また、南西部の櫓台跡の裾の部分の表土を剥いで石垣を出したが、その際、表上下に炭化物が断面の1m幅にみられたが、中世期のものか明確でない。

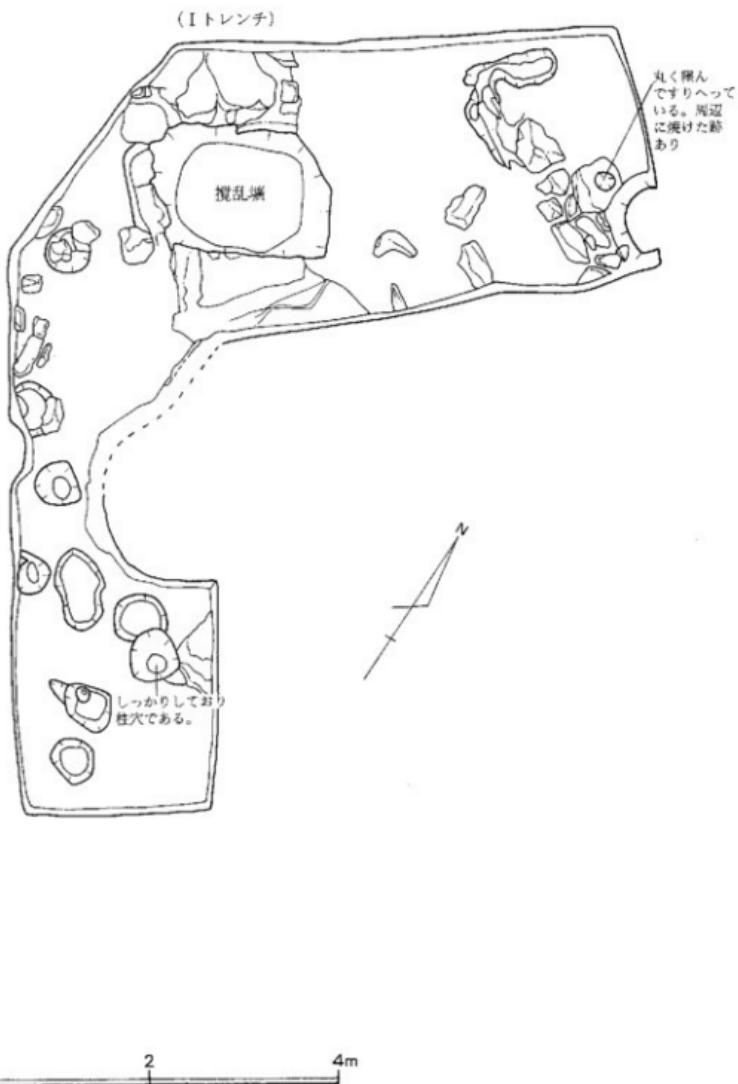
Iトレンチ

大守台跡には、安徳天皇の祠があるので、鍵の字形にIトレンチを設定し35m²を発掘した。その結果、10箇所の落ち込みを検出したが、明確な柱穴として捉えられたのは1箇所にすぎなかった。また、西隅には昭和30年代に盗掘されたという長さ1.8m、幅1.3mの隅丸方形形状の落ち込みがあり、ごく最近のものとみられる陶磁器やガラス製品のかけらが入っていた。

(村 川)



第12図 F、G トレンチ遺構検出状況 (1 / 60)



第13図 I トレンチ遺構検出状況 (1/60)

② 遺物

A. 中世の土器・陶磁器（第14～21図）

主郭地区から中世の土器・陶磁器は、昭和63年～平成2年度の調査による出土資料（第14～19図）と、昭和41年に城内から採集され教育委員会に保管されていた資料（第20・21図）を加えると、1,826点が出土している。そのうち、調査分102点、昭和41年採集分17点を図化した。

以下、その内容について検討を行ないたいが、説明にあたって遺物番号は、調査分が1～102、昭和41年採集分が第20・21図1～17とする。

中世土器・陶磁器は、輸入陶磁器と国産土器・陶器に大別され、さらに輸入陶磁器は主体を占める中国製品と僅かな量が出土した朝鮮製品に区別される。中国製品から説明を行いたい。

a. 中国製輸入陶磁器

種類別にみると、青磁、青白磁、青花、白磁、その他の磁器、陶器類がある。

イ. 青磁（1～18、第20図1・2）

碗I（1・4） 1は、鍋手蓮弁文碗の口縁部片。明るい灰緑色のガラス質釉がかかる。森田勉・横田賢次郎氏分類（以下、森田・横田分類とする）の碗I-5 b類である。13世紀後半～14世紀前半代の資料である。この木戸北方にある鳥居付近で、昭和63年に採集。4は、剣頭状の蓮弁をもつ小碗で、灰緑色のガラス質釉がかかる。幅狭の蓮弁であり、14世紀～15世紀前半代の資料であろうか。GトレンチI層出土。

碗II（2・3） 片切彫りで蓮弁を描くが、先端が弧線となり、幅狭になっている。2・3ともに明るい緑色のガラス質釉がかかり、貢入がはいる。小野正敏氏分類（以下、小野分類）の碗B'群で、15世紀代の資料であろう。両者ともにHトレンチで、2がピット2、3がピット7から出土している。

碗III（5・6） 線刻で蓮弁を描くが、非常に幅狭で退化した蓮弁をもつ小碗で、6は弧線も明瞭でなくなっている。小野分類の碗C群で、15世紀後半～16世紀代の資料である。両者ともにGトレンチI層から出土している。

碗IV（8・9・11～14、第20図1） 外面が無文の明代碗を一括した。8・9・11は幅広で低い高台をもつもので、9と10は厚手の作りである。9は、全面に釉がかかり高台内を蛇目状に剥ぎ取っている。12～14は、幅狭の比較的高い高台で12・13はいわゆる竹の節高台の形状をもつ。12の見込には、花弁のなかに福の字が型押されている。9はBトレンチ西側落ち込み、11・12はGトレンチI層、8はHトレンチI層、13はHトレンチII層、14は櫓台跡石垣付近から出土している。14世紀後半～16世紀代に包括される資料である。

第20図1は、灰緑色のガラス質釉が厚くかかる資料で、8や9のような底部が付くことが推測される。14世紀後半～15世紀代の資料であろう。

碗V（7・10） 口縁に電文帯をもつ碗であるが、明確な電文帯を有するものは認められなかった。7は、浅い身の碗で、電文帯が退化し波状文になっている。明るい灰緑色のガラス質

軸がかかり、見込に圓線が巡る。10は、胴下半に幅広の蓮弁がはいるもので、見込には陽刻の圓線内に草花文が型押しされている。明るい灰緑色のガラス質軸が前面にかかり、高台内は蛇ノ目状に剥ぎ取られている。小野分類の碗B群で、14世紀後半～15世紀前半の資料であるが、7は退化形であり15世紀後半まで下る可能性が高い。7はBトレンチI層、10はHトレンチのII層出土。

皿I (17) 口縁が模花になった浅い身の高台付皿である。17は、腰部で屈曲しさらに口縁が短く外反する形態や厚手作りの皿である。細かい気泡を含んだ薄い緑色のガラス質軸がかかり、青白磁風の釉色である。Bトレンチの溝内出土。これより薄手の作りで、口縁が長く外反し、内面に2条の沈線を巡らすのもBトレンチの西側落ち込みから出土している。後者は、15世紀前半に位置づけられ、前者(17)はそれよりやや年代の下る資料であろう。

皿II (15・16) 口縁が端反りの高台付皿である。全形が判る16は、見込に段を有し、高台疊付に珪砂が付着している。15は薄い黄緑色のガラス質軸、16は灰緑色のガラス質軸が前面にかかり、両者ともに質入が著しい。15はEトレンチI層、16はFトレンチ北西落ち込みから出土。類似した器形の白磁との対比からみると、15世紀後半～16世紀の資料であろう。

皿III (18) 内外面に溝状の彫り込みを入れ菊花形皿としたもの。細かい気泡を含んだ薄い緑色のガラス質軸がかかり、一見青白磁のような釉色である。16世紀代の資料であろう。18はEトレンチのピット5から出土している。

皿IV 図化していないが、型押しによる菊皿が櫛台跡石垣付近から出土している。花弁が2cmほどの幅があり、先端は丸く波状におさめている。薄い緑色のガラス質軸がかかり、上品な作りである。皿IIIとともに16世紀代に位置づけられる資料であろう。

皿V 図化していないが、型押しによる菊皿が櫛台跡石垣付近と、Dトレンチピット1から出土している。前者は、花弁の幅が2cmほどあり、先端を丸く波状におさめている。薄い緑色のガラス質がかかる上品な作りである。後者は、花弁が1.5cmほどの幅の小形品である。皿IIIとともに16世紀代に位置づけられる資料であろう。

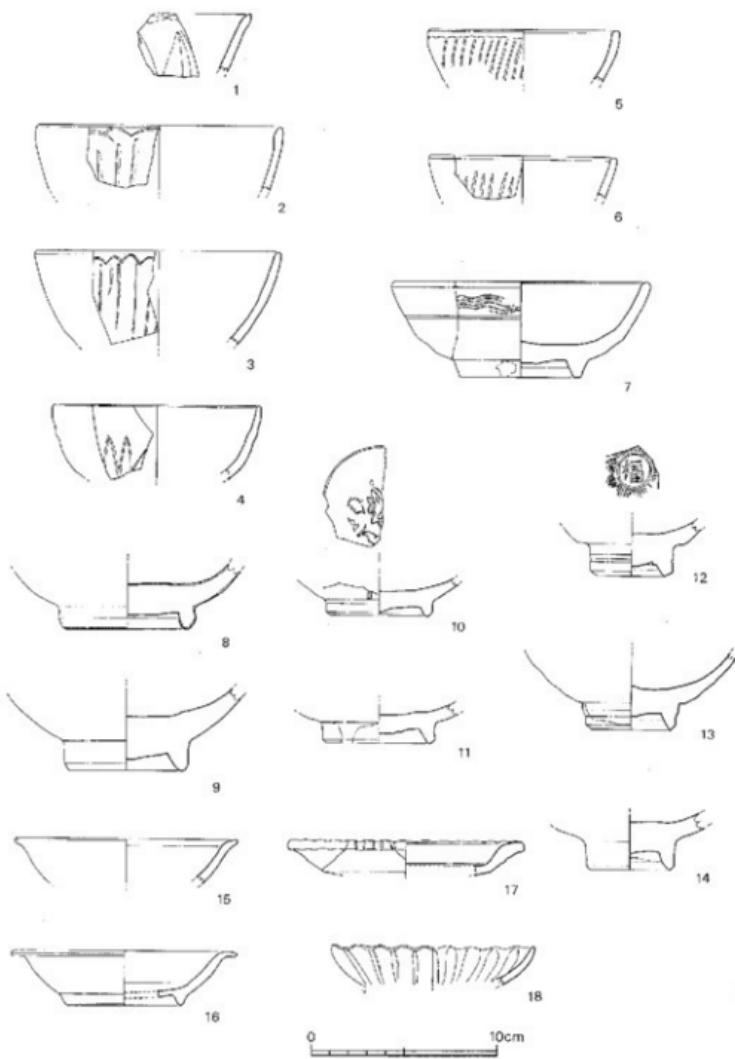
杯I 口縁が外溝する高台付杯で、外面に片彫りの蓮弁文を施し、明るい緑色のガラス質軸がかかる。森田・横田分類の杯III-4b類の系譜を引くものであるが、片彫りの蓮弁文であり、14世紀後半～15世紀前半に包括される資料と考えられる。HトレンチのII層から出土。

香炉 (第20図2) 香炉は3点出土しているが、形状が判るのは第20図2だけである。3足の香炉で、胴下端に3条の沈線を巡らす。内面と底部を除いて淡い緑色のガラス質軸がかかる。底部は軸が削り取られている。足外面には陽刻文様が施されている。

ロ. 青白磁

碗 脇部小片であるため図示していない。黄胎で、極く薄い緑色のガラス質軸がかかる。青に含めて考えるべき資料かもしれない。Dトレンチのピット4から出土。

ハ. 青花 (19~67、第20図3~14)



第14図 主郭地区出土上器① (1 / 3)

碗II (19~23、第20図3) いわゆる蓮子碗で、胴部は内窓気味に開き、見込が高台内に凹む器形である。小野分類のC群である。淡青色を帯びるガラス質釉がかかる白灰色系の精良な胎土のもの (19・20・22、第20図3) と、黄胎でそのほとんどが黄緑色釉色のもの (21・23) に細分することができる。前者をII a類、後者をII b類とすれば、II a類が16世紀前半代、II b類は16世紀後半代を中心とするようである。20と23はEトレンチI層、19はHトレンチI層、22はHトレンチ北側落ち込み、21はDトレンチのピット2から出土している。

碗III (24~27、29~31、第20図4~7) 見込が盛り上がるいわゆる鶴頭心の碗 (小野E群)⁽²⁴⁾ と同様の形状をもつ丁寧な作りの碗を含める鈴木秀典氏の考えに従つた。碗IIに比べると、胴が開かず小ぶりで薄手の上質なものが多い。24はDトレンチI層、25はGトレンチI層、26はBトレンチのピット1、27はBトレンチI層、29はDトレンチピット2、30はBトレンチ、31はGトレンチI層から出土している。16世紀後半代に位置づけられる資料である。

碗IV (32~34、第20図8) 灰白色の釉色で、圓線を巡らすだけの碗で、碗III類に比べるとぶ厚く粗雑な作りである。高台疊付には硅砂が付着している。34は、見込を蛇ノ目状に削ぎ取っている。32と33はGトレンチI層、34はGトレンチのピット10から出土している。

碗V (35) 黄胎の粗雑な作りの碗である。鈴木氏の碗G群に相当する。35は、同一個体と考えられる口縁部と底部を組合させて復原実測したものである。淡黄濁釉がかかるが、胴下半から底部は露胎。見込は圓線内に草花文を描くが吳須は青黒く発色が悪く、露胎部分の圓線は暗褐色を呈している。Bトレンチの西側落ち込み等から出土している。16世紀後半代の資料。

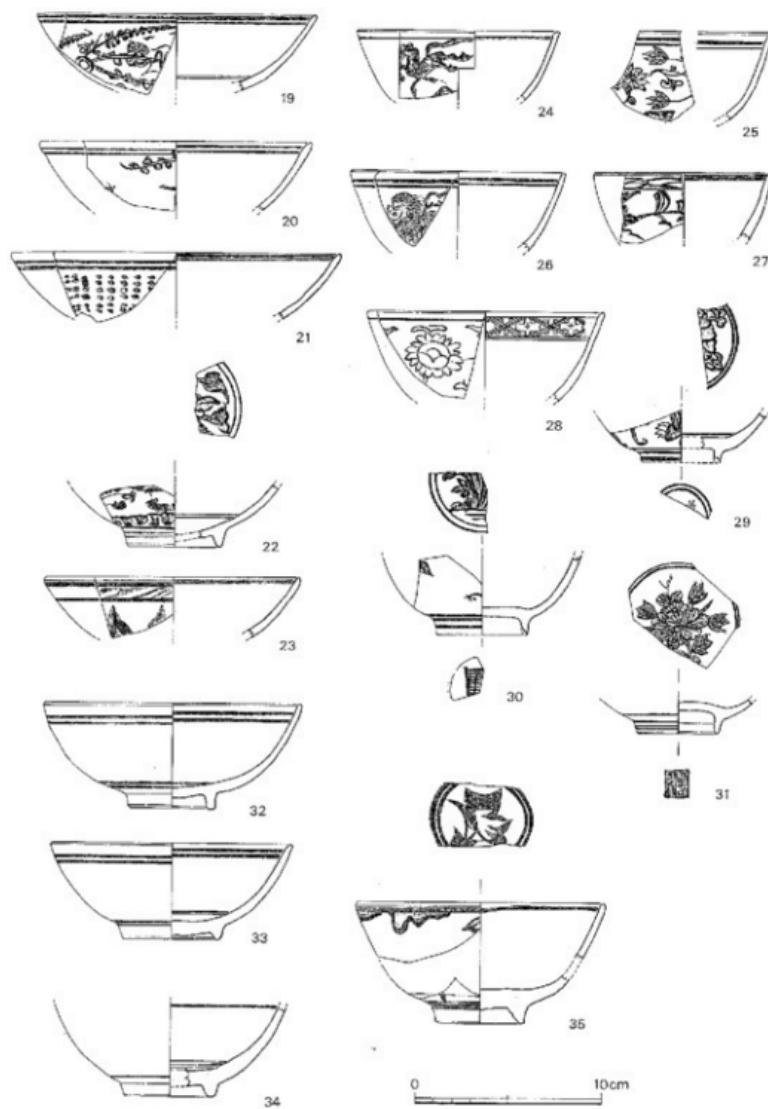
碗VI 小破片であるため図示していない。口縁が端反りで繊細な文様を描く薄手作りの碗である。鈴木氏の碗B₁群で、16世紀後半~17世紀前半代に包括される資料であろう。

碗VII (28) 丁寧な作りの碗で、碗III類と同様な形状をもつが、胴外面に細かい線刻りの文様を施している。28は、外面に圓線と内面に四方擇文を染付で描いている。年代的には、碗III類と同様に16世紀後半代の資料と考えられる。GトレンチI層出土。

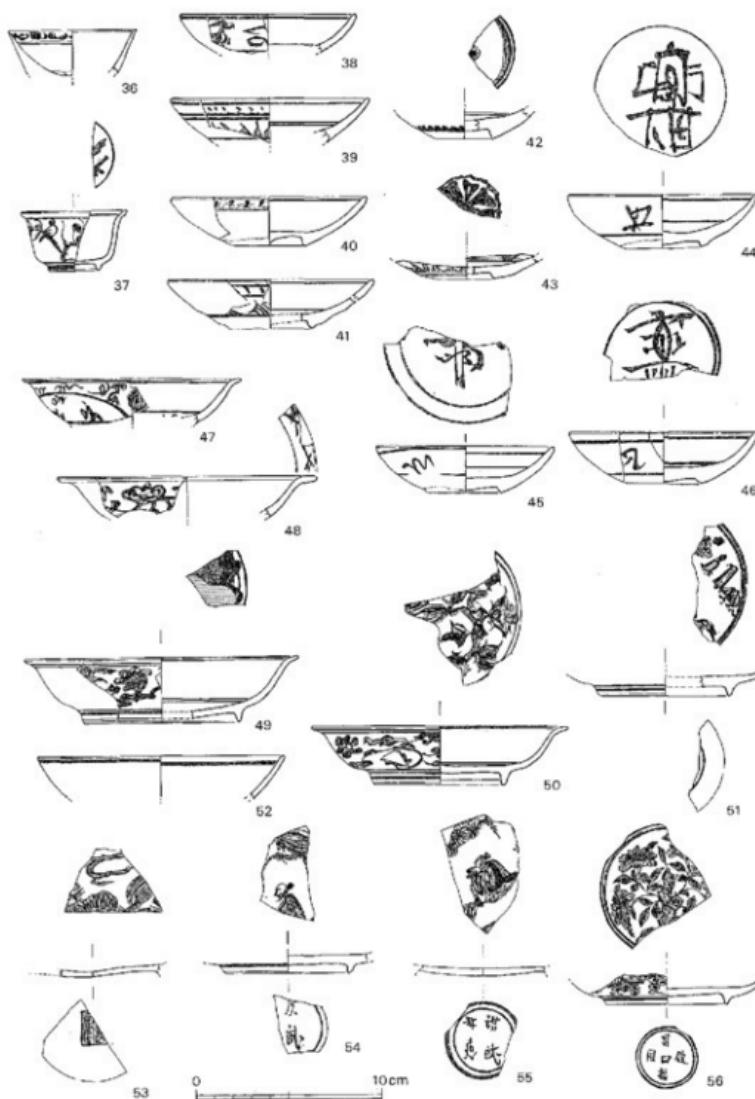
皿I (47~51) 口縁が端反りの高台付皿で、小野分類の皿B群である。小野氏はB₁群とB₂群に細分しており、47・48がB₁群、49~51がB₂群に該当する。15世紀後半~16世紀代の資料である。49の見込には、二次的な火熱によって釉が溶け黒くなった部分が認められる。47・50・51はGトレンチI層とピット8、48はCトレンチから出土している。

皿II (40~46、第20図9~11) 内窓気味に口縁がおさまる基筒底の皿で、小野C群である。胎土が白灰色のもの (43~45、第20図10) と黄胎のもの (42・46、第20図9・11) に分けられる。前者をII a類、後者をII b類とする。II a類は15世紀後半~16世紀前半代、II b類は16世紀~17世紀前半代に包括される資料である。42・45・46はGトレンチI層、43はEトレンチI層、44はFトレンチのピット1から出土している。

皿III (52~56、第20図12・13) 胴部が内窓気味に開く浅い身の高台付皿で、薄手の上質な作りのものが多い。小野分類の皿E群であり、16世紀後半~17世紀前半代の資料である。見込



第15図 主郭地区出土土器② (1 / 3)



第16図 主郭地区出土土器③ (1 / 3)

には、54・55、第図13が人物、53が雁、56が太湖石と牧丹を描かれている。52はBトレンチ西側落ち込み、53はBトレンチ、54はGトレンチI層、55はFトレンチ北西落ち込み、56はBトレンチI層から出土している。

皿IV (64) いわゆる「つば皿」で、小野分類のF群である。64は、口縁部に宝文と葉を描いている。BトレンチI層出土。なお、口縁端部が桜花になったものがDトレンチI層から出土している。典型的な芙蓉手皿は出土しておらず、16世紀後半代におさまる資料であろう。

皿V (60~63) 器形は皿III類に類似するが、ぶ厚く呉須の発色が悪い、いわゆる呉須手皿ともいわれるものである。いずれもGトレンチI層から出土している。16世紀末~17世紀前葉の資料であろう。

皿VI (第20図14) 口縁が端反りの高台付皿であるが、文様は圓線だけで粗製黃胎のものである。14は、白黄濁釉が内面から底部外面までかかるが、見込を蛇ノ目状に剥ぎ取っている。16世紀後半代の資料であろうか。

皿VII (58) 型押の菊皿の高台内に染付圓線を描くもの。58はEトレンチのピット4出土。16世紀後半代の資料であろう。

皿VIII (57) 丸みをもつ胴で、口縁が小さく外湾し、端部が楓花になっている。繊細な文様を描き上品な作りである。GトレンチI層出土。16世紀後半~17世紀前半にかけての資料。

皿IX (59) 型押しによって洞が角をもつ八角皿である。繊細な文様を描き、皿III類に対応する資料であろう。GトレンチI層出土。16世紀後半~17世紀前半の資料。

杯I 小片であるために図化していない。Hトレンチ出土品は、腰部で屈曲している。

盃 (36・37) 36は洞が直線的に立ち上がり、口縁端部が極く小さく外反する。口縁部付近には波頭状の文様を描くが、にじんでいる。37は、腰が丸味をもち、口縁は外湾し、外方にやや肥厚している。外面に樹に止まる鳥が描かれている。36はGトレンチI層、37はEトレンチI層出土。

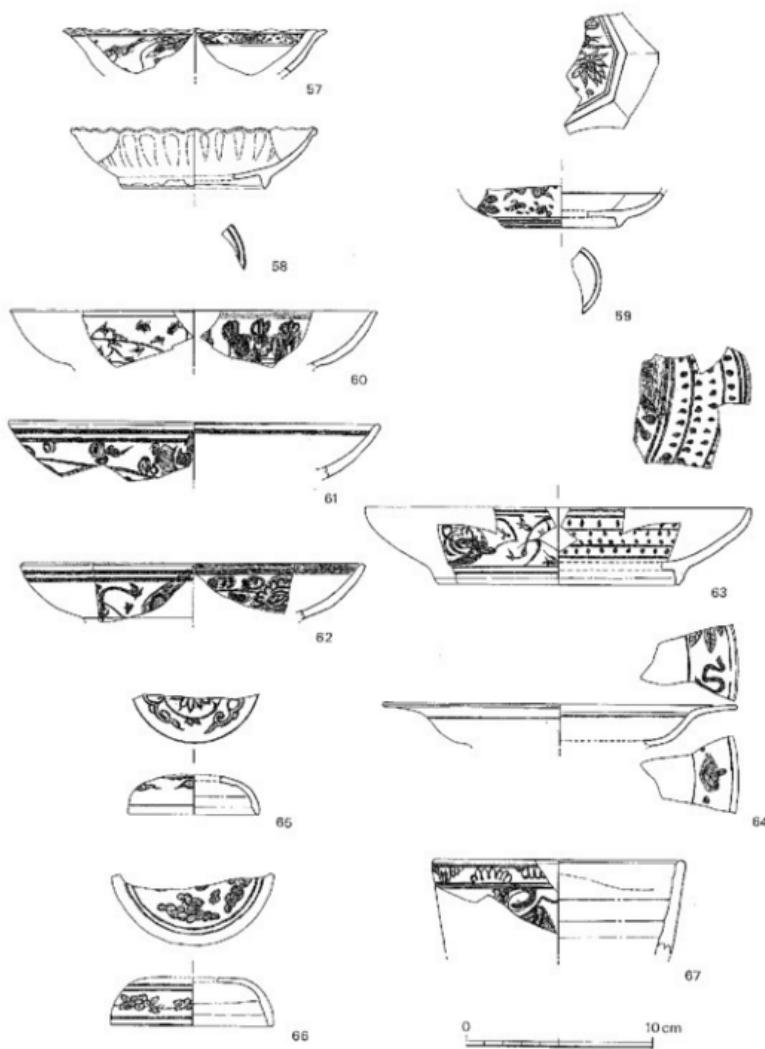
合子 (65・66) 両者ともに合子蓋で、天井部に團花状の文様、66は体部に折花文様を配し、口縁から内面にかけ釉を削り取っている。65はEトレンチのピット3、66はBトレンチ溝内出土。16世紀代の資料であろう。

番炉 (67) 直線的な胴で、口唇は肥厚氣味で丸くおさめている。内面は上端を除いて露胎である。外面には、力強いタッチで文様を描くが、破片が小さく何を描いたのかよく判らない。Bトレンチ西側落ち込み出土。

瓶 EトレンチI層から1点出土している。淡橙色の胎上で、内外面に薄い灰青色釉がかかり、外面の染付文様は明瞭でない。

長方形器蓋 HトレンチI層から1点出土している。平坦な口縁から内面にかけて、淡青色のガラス質釉を削り取っている。外側面にはうず巻状の文様を描いている。

ニ、白磁 (68~79、第21図15)



第17図 主郭地区出土土器④ (1 / 3)

碗 I (68) 口縁部を小さく外反させ、端部を水平にするもので、森田・横田分類の碗V類である。GトレンチI層から1点出土している。11世紀中頃～12世紀前半代の資料である。

碗 II (69) 内湾気味に開く胴部の腕で、薄手で口縁は尖り気味におさめている。16世紀代の資料であろう。69はGトレンチI層から出土している。

碗 III (70) 薄い灰黄色系のガラス質釉がかかる白磁鉄絵碗である。外面は、下端に細沈線が1条めぐり、花びら状の鉄絵が飛び青磁風に描かれている。内面は陽刻によって、草花状？の文様が白く浮きでている。HトレンチのII層から出土している。

皿 I (73～78、第1図15) 口縁が端反りの皿で、小野分類のIII C群である。15世紀後半～16世紀代の資料で、73～78はいずれもGトレンチから出土している。

皿 II 小片であるため図示していないが、型押しによる菊花形皿で、小野分類の皿D群である。16世紀後半代の資料であろう。

皿 III (72) 内湾気味に胴が開く基筒底の皿である。森田勉氏分類（以下、森田分類）の皿E-3である。72は、底部付近だけ釉を削り取っている。15世紀後半～16世紀前半代の資料であろう。Bトレンチ溝内出土。^(註3)

皿 IV (79) 胴が内湾ぎみに立ち上がる高台付皿であるが、胎土が灰色で貫入が著しいものである。16世紀後半代の資料であろうか。GトレンチI層出土。

盤 小片であるため図示していない。黄胎で貫入の著しい大皿である。HトレンチI層出土。

杯 I 小片であるため図示していないが、尖り気味の高台から直接口縁に向かって外反する器形で、森田分類の杯E-2である。16世紀代の資料であろう。

杯 II 東麓地区で良好な資料がでているが、杯Iと類似した器形だが外面に溝状の彫りを施し、口縁が稜花になるものである。やや緑色を帯びたガラス質釉がかかる。16世紀代の資料であろう。

盃 (71) 薄手作りの高台付盃である。見込は蛇ノ目状に剥ぎ取られている。16世紀代の資料であろう。

ホ、その他の磁器 (80・81)

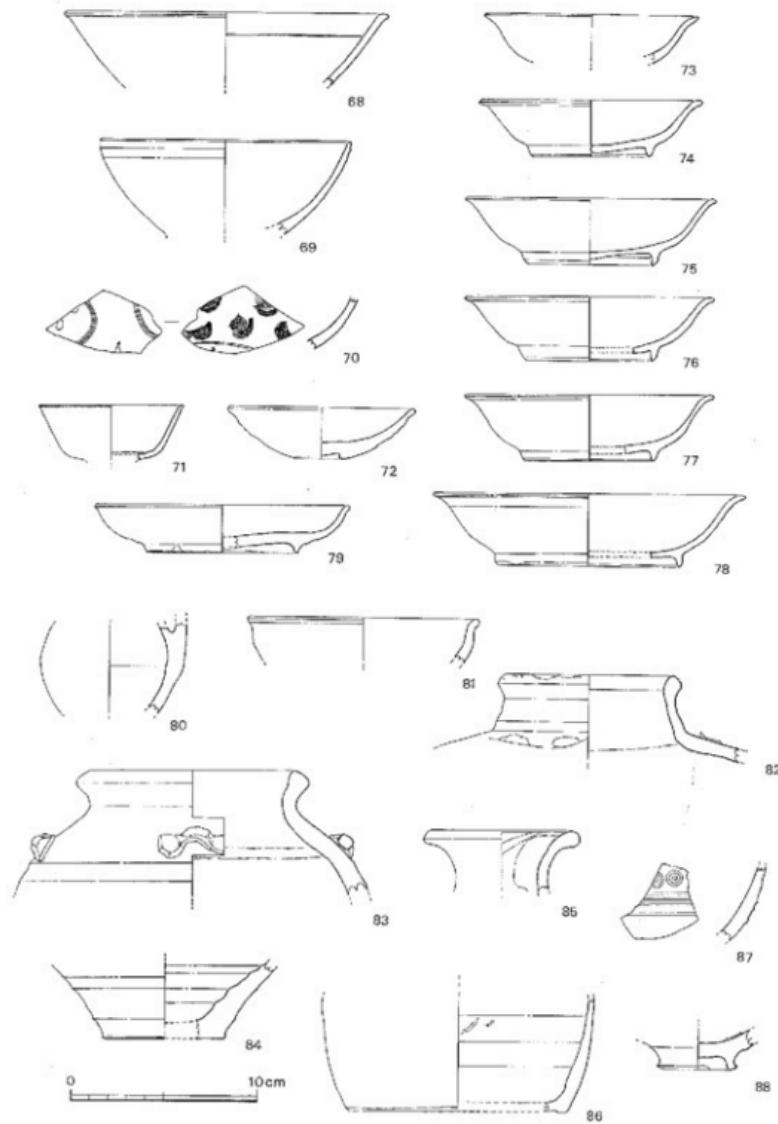
赤絵 小破片であり同化していないが、外面あるいは内外面に赤絵文様をもつ碗である。薄手の上品な作りで、外面にだけ赤絵文様を描くものは内面に染付の四方揮文をもつ。

褐磁 外面に褐釉がかかる端反りの盃である。HトレンチI層から1点出土している。

瑠璃釉磁 (80) 外面に瑠璃釉がかかる小形の水注であろう。縦形の把手が残っている。HトレンチI層から出土。

天目磁 (81) 極暗赤褐色（黒柿色）～暗赤褐色の天目釉がかかる碗である。胎土がにぶい橙色であり、国産の瀬戸・美濃の可能性をもつが、硬質の胎土であり、中国製とした。Bトレンチから出土している。

ヘ、中国製陶器 (82～84、第21図16) 瓢・壺・瓶・鉢などの器種に、黒釉、褐釉、綠褐釉、



第18図 主郭地区出土土器⑤ (1 / 3)

黄褐釉がかかるものと、無釉の焼きしめのものがある。82～84は、煮で、82・83は四耳壺であろう。82・84は黄褐釉、84は焼きしめである。第21図16は面取りした玉縁をもつ鉢であろうか。内面に褐釉が薄くかかる。他に、綠釉の小壺、青釉合子、三彩紅皿があり、紅皿は交趾三彩と思われる。82はFトレンチ北西落ち込み、83はGトレンチピット6、84はHトレンチI層から出土している。

b. 朝鮮製陶磁器 (85～88)

朝鮮製品として抽出したものは53点にすぎず、粉青沙器と薄手の陶器がある。

イ. 粉青沙器

碗 (87) 内面に○文と圓線が白象嵌されるもので、HトレンチII層から1点だけ出土している。

ロ. 陶器

碗 (88) 88は灰釉がかかる灰色の色調をもつ碗で、見込に砂目跡がいるIIトレンチ出土。他に長い石釉のかかる白灰色を呈する碗があり、黒色粒のはいる淡黄色のザングリした胎土である。部分的に赤斑がみられる。Gトレンチのピット18から出土している。

皿 図化していないが、暗灰色の胎土に透明のガラス質釉が薄くかかる皿で、高台置付には目跡が付く。DトレンチI層とピット2、IトレンチI層から出土している。

壺・瓶 (85・86) 薄手作りの壺・瓶と考えられ、体上半に褐釉がかかり、下半は露胎になるものであろう。85・86は船底利のような形状になるのであろうか。85はGトレンチI層、86はGトレンチのピット1から出土している。

C. 国產土器・陶器 (89～102)

国産品は、土師質土器、瓦質土器、陶器に分けられ、なかでは土師質の小皿・杯類が主体を占める。

イ. 土師質土器 (89～95)

小皿 (89～91) 点数が多い割に残りの良いものが少なく3点を図化したにすぎない。3者ともに糸切り底部で、橙色を呈する。法量は、89が口径6.5cm、器高1.3cm、底径3.4cm、90が口径7.6cm、器高1.7cm、底径5.0cm、91が口径8.8cm、器高1.9cm、底径6.3cmを測る。89がDトレンチのピット1、90がBトレンチ西側落ち込み、91がHトレンチI層から出土している。

杯 (92～95) 形態的には、比較的身が深いもの(93)、薄手で底部から胴が大きく開くもの(92・95)、ぶ厚い作りで皿とした方が良いもの(94)に分けられる。92は油煙状のスヌが付着している。法量は、92が口径9.8cm、器高2.2cm、底径3.6cm、93が口径9.6cm、器高3.3cm、底径3.5cm、94が口径10.4cm、器高2.0cm、底径7.8cm、95が口径12.2cm、器高2.6cm、底径6.0cmを測る。92～94はBトレンチ西側落ち込み、95がHトレンチII層から出土している。

他に摺鉢と器種不明のものが少量みられる。

ロ. 瓦質土器 (96～101、第21図17)

摺鉢 (96・97) 2点を図示した。96は外面にハケ目が残り、内面の筋目が過度の使用のために減っている。97は口縁内方に突出部をもつものである。96はBトレンチ西側落ち込み、97はHトレンチI層から出土している。

火舎 (98・99) 98は突縁間に菱形と丸文のスタンプ文様をもつものである。99は山形に連續の刺突文を施すもので、外面には部分的にハケ目が残っている。内面は風化しているが細かい横位のハケ目が残っている。98はCトレンチ溝落ち込み、99はGトレンチI層とピット6から出土している。

土鍋 (101) 豊前・周防型土鍋の脚と考えられる資料である。白黄色の色調で、石英砂を多く含んでいる。アミ点の部分は黒斑になった部分である。他に、格子目のタタキをもつ破片があり、同種の資料であろう。101は、HトレンチI層から出土している。

壺 (第21図17) 沈線を巡らす玉線状の口縁をもつ壺である。淡黄色を呈し、あるいは土師質土器に含めるべきかもしれない。近畿地方に類似した資料があるようである。

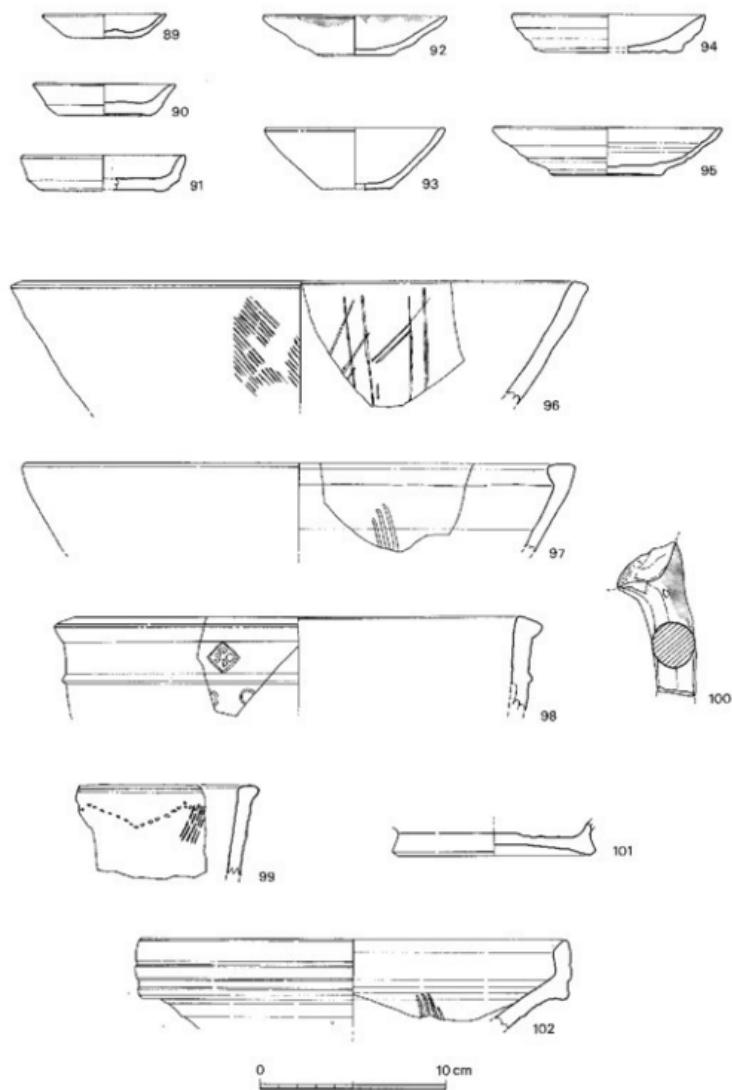
その他 (100) 器種が明確でない円盤状の底部である。外面から外底面は黒褐色だが、内底面は灰褐色を呈する。Bトレンチのピット3から出土している。その他には、壺や湯釜かとも思われる資料もみられる。

二、陶器

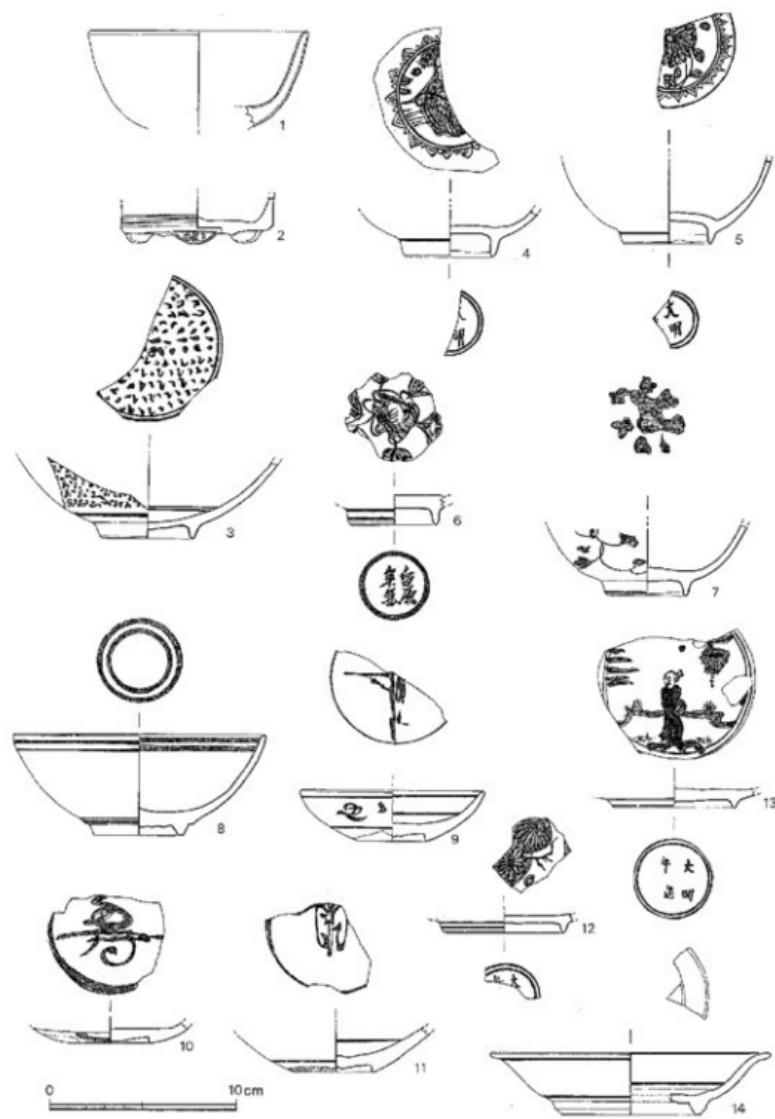
摺鉢 (102) 割と長めの玉線口縁をもつ備前焼の摺鉢である。灰褐色を呈し、白砂を含み、焼成良好である。萩野繁春氏の^(註6)XII期で16世紀後葉～17世紀前葉の資料であろう。GトレンチI層から出土している。

(宮崎)

- 註1 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
2 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982
3 上田秀夫「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究1』関西近世考古学研究会 1991
4 鈴木秀典「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」註3文献。
5 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」註2文献。
6 萩野繁春「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告第25集』国立歴史民俗博物館 1990



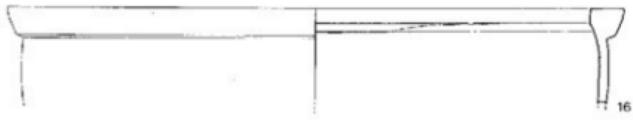
第19図 主郭地区出土土器⑥ (1 / 3)



第20図 昭和41年主郭地区探集資料① (1 / 3)



15



16



17

0 10 cm

第21図 昭和41年主郭地区採集資料②（1/3）

B. その他の遺物（第22・23図）（図版25～27）

管状土錘、鉄釘、不明鉄製品、鉄滓、銅製火箸、滑石製硯、砥石、鉛製釣用錘、銅塊、ガラス玉の破片、ビーズ玉、棹秤用錘、陶器製の人形、石鍋、スタンプ状銅製品、永楽通宝他古錢、ふいごの羽口の破片、石炭塊等が出土している。これらの資料は全どのものが、平成元年度の2次調査で主郭地区から出土した。

管状土錘（1～33） 33点のうち30点がAトレンチから出土している。Aトレンチの内での内訳は、北側落ち込みから5、6、8、9、12、15、18、23、27の8点と、pit 4から1、2、4、7、16、24、31の7点、pit 2から10、20の2点、pit 5から13、30の2点、pit 3から1点、2層から3点が出土している。大きさは、完形のもので小さい方から3の2.2cm 4の2.4cmから大きいもので25の4.6cm、28の4.8cm等である。

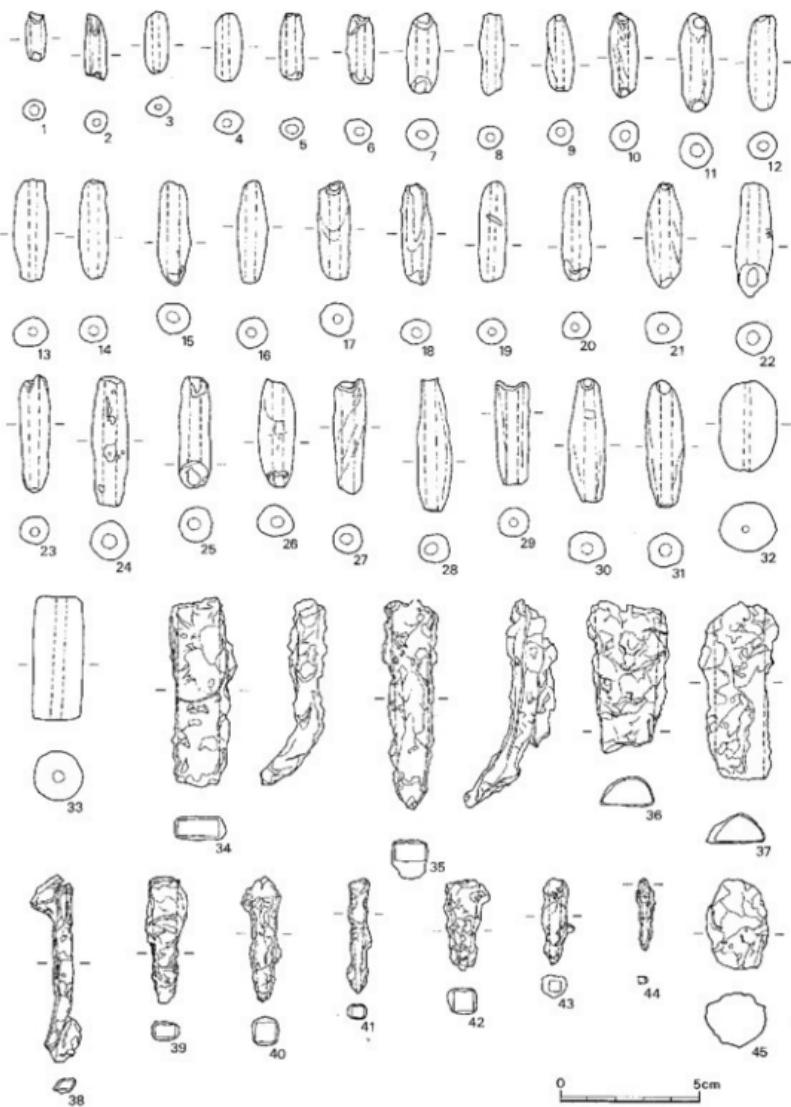
Aトレンチ以外では、11がHトレンチの2層から、32がEトレンチから出土していて、33も同じくEトレンチの1層から出土している。Eトレンチから出土した32、33の資料は他の管状土錘の形態と異なっているところが注目される。

鉄釘他（38～44） 明らかに鉄釘とわかるものをあげた。38は、釘の頭の部分も残っていて尖端部が少し曲がっている。断面は菱形をしている。Gトレンチ、1層出土。40～44の資料は断面が正方形のもの、39は断面が長方形である。34、35も断面は長方形をしていて、鉄釘の大形のものかもしれない。36、37は不明鉄製品である。45は鉄滓。36は断面が半円形である。34は、長さ6.7cm、幅と厚さは鍔の部分を除いた元の部分の断面をきった部分の値で、1.5cmと0.6cm（以下、計測の順序は34に準ずる）。Bトレンチ1層の出土である。35は、7.4cm、1.1cm、0.6cm、Hトレンチ2層の出土である。36は5.4cm、1.8cm、1.9cm、Hトレンチ1層の出土である。37は、6.2cm、1.7cm、0.9cm、断面は三角形、Hトレンチ1層の出土である。38は、6.7cm、0.7cm、0.3cm、Gトレンチ1層の出土。39は、4.5cm、0.9cm、0.5cm、東麓地区Iトレンチのpit 3の出土である。40は、4.5cm、0.7cm、0.7cm、Bトレンチ西側落ち込みからの出土である。41は、4.1cm、0.4cm、0.4cm、東麓地区4トレンチ集石中からの出土である。42は、3.3cm、0.7cm、0.7cm、Hトレンチpit 6からの出土である。43は3.1cm、0.4cm、0.4cm、東麓地区3トレンチ2層からの出土である。44は、2.6cm、0.2cm、0.2cm、Bトレンチ西側落ち込みからの出土である。45は3.2cm、2.2cm、1.9cm、Hトレンチ1層からの出土である。

銅製火箸（46） 現存部のほぼ中央部にギザギザの文様を入れ、その上は断面が方形で、その下は断面が丸形。下端は折損しているが、これより下が空洞だったか、中に気泡があったかで折れたものであろう。現存長19.8cm、幅1.0cm、厚さ0.9cm、Hトレンチ1層の出土。

滑石製硯（47） 内底の中央が窪んでいるのは使用された結果のもので実用品であろう。長さ4.7cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm、Fトレンチ1層の出土である。佐世保市の広田城で類品が出土^{（註1）}している。

砥石（48） 現存部で長さ5.0cm、幅2.5cm、厚さ1.3cm、東麓地区2トレンチ1層の出土。



第22図 主郭地区出土、その他の遺物① (1 / 2)

- 銅塊 (49) 何かの銅製品の現存部かもしれない。Aトレンチ pit 4出土。
- 鉛製釣用錘 (50) 全体の形としては楕円形で中央に糸を通す切目が入れてある。長さ2.0cm、幅0.9cm、厚さ1.1cm、重さ7.9 g、Eトレンチ pit 6出土。
- ガラス玉(51、52) 元々は青色の、中が空洞の直径1.5cmの球体だったと思われる。厚さ1mm。
- ビーズ玉 (53、54) 2点とも直徑0.45cm。
- 鉄製棹秤用錘 (55) 一辺が1.4cm、高さが2.8cmの立方体の上に0.4cmの高さの中に縦通しの穴があいている取手がある。高さは一辺の長さの正確に2倍である。重さは49.7g、50gに0.3g足らないのは下端部の細かな欠損部の為か。上下両端を除いた4面には、「革舟」と「天下一」の刻印がある。「革舟」は「善本」のくずし字。^(註2)なお、この重りの「天下一」という称号は豊臣秀吉が特に許しを与えた腕の良い職人だけが使えるもので、関西では京都の「神善四郎」だけが許されていた。薬品や銀等の貿易品等をはかる時に使われた。長崎市の興善町遺跡で類品^(註3)の出土がある。
- 陶器製の人形 (56、57) 2点は接合しないが、生地や残存部のライトブルーの釉から同一品と思われる。法衣をまとっている所から地蔵尊の人形か。56は、櫓台跡下の石垣から、57は櫓台跡に設定したEトレンチ1層からの出土である。
- 滑石製の石鉗 (58) 推定復原口径は、33.6cm、鐔の削り出しが小さく、断面が三角形に近い。傾きが強く底がすぼまるので、底径は口径の2分の1程になるものと思われる。森田勉氏^(註4)編年のC-2類にあたるもので、空町時代前期から15世紀後半頃まで消費されていたものである。
- スタンプ状銅製品 (図版26の59) 直径25cmの面に「干」の文字を鋳造してある。スタンプ的なものとすると刻印した後は「干」の文字になる。南嶺地区13トレンチ1層の出土。
- 永楽通宝他古銭 (図版27の60~63) 60の永楽通宝は、外径が25.3mm、内径が20.8mm、「永」の字の頭も小さくなくフ画の特徴からしても渡来銭ではないかと思われる。渡来銭だとすると、明代、1408年の初鋤年である。Hトレンチ1層の出土。61、62はGトレンチ1層、63は主郭からの表面採集。
- ふいごの羽口 (図版27の64、65) 64がDトレンチ pit 5からの出土。65はBトレンチ西側落ち込みからの出土である。
- 石歳 (図版27の66) Bトレンチ西側落ち込みからの出土である。

(村 川)

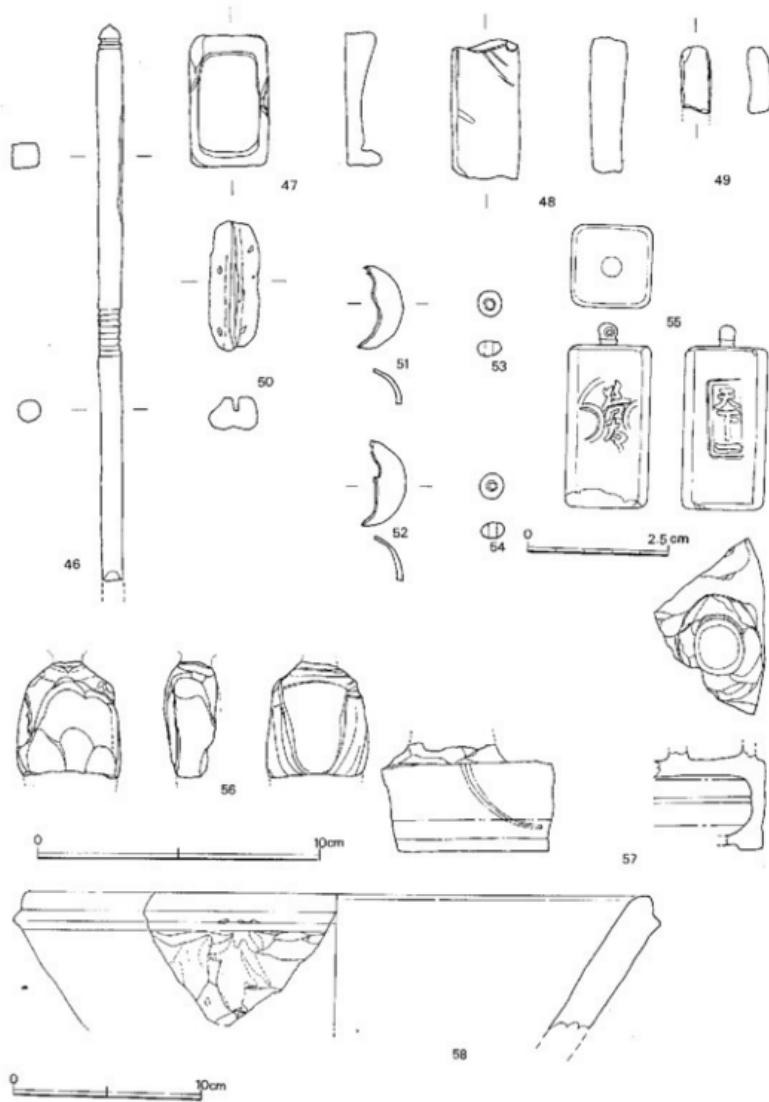
註1 佐世保市教委、久村貞男氏御教示。

2 長崎県立美術博物館、立平進氏御教示。

3 長崎市文化課、水松実氏御教示。

4 森田勉、『滑石製容器』、—特に石鉗を中心として—仏教芸術148号。

5 龜田毅一、『近世の渡来銭』、「出土渡来銭」板諸秀一編、考古学ライブラリー45、ニューサイエンス社



第23図 主郭地区出土、その他の遺物② (1/2) 50~55は (1/1) 58は (1/3)

(2) 東麓地区

山城（本城）の東麓付近は、福井川が形成した河岸段丘地形になっており、現在、宅地や水田、畑地として利用されている。ここには9箇所の調査トレンチを設定した。

① 造構

1 トレンチ

山城（本城）の東側直下、吉本氏宅の裏の水田に設定したトレンチである。地表から25cm程掘り下げて柱穴を確認した。大小12箇所程の柱穴があったが、2m×5mの限定された範囲であるため、建物の大きさ等を確認する迄には至っていない。この1トレンチからは、白磁、明青花、中国製陶器、土師質の小皿、備前の摺鉢等が出土しているが、土師質の皿が37点と出土点数が多く、特にpit 2から定形のものが2点出土したのは注目される。また、この1トレンチの西側13m程の竹林の中には、“御墓”と呼ばれ地元の人々に大切に記られてきた積石塚がある。

2 トレンチ

1トレンチを設定した水田の一段下の水田に設定したトレンチである。やはり、地表から25cm程掘り下げて柱穴を確認した。大小14箇所の柱穴を確認したが、柱穴が深いものは4箇所しかない。出土遺物は無し。

3 トレンチ

県道のすぐそば、上直谷のバス停留所の所に設定したトレンチである。東側に行くにしたがって地形が落ちている。柱穴らしきものが検出されたが、浅く不確定要素が多い。出土遺物としては青磁の碗がある。

4 トレンチ

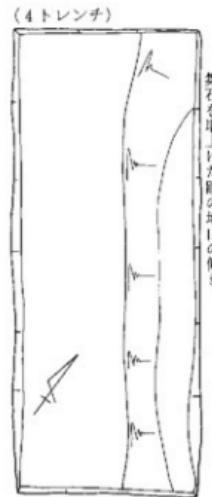
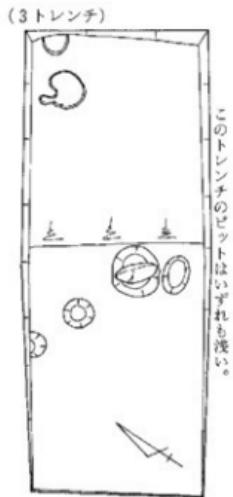
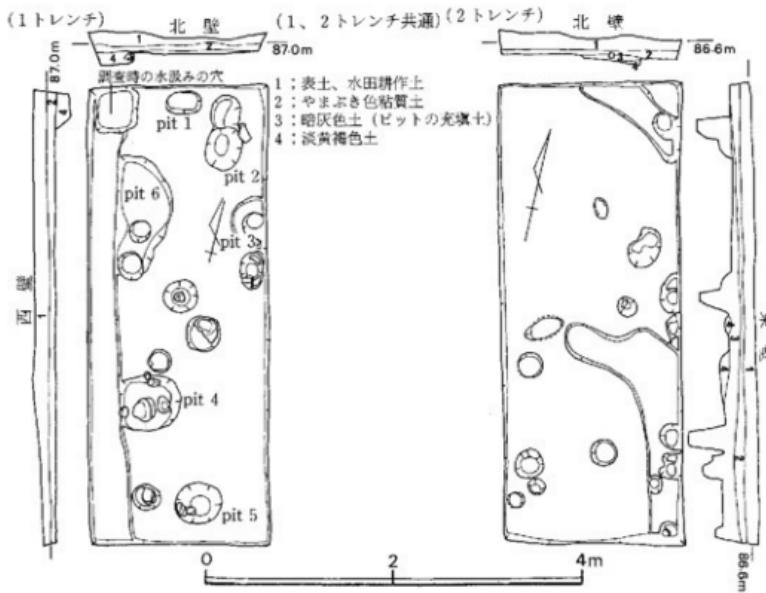
土肥氏宅の前の畑の下に設定したトレンチで、地籍図では赤道（昔からの里道）の場所である。地表から30cm程掘り下げて集石を確認した。最初は畑等で邪魔になった石を捨てた跡かとも思ったが注意して観察してみると1m位の幅で石が並べてあるのがわかった。その石も両端は大きめの石を並べていて、その間に小さな石を詰め込むという方法をとっている。この遺構からは壊れた集石をとりあげていく途中で、中国製の染付皿が出土した。他には近世陶磁器も出土している。この遺構の性格としては、松浦市の櫻階田遺跡で同じような遺構が検出されており、それは、幅1m～1.5m、全長は130mあり、構築方法としては両側に大きな自然石を配置した後に小砾を間に埋めこむ方法を用いて石敷道路状遺構ととらえられており、本遺構も石敷道路遺構の一部と思われる。時期的には不確定。

5 トレンチ

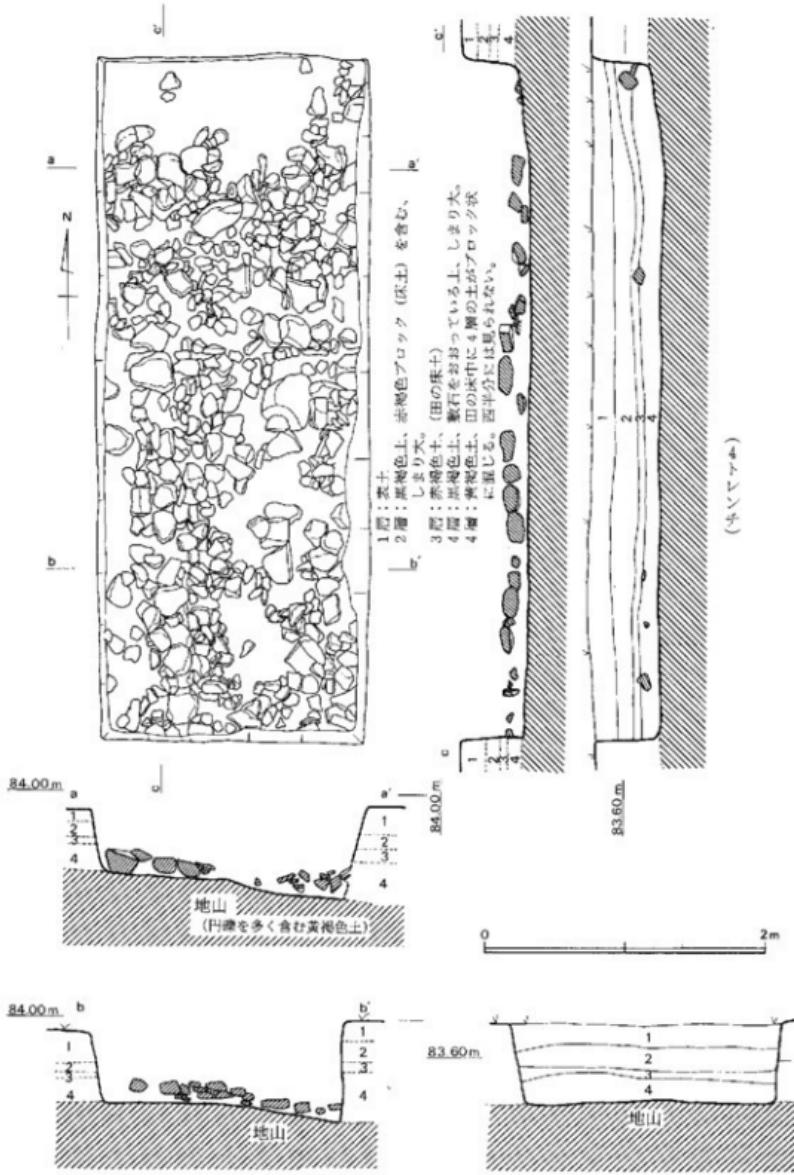
同じように地籍図でいうところの赤道の並びを東南へ20m程移動した場所に設定した。地表から50cm程掘り下げたが、集石は検出できなかった。出土遺物は土師質の小皿、備前の摺鉢等がある。



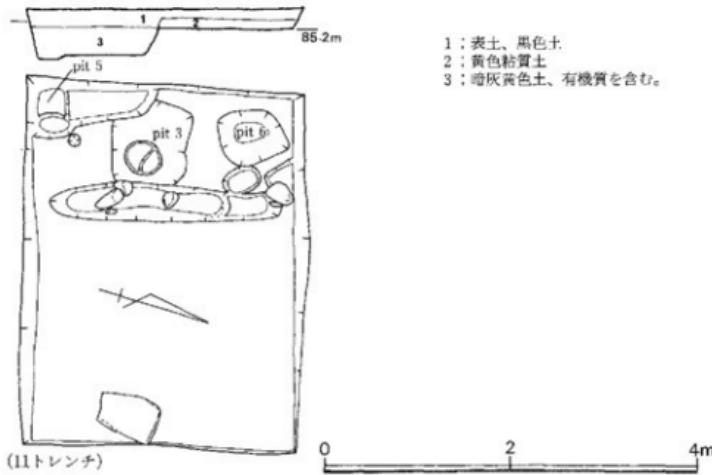
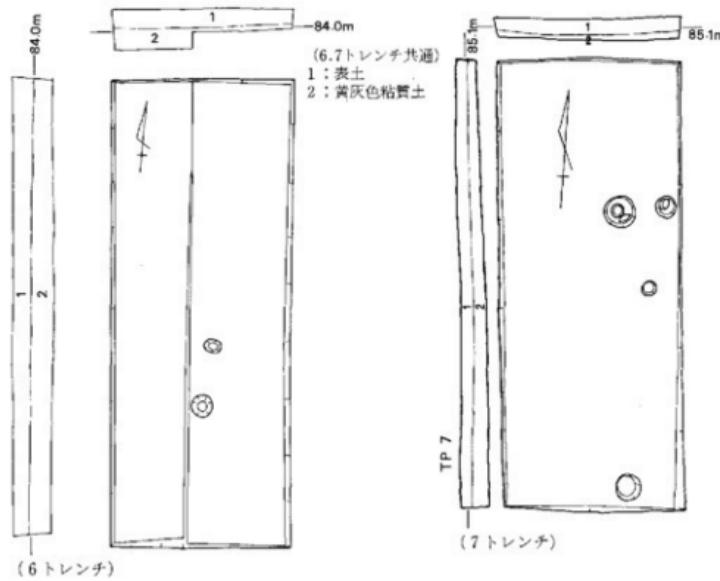
第24図 東麓地区、北小学校地区、南麓地区（1～15）トレンチ配置図



第25図 東麓地区（1～4）トレンチ遺構検出状況（1/60）



第26図 東麓地区 4トレンチ遺構検出状況 (1/40)



第27図 東麓地区（6、7、11）トレンチ遺構検出状況（1/60）

6.7 トレンチ

土肥氏宅の東南部に設定した。小穴は検出したものの柱穴とは思われない。出土遺物としては土師器の皿等がある。

10 トレンチ

6、7 トレンチで柱穴等の遺構を確認できなかったので、山際に寄って設定したトレンチである。地表下50cmで石垣を確認し、その外側を掘り下げて石垣の平面図・立面図を作成した。地表下1m70cm程掘り下げて水が湧出した。泥炭質上層の最下部から曲物と石垣の裏込め石の中から近世陶磁器が出土した。付近の人からの聞きとりによるとこの場所は昔は溜池であったとのことであった。

11 トレンチ

10 トレンチの調査中に、このトレンチの北側の元の豚舎と納屋の間の空地で明の青花等を表面探集したために設定したトレンチである。大きさはこのトレンチだけ 3m × 4m である。地表から25cm程掘り下げて柱穴を確認した。柱穴と思われるもの3箇所の他、長楕円形の柱穴状の落ち込み等が検出された。遺構はいずれも西寄りの位置にある pit 5 より明染、白磁、青磁、土師器等が一括出土している。

以上みてきたように、この東鏡地区では、1、11、トレンチの建物跡の柱穴から、15～16世紀にかけての土師器や中国製の青磁・白磁・染付が出土し、城と関連をもつ建物の存在が明らかになった。また、4 トレンチの敷石道路状遺構からは、中世の中国製の染付皿と近世陶磁器が出土しているが、出土状況等により近世と断定するのは留保しておきたい。中世までにさか昇る可能性もある。10 トレンチの溜池は近世陶磁器が出土したことより近世以降のものであろう。

(村 川)

② 遺 物

A. 中世の土器・陶磁器 (第29図)

東鏡地区では、97点の中世土器・陶磁器が出土している。中国製陶磁器、朝鮮製陶磁器、国产土器・陶器に分けて見て行きたい。

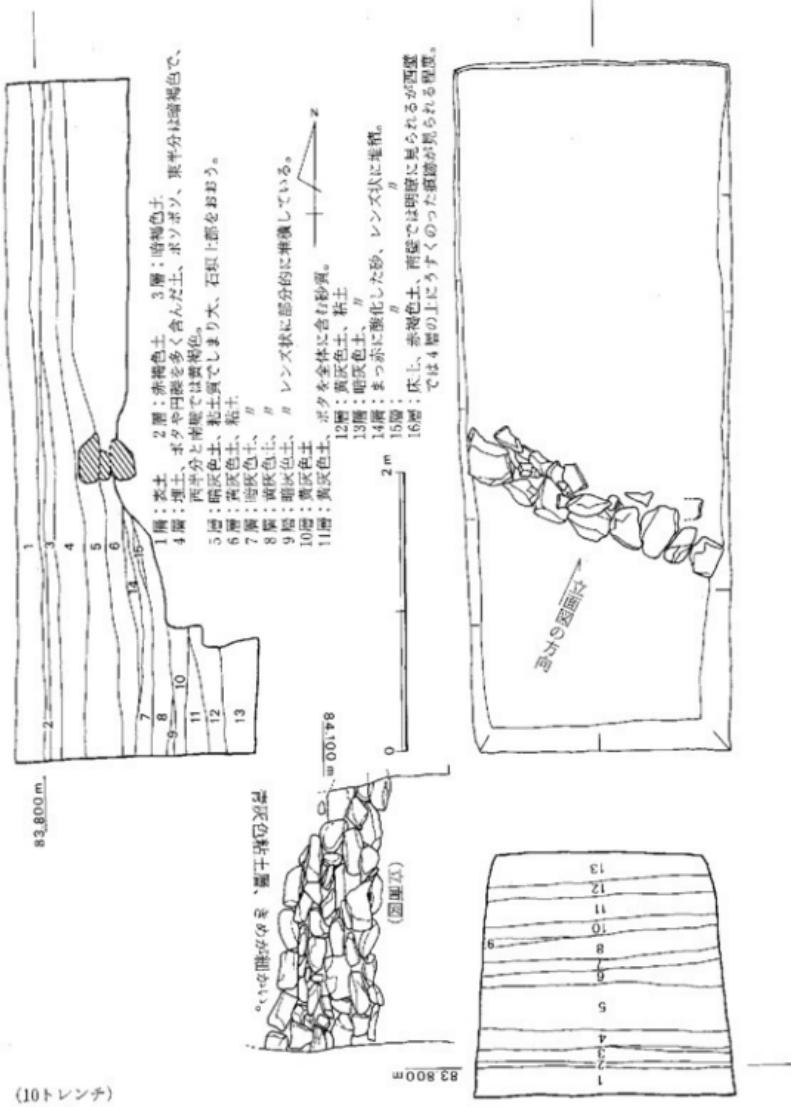
a. 中国製陶磁器

中国製陶磁器は36点出土しており、種類別には、青磁、青花、白磁、中国製陶磁器に分けられる。

イ. 青磁(I)

碗II 小片であるために図示していない。片切彫りで蓮弁を描くが、幅狭になったもので、小野分類のB群である。3 トレンチと10 トレンチのI層から出土している。

皿I(I) 口縁が端反りになった高台付皿で、見込には段が付き、高台疊付には珪砂が付着している。淡黄色の胎土で、貫入が著しい灰緑色のガラス質釉が割と厚くかかる。10 トレンチ付近で探集した資料



(10トレンチ)

第28図 東麓地区10トレンチ造構検出状況 (1/40)

香炉 1点であるが11トレンチのピット5から出土している。淡緑色のガラス質釉が削と厚くかかるが、表面は二次的な熱変を受け少々溶けた様な状況をもつ。

口、青花（2～8）

碗II 小片であるため図示していない。黄胎ではないが灰味の強い胎土である。11トレンチI層から出土している。

碗III(2) 薄手の上品な作りである。外面には果実状の文様、内面には四方棒文を描いている。1トレンチのピット3から出土している。

皿I(4・5) 口縁が端反りの高台付皿である。4、5の外面には火焔宝珠を描き、5の見込みには玉取り獅子が描かれている。4は11トレンチI層、5は11トレンチのピット5から出土している。小野分類の皿B群である。

皿II(3) 胴が内溝気味に開く基筒底の皿である。3は、白灰色の胎土で淡青色のガラス質釉がかかり、外面に波濤文帯と芭蕉葉文を、内面胴部に花弁？、見込に花弁状の文様を描いている。3は11トレンチI層から出土している。

皿V(6) 胴部が内溝する浅い身の高台付皿である。皿III類に器形は類似するが、やや人形でふ厚い作りのいわゆる呉須手皿といわれるもので、呉須の発色も良好でない。6は、淡灰色の胎土で灰青色濁釉がかかる。見込には花弁状の文様と乱雜に格子目状の文様を描いている。11トレンチ付近で採集された資料である。この他に11トレンチのピット5から3点出土している。

皿VI 小片であるために図化していない。口縁が端反りの高台付皿であるが、圓線だけを染付で描く粗製黄胎のものである。1トレンチII層から1点だけ出土している。

盤(7・8) 8は大胆な筆づかいで文様を描く大皿で、白灰色の胎土に淡青色のガラス質釉がかかる。7は黄胎の粗製大皿で、黄濁釉がかかり、黒ずんだ呉須で見込に草花文を描いている。8は1トレンチのピット8出土。7は11トレンチ付近から採集された資料である。

ハ、白磁（9～11）

皿I(9) 口縁が端反りの高台付皿、小野分類の皿C群である。9は細く尖った高台疊付を除いて、光沢をもつ白濁釉がかかる。11トレンチのピット5から出土。

皿II(10) 型押しによる菊花形皿で、小野分類の皿D群である。10は灰白色の釉がかかり、細く鋭い高台疊付付近の釉を削り取っている。内面の釉の内に1mmほどの橙色の斑点が散在するのが観察される。10は、11トレンチ付近の採集品である。

皿III 小片であるため図示していないが、基筒底の皿である。残存する内面は釉が剥ぎ取られている。4トレンチの道路状の集石内から出土。

杯II(11) 鋭く尖る高台から大きく胴部が開き、口縁が稜花になっている。外面には溝状の彫りを施し、口縁内面はウロコ状の彫り、見込には花弁状の文様を型押ししている。灰白色の粘りのありそうな胎土に、少し緑色がかったガラス質釉がかかり、高台には珪砂が付着している。11は11トレンチ付近の表採品である。

杯III 多角杯の口縁部小片が1トレンチI層から1点出土している。淡黄色の胎土で、細かい貫入のはいるガラス質釉がかかっている。

盃 薄手づくりの高台付盃である。高台内を蛇ノ目状に釉を剥ぎ取り、小さな高台疊付も釉を削り取っている。11トレンチのピット5から3点が出土し接合した。

二、中国製陶器

壺? 薄手の焼し胸部小片である。灰色を呈する1トレンチのピット4から出土。

b. 朝鮮製陶磁器

壺 薄手の壺胸部小片である。外面には光沢をもつ褐釉がかかる。内面にはタタキの当具痕をナデ消している様である。暗赤褐色の胎土をもつ。11トレンチのピット5から出土している。

c. 国産土器・陶器

イ. 土師質土器

小皿 (12・13) 両者ともに、広めの底部から胸下半が立ち上がり、中位付近で屈曲し胸上半はほぼ垂直に立ち上がるもので、見込中央部は凹部をもつ。削と厚手で、口唇部を尖り気味におさめている。法量は、12が口径7cm、器高1.4cm、底径5cm、13が口径7.6cm、器高1.5cm、底径6.2cmを測る。両者は灰褐色を呈し、石英砂と赤色砂を含んでいる。12は1トレンチのピット6、13は1トレンチのピット1から出土している。

杯 (14) 口縁を若干欠損する杯である。全面に著しい風化を受けている。広めの底部から胸部は直線的に開いている。見込中央付近は丸く盛り上がっている。橙色の色調で、石英砂・赤色砂を含んでいる。法量は、口径10.4cm、器高3.2cm、底径5.1cmを測る。1トレンチのピット2から出土している。

ロ. 瓦質土器

小片であるため図示していないが、格子目タタキをもつ土鍋など3点がみられた。

ハ. 陶器

国産陶器には、備前系の摺鉢4点と、美濃瀬戸の小皿が1点出土している。後者は、淡灰色でザンギリした軟質の胎土で、貫入の著しい淡緑色のガラス質釉が厚くかかるものである。いずれも16世紀代の資料であろう。

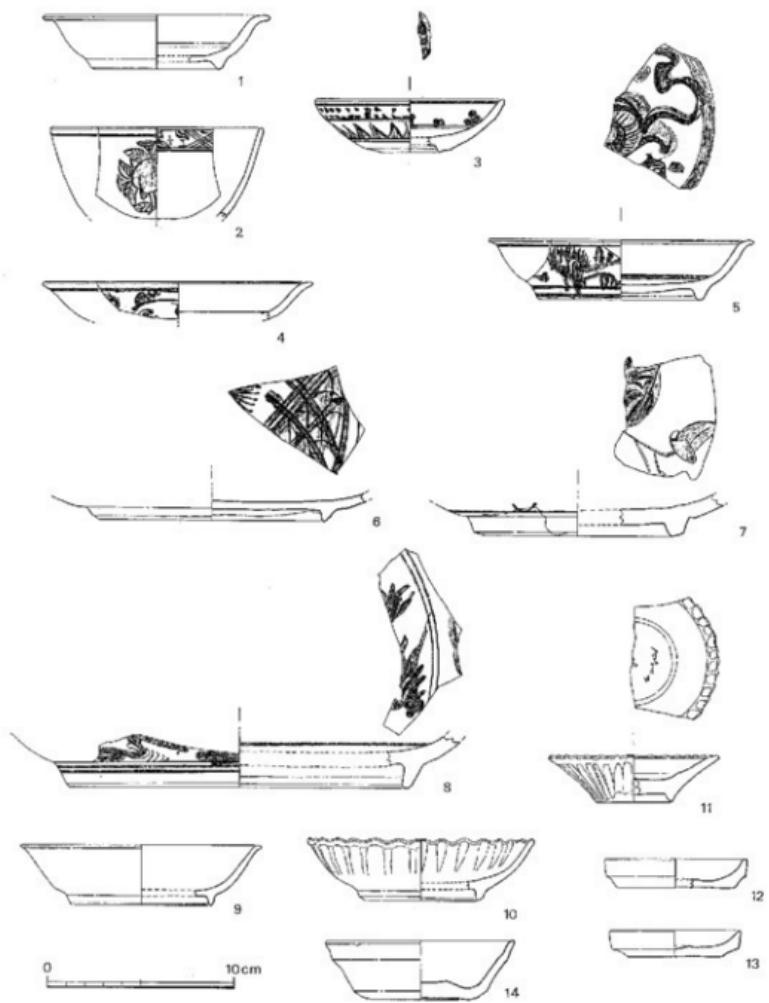
(宮崎)

(3) 北小学校地区

① 道 構

8・9トレンチ

北小学校の敷地には2箇所の調査トレンチを設定し、8トレンチは地表から1.6m、9トレンチは地表から2m程度まで掘り下げたが、全て埋土層で、中世の遺物の出土はみられなかった。北小学校の敷地は追手道の起点にあたり、領主館がこの場所に存在するのではないかと期待していたが、予想がはずれることになった。この場所が領主館の可能性が全くなくなった訳ではないが、他の場所も考慮に入れておいた方が良さそうである。



第29図 東麓地区出土土器 (1 / 3)

(4) 南麓地区

① 遺構

12~15トレンチ

祥雲寺南側付近の南麓地区

この祥雲寺南側の南麓地区は、南北230m、東西が広いところで170m、狭いところで120mあるわりと広い台地状の丘陵で、祥雲寺の南西部、久住呂氏宅の入口にあたる場所に12トレンチを設定した。また、祥雲寺の南側の台地の中央に13、14トレンチ、そして、台地の南側、馬渡氏宅の倉庫の南に15トレンチを設定し発掘したが、全て20cm程掘り下げるごとに赤褐色の地山層になり、建物跡等の遺構は検出できなかった。また、中世の遺物も極く僅か出土したにすぎない。この付近は、字名が坊の上といい、わりと広い平坦な丘陵地になっており、城と関係のある施設の存在が予想されたが、今回の3次調査では確認できなかった。

しかし、久住呂氏旧宅から西へ50m程入った地点に、追手郭にある井戸と同形態のものが踏査で発見され、何らかの利用がなされた可能性を残している地域ともいえよう。

(村川)

② 遺物

A. 中世の土器・陶磁器（第32図）

南麓地区では、良好な包蔵状況がなく、表探資料を合わせても7点の出土をみたにすぎない。

a. 中国製陶磁器

中國製品は、青花4点、白磁1点が出土している。

イ. 青花

碗(1) 1は、口縁が端反りの碗で、小野分類の碗B群に相当する。碗I類とする。外面に回線とうず巻状の文様、内面に幅広の圓線を描いている。15世紀前半代の資料であろう。久住呂氏宅裏付近から採集した。

碗にはこの他に、12トレンチⅠ層から碗II類(蓮子碗)と思われる資料が出土している。

皿 基部底の皿II類が、12トレンチと14トレンチのⅠ層から出土している。12トレンチのものは黄胎である。

ロ. 白磁

皿 口縁端反りの高台付皿である皿II類の底部小片が、12トレンチⅠ層から1点出土している。

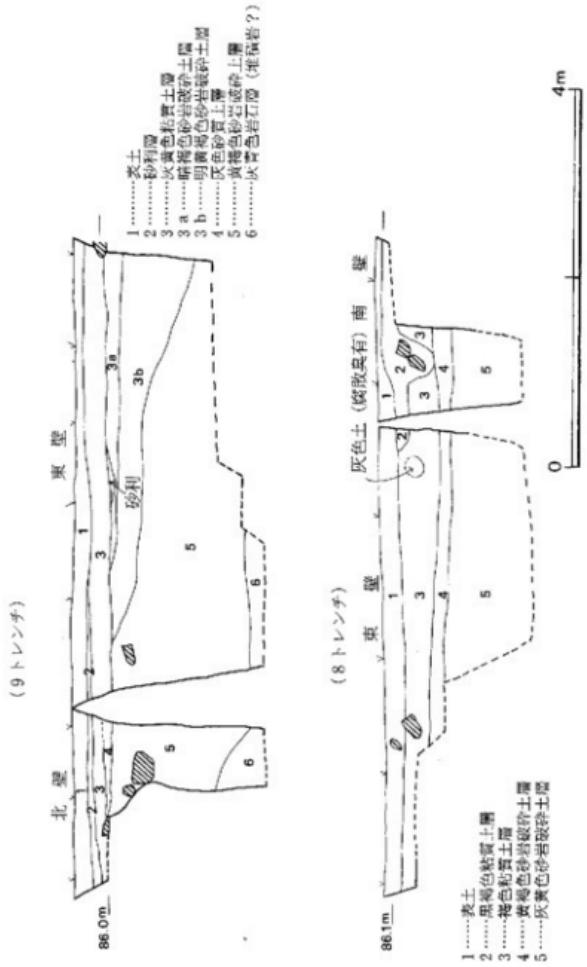
b. 朝鮮製陶磁器

イ. 青磁

碗 李朝期の青磁碗が12トレンチⅠ層から1点出土している。淡緑色のガラス質釉がかかり、見込と高台に砂目跡が付いている。

c. 国產土器・陶器

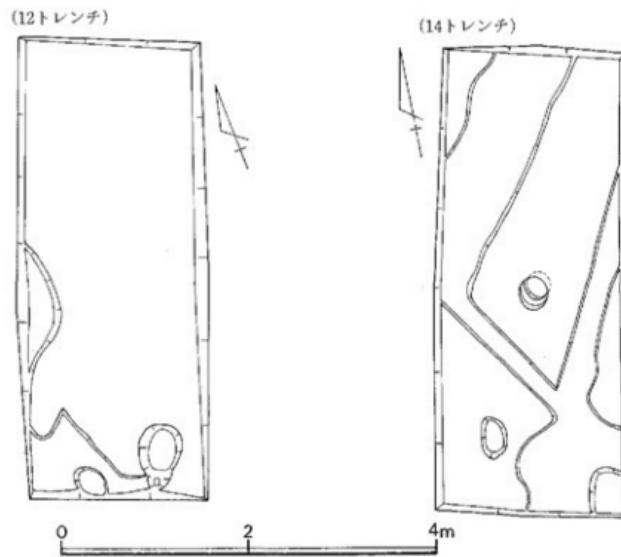
イ. 瓦質土器



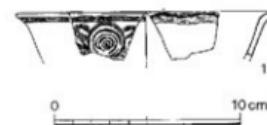
第30図 北小学校地区(8、9) レンチ土層図(1/60)

湯釜 瓦質湯釜と思われる短く直立する口縁部片が、13トレンチⅠ層から1点だけ出土している。灰色を呈し、焼成良好である。

(宮崎)



第31図 南斎地区(12、14)トレンチ遺構検出状況(1/60)



第32図 南斎地区採集土器(1/3)

III. 総括

1. 遺構について

3次にわたる直谷城の調査では、当初は1次調査で測量を終え、2次、3次は、主郭と麓の根小屋（領主館、武家屋敷）の発掘にあたる予定であった。ところが、測量の為に伐採してみると新しい遺構がみつかることで、最終的には3次調査まで測量調査を継続することになった。また2・3次の発掘調査では、主郭地区、東麓地区で建物跡の柱穴を発見し、主郭と根小屋（武家屋敷跡？）の建物跡を確認した。

以下、1～3次にわたる調査で発見あるいは検出された遺構を、a. 測量調査と、b. 発掘調査に分けてみていくこととする。

a. 測量調査

測量するため伐採して、従来の知見に加えて新しく発見・あるいは確認した遺構としては、①二の丸。②天守台への西側からの登り道。③二の丸から裏木戸道へ至る尾根道。④土塁が4本あること⑤武者溜り①（平湯の南端には合戦時の旗差穴の可能性がある小穴があった）。⑥帯郭（壁状の砂岩の基盤に梁を渡す穴が4個穿ってあり、60mほどにわたる連絡路もある）。⑦武者溜り②、⑧（連絡路には砂岩を掘り込んで石段がつくっている）。⑨矢石置場。⑩堅掘①と②の2箇所。⑪平場。⑫裏木戸武者溜りの石垣。⑬出丸とその東と西の武者走り。⑭堅掘②から四の土塁にかけての武者走り。⑮平場西の岩の上にある柵列の跡。⑯物見岩。⑰山道と石段等。

b. 発掘調査

①主郭の発掘調査では、A～Iの9箇所全ての発掘トレンチに柱穴等の遺構が検出されたが、第36図に示された輸入陶磁器の時代別の数量表をみてもわかる様に、16世紀の初め頃をピークとする時期と16世紀後半をピークとする時期の2つのピークがあり、この2つの時期にこの諸の城が使用されたと思われ、柱穴もこれらの時期のものが多いと思われる。もっと古い時期のものもあると思われるが、今後、調査があれば建物跡の規模や棟数を確認する中で、柱間の差異、遺物の出土の仕方等で確定していく必要があろう。

②特にBトレンチでは、砂岩の基盤（福井層）を掘り込んで柱穴と溝が造られていた。

③山城（本城）の麓の東麓地区1、11トレンチからは、建物跡の柱穴が検出され、その中から15～16世紀の土師器や中国製の青磁・白磁・染付が出土し、城と関連をもつ建物の存在が明らかになった。

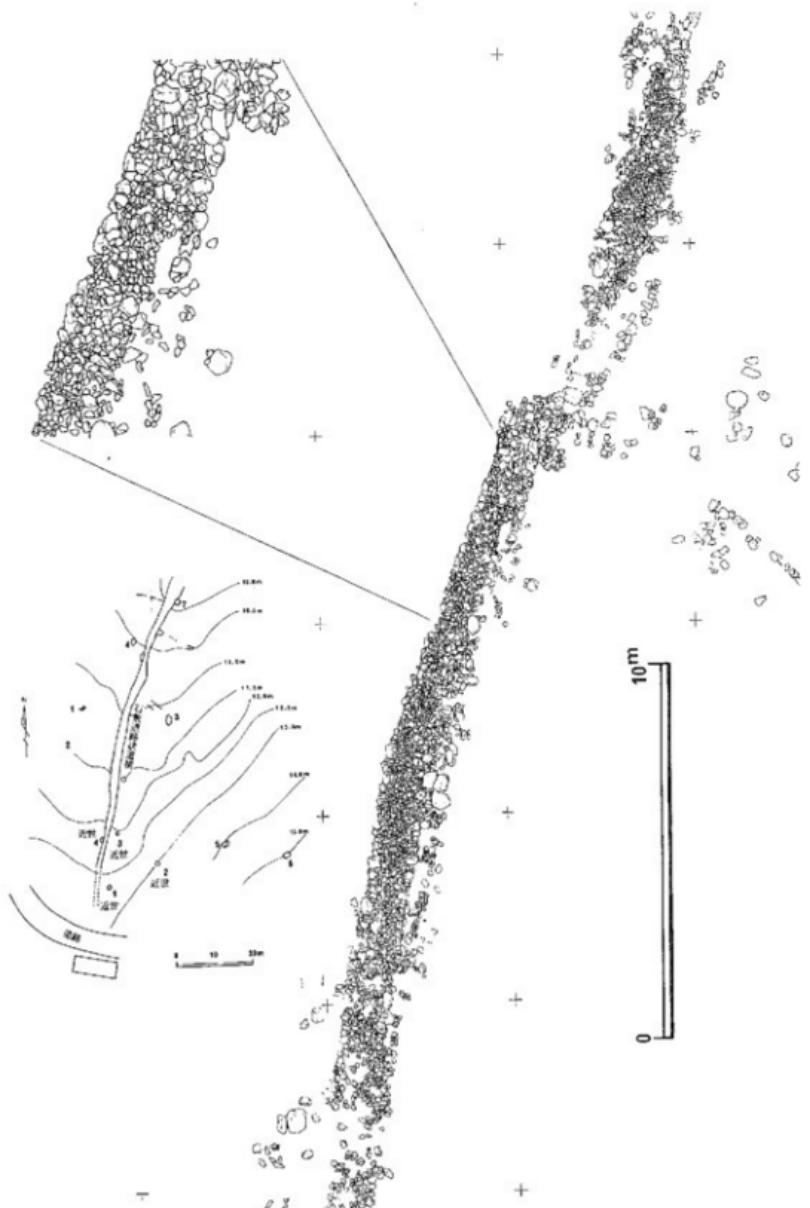
④4トレンチから敷石道路状遺構の一部が検出され、所属時期は不明だが、中世期の可能性もある。

⑤領主館を想定していた北小学校地区では、柱穴等の遺構の検出はできなかった。

⑥南麓地区に於いても、明確な柱穴等の遺構の検出はできなかった。

以上のような遺構の発見・検出があった。

(村川)



第33図 松浦市櫻横田遺跡の敷石道路状遺構
「櫻横田遺跡」長崎県文化財調査報告書第76集より転載

2. 遺物について——中世土器・陶磁器の様相を中心として——

昭和63年～平成2年度の調査によって2700点余の遺物が出土した。特に、城内の主郭地区から2000余の遺物が出土し、7割以上を占めている。主郭地区からは、「天下」銘をもつ棹秤用錘、鉛製釣用錘、るつぼ・鉄滓などの鍛冶製品、ガラス製品、永楽通宝などの古錢、建物に関連したと考えられる鉄釘等、注目すべき遺物があげられる。しかし、ここでは遺物の主体を占める中世の土器・陶磁器をとりあげ、その様相について検討を行いたい。

(1) 中世土器・陶磁器の構成（第34図）

昭和63年～平成2年度によって出土した1904点と昭和41年に城内から採集されていた26点を加えると、1930点の中世土器・陶磁器が抽出された。

これを地区別にみると、城内の主郭地区が1826点、東麓地区97点、南麓地区7点という内訳になる。城内からの出土が圧倒的に多く、我々も山城からこれほど多くの出土があるとは予想しておらず、いささか驚いたわけである。

第34図は、主郭地区と東麓地区出土の中世土器・陶磁器の組成についてグラフにしたものである。①は主郭地区的全体的な構成をみたもので、輸入陶磁器827点(45.3%)と国産土器・陶器999点(54.7%)という比率になり、松浦市宮ノ下り遺跡、^(註1)桜井田遺跡などの遺跡で輸入陶磁器の占める割合が高いとの同様の結果がでた。④は東麓地区的同様のデータであるが、やはり輸出品が38.1%と高い割合をもつが、域内よりも比率が下っているのは、域と生活地との違い、需要（使用する）階層の違いなどの評価ができる。朝鮮製陶磁器は、志佐氏が朝鮮貿易を盛んに行なったにもかかわらず数量的に乏しい。これは、長崎県内の中世遺跡のデータからも普遍的に言えることで、要因としては、①生産地の生産量の違い、②貿易に介在する商人の積極性、③需要側の趣向、④貿易対象品目の違いなどがあげられる。中国製品が多いのは、特に④の景德鎮での生産力と④の中国商人の活躍が主たる要因になっているようと思われる。

②と③は、主郭地区における中國製品と國產品についてそれぞれ種類別の割合をだしたものである。中國製品774点のうち、青花417点(53.9%)が最も多く、白磁180点(23.3%)、陶器125点(16.1%)、青磁40点(5.2%)、その他磁器12点(1.5%)と続いている。陶器のうち貯蔵具である壺・瓶類は120点(15.5%)にすぎず、他は碗・皿などの供膳具がほとんどを占めている。③では、土師質の小皿・杯が96.7%を占め、やはり供膳具が突出した状況を示している。

(2) 主郭地区における区域別出土状況（第35図）

第35図は、主郭地区を区域ごとに分け、輸入品と國產品を累積グラフで表わしたものである。この数量操作を行った結果、本丸（一の郭）と二の丸（二の郭）では際立った差異が顕れた。すなわち、國產品は本丸（一の郭）に集中し、輸入品は二の丸（二の郭）に集中するという状

況である。国産品のほとんどを占めるのは土師質小皿・杯であり、中国製の碗・皿と同様に供膳具として使用されるが、下手物である。上物が（の丸（二の郭）に集中し、下手物が本丸（一の郭）に集中するとなると、城内における階層差が反映していると解釈することもできる。すなわち、合戦の際二の丸に上流武士が、本丸に身分の低い武士が集結していたのではなかろうかと想像を働かすことができるが、この点についてはさらに細かい検討が必要であろう。

（3）時代的にみた輸入陶磁器の流れ（第36図）

土師質土器の小皿・杯の形態や法量の変遷で時期を細かくおさえていくので最も良い方法であるが、当方の編年が確立していないことと、今回の調査で良好な資料が出土しなかったので、比較的年代がおさえられている中国製の青磁・白磁・青花の碗・皿によって時代的流れを追ってみたい。

城内の初源的資料は、Gトレンチで1点出土した白磁碗Ⅰ類で、森田勉・横田賢次郎氏分類^(註1)の椀V類に相当する。11世紀中頃から12世紀初頭に位置づけられ、城としての利用開始を物語る資料である。以後、15世紀前半までの資料は量的に少なく、城に少数の者が居るか、ほとんど利用されていなかった状況を示している。

点数が増え活発な利用状況を示すのが15世紀後半以降で、15世紀後半～16世紀前半と16世紀後半あたりにピークがあるようで、明応年間（1492～1501）に大村・龍造寺連合軍に攻められ落城すること、永正10年（1513）の平戸の松浦興信と合戦、天正9年（1581）に平戸松浦隆信によって攻められるという史実と呼応した在り方を示していることが考えられる。

最後に山城としての機能がいつまで維持されていたかという点について検討したい。分類された陶磁器の型式は、その出現と消長に時間的な幅をもっている。したがって、16世紀後半～17世紀前半とした資料が、実際にはどの時点で終焉しているのかという問題については、複数の諸事象に基づいた総合的な判断が必要であろう。

まず、青花では、小野正敏氏分類の碗F群で、17世紀前半に盛行する胴に唐草文、見込に宝相華や折枝を描くもの（大橋康二氏の分類の碗C）、内面文様をダミで塗りつぶす碗（大橋碗B～2）などが、出土していないこと。

胴が内溝する高台付皿の皿III類であるが、1580年頃に現われる見込に便化した獅子文や蚊竜文を描く資料が無いこと。

16世紀末から17世紀前半に盛行する、典型的な芙蓉手の皿、碗が無いこと。

国産品のなかに、1580年以降に焼かれたという唐津や1598～1620年の間に焼成されたといわれている福井窯の製品が無いこと。

これらの点からみると、1580年以降の資料が欠落することになり、1581年に松浦隆信との合戦が最期で、それ以降には城としてほとんど使用されなかつたことが推察されよう。

（宮崎）

- 註 1 中田敦之「宮ノ下り遺跡」松浦市文化財調査報告書第5集 松浦市教育委員会 1989
宮ノ下り遺跡は、佐佐氏の館跡である陣ノ内城に近接した位置にあり、輸入陶磁器の動内についての中田氏の統括によると、9世紀後半から出現し、11世紀後半から12世紀前半にピークをむかえて、14世紀後半～15世紀中頃になると極端に減少し、それ以降はほとんど無くなるという軌跡をたどっている。このことは、15世紀後半以降に出土量が増えてくる直谷城と対照的な在り方をもっており、志佐氏の本居地の移動に伴って生じた事象と考えができるであろう。

2 中田敦之他「櫻塚遺跡」長崎県文化財調査報告書第76集 長崎県教育委員会・松浦市教育委員会 1985

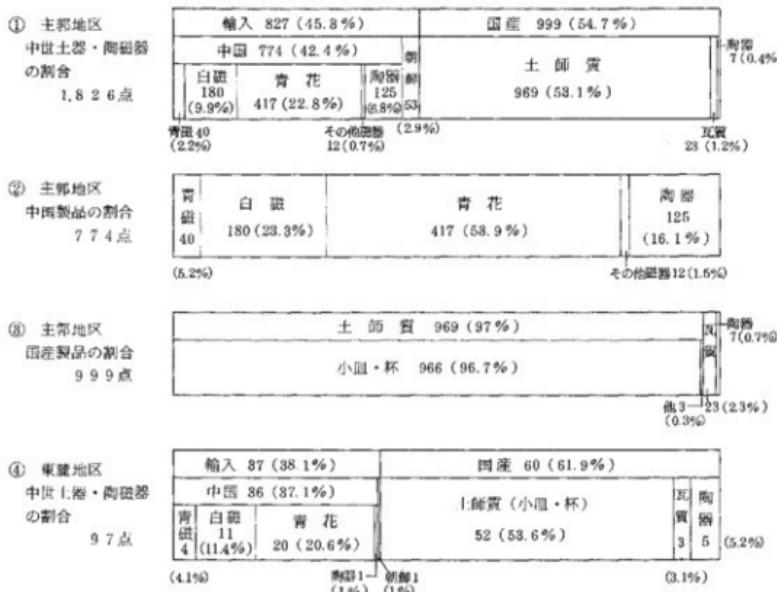
3 寿田勉・横田賛次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978

4 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No 2』日本貿易陶磁研究会 1982

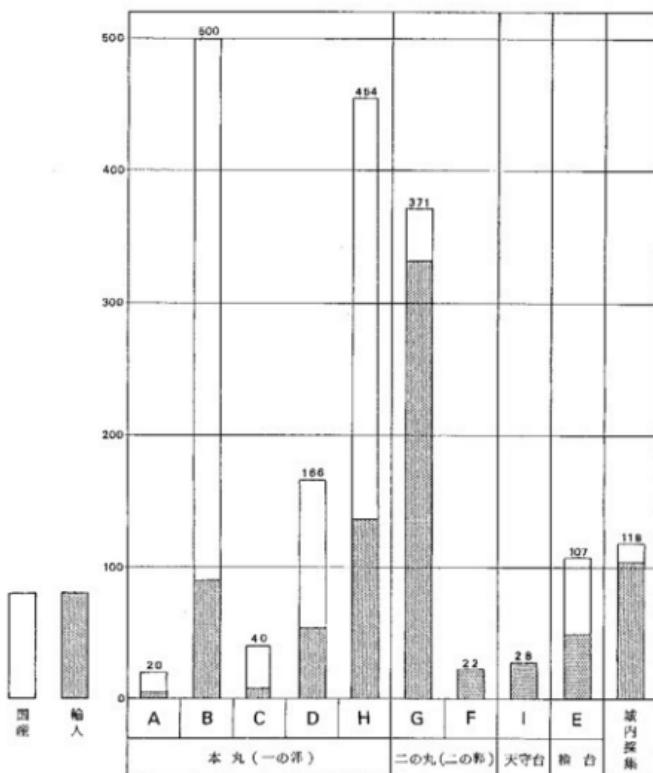
5 大槻康二「十六、十七世紀における日本出土の中国磁器について」『東アジアの考古と歴史』同朋舎 1987

6 上田秀夫「根木寺出土の染付について」『貿易陶磁研究No 2』日本貿易陶磁研究会 1982

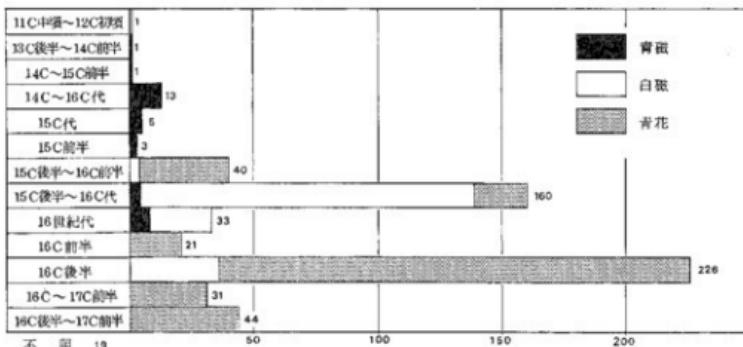
7 崇立美術館芭庭専門員下川清彌氏より御指導・教示をいただきました。感謝申し上げます。



第34図 中世土器・陶磁器組成グラフ



第35図 主郭地区における区域別出土状況



第36図 青磁・白磁・青花碗・皿からみた時代別数量表

3. 県北部の中世山城と直谷城

県立猪鼻館高等学校教諭 吉 福 清 和

- 1、志佐氏とその居城
- 2、県北部の中世山城
- 3、直谷城の構成と特質

1 志佐氏とその居城

志佐氏の出自については、本報告書の序説において外山幹夫氏の論究があるので、省略することにして、ここでは、とくに、志佐氏と直谷城の係わりについて、松浦家の「家世伝」に限って検討してみることにする。

松浦史料博物館に所蔵する「家世伝」は、第5代藩主松浦棟の原稿を、9代清が纂集、10代黒が校訂して、文政8年（1825）に完成した全64巻からなる松浦家の家譜で、内容は系統、夫人伝、公族伝、公女伝、家臣伝、雑氏伝に区分される。『鎮西要略』、『肥陽軍記』、『大曲記』、『海東諸国紀』などのほか松浦文書、伊万里文書、石志文書および各氏系図を引用して作成され、江戸後期の編纂物ではあるものの、かなり信頼のおける家譜といえる。

「家世伝」の卷之四十一、第十三目録から卷之四十二、第十四目録にかけて『御厨公公族伝、宗家松浦支族 志佐氏』の記述がみえる。

これによると、志佐氏は御厨執行瀆の二男、志佐貞をもってその祖とする。貞は志佐、五島東島の東辺と西島および岩岐を分与され、志佐に住しその在名をもって家号とした。

貞以下の略系は次の通りとなる。

〈志佐氏略系図〉

貞 - 純 - 祝 - 有 - 定 - 調 - 重 - 義 -

某 - 純元 - 純次 - 純昌 - 純量 - 純意 - 純高 - 重忠

祝は、父の純と共に元寇に出陣して活躍したことが知れ、さらに、元亨元年（1319）軍功により加采地を得ている。

有は、尚有、三郎を称する。建武3年、筑前の多々良浜の戦いで足利尊氏軍にくみして軍功

をあげている。左近将監、壱岐守に叙任され、康永3年（1344）には、嗣子定と共に志佐寿昌寺に観音像を寄進している。

定は小次郎を称して修理亮に叙任。延文4年（1359）、他の松浦一族と共に小式頼尚の北朝軍に参加して筑前大原で戦っている（鎮西要略ほか）。

調は定の嗣子にあたり壱岐守。応安7年（1374）には足利義満に対して忠を抽んじ、至徳元年（1384）には、一族の会盟に参加している。

重は調の嗣子にあたり壱岐守。応永28年（1421）に一族の会盟に参加し、永享元年（1429）には志佐浦住吉宮に神像3体を寄進している。

義は重の嗣子にあたり壱岐守を襲任。康正元年（1455）から数回、「肥前州下松浦一岐州大守志佐源義」の名で、朝鮮に貢進船を派遣している。

寛正2年（1461）には、亡父供養のため法華經510部と壱岐石田郷の田地を安国寺に寄進している。しかし、この後の文明年中、波多氏の攻略をうけ壱岐の領地を失った。

某は、壱岐守を襲任した純昌と目される。純昌は、有馬貴純らとともに平戸の松浦弘定を攻略し、箕輪城を攻め落とした。ところが、この後、大村、龍造寺の連合軍に明応2年（1493）直谷城を攻略され五島に逃れ、この地で、家臣の叛に遭って最期を遂げている。

のことによって、直谷城は一時期、無主の城となったが、田平の峯純元（初名昌）が壱岐守を襲任、志佐氏の名跡を継ぎ、志佐、江迎の地を得て直谷城に住した。

純次は純元の二男、源次郎を称して壱岐守を襲任。直谷城に住したが、永正10年（1513）、平戸の松浦興信に攻略された。

純昌は純次の嗣子。初名は尚順、有馬晴純の偏諱をうけ純昌に改名。壱岐守を襲任して、直谷城に住した。享禄3年（1530）、城下福井の熊野権現を新築し、天文2年（1533）には志佐の寿昌寺に観音像を寄進した。天文11年（1542）には、松浦隆信による相神浦の松浦親攻略に参加して鳴島、勝屋城、飯盛城の諸城を攻めた。

純量は純昌の嗣子。永禄6年（1563）、松浦隆信（道可）の直谷城攻略にあい相神浦に逃れた。その後、居城の奪還をはかったが果せず、高杵郡に去った。

純意は純次の二男、壱岐守を襲任。純量出奔後の志佐を領して直谷城に住む。元亀3年（1572）、松浦鎮信に従い大村純忠を攻略。天正15年（1587）、豊臣秀吉の島津征伐に参戦し、帰還後の天正17年には相神浦領福島の臣寺山慶雲を討った。いっぽう、領内の福井村に龍翔寺を創建、天正5年（1577）には志佐の寿昌寺に観音像を寄進している。

純高は純意の嗣子、源六を称す。文禄元年（1592）、朝鮮の役で戦没した。

重忠は純高の嗣子、初名源藏。のち松浦氏を氏名とする。平戸の命に従い、文禄元年、志佐陣之内に移住、寛永2年（1625）には御膳に、さらにその後平戸に移住した。慶安2年（1649）平戸に卒し、三本松に葬る。

以上、直谷城との係わりから、志佐氏の米歴を「家世伝」に限って見てきたが、次に、この

記事から直谷城の築造とその後の推移について整理して見たい。

果して、志佐氏の居城はどこであったのか。

始祖志佐貞の鎌倉時代から志佐義の応仁期までの間、直谷城に関する記事を「家世伝」に見ることはほとんど無い。このことから、それまで志佐氏と福井村直谷（北松浦郡吉井町）との係わりは、きわめて薄かったのではないかと思われる。半面、志佐村（松浦市）に関しては、有時代の寿昌寺、重時代の住吉院など、この地方に所在する寺社名が記事の中に多く見られ、志佐川河口の沖積地を押えた在地領主としての志佐氏の姿が見えてくる。

相神浦の松浦氏や御厨氏などの下松浦地方の諸氏と会盟を結び、朝鮮との交易によって発展してきた志佐氏のありかたからすれば、玄界灘に面した志佐浦に拠点をおいたことは当然のことであり、山間部の福井に居住しなければならない必然性は極めて低いといえる。

ところが、純昌の戦国時代の頃から、それまでの情勢は一変する。

つまり、純昌の延徳年間から、純高の文禄年間にいたる8代、約100年の間、歴代の志佐氏は福井の直谷城をその居城にしたことが「家世伝」によって知れる。

この変化は何を意味するのか。

戦国時代にいたり、大村、龍造寺、有馬の各氏をはじめ、平戸、相神浦の両松浦氏など、近隣諸氏との所領をめぐる争いが激しさを増し、志佐氏にもこれらに対する備えが必要となり、このため館住いの志佐から、天陥の地を求めて福井の直谷城に移住したものと考えられる。

しかし、直谷の居城も他氏の攻撃にさらされる。純昌時代の明応2年に大村、龍造寺の連合軍に攻められたのをはじめ、純次の永正10年には松浦興信に、純豊の永禄6年には松浦隆信（道可）に攻められるなど、前後3回にわたり攻略され敗北を喫している。

その後、平戸松浦氏の支配が強化され松浦鎮信（法印）の慶長6年（1601）、平戸藩の成立によって、志佐重忠は平戸城下に移住させられ、ここに、直谷城は、約100年間におよぶ志佐氏の居城としての役目を終えることとなった。

以上のように、「家世伝」によれば、戦国時代以前の御厨氏系志佐氏は志佐陣之内に、その後の峯氏系志佐氏は福井直谷にそれぞれ城館を置いたことになり、直谷城はまさに戦国動乱のなかで拡充された山城であるといえよう。

ただ、從来から、直谷城は鎌倉時代の寛元年間、志佐貞によって築かれた〔春陽錄〕とする説があり、14～15世紀の渡来磁器が得られた今回の発掘調査の成果からすれば、志佐貞築城説はかなり有力となり、今後、さらに新たな検討が求められることになった。

2 県北部の中世山城

「家世伝」によれば、延久元年（1069）、摂津國渡辺庄の住人、源久という人物が宇野御厨檢校として肥前国松浦郡今福に下向し、その後、子の直から孫の清の時代にかけて肥前国西部一

帶にひろく分出しして、一族を形作ったとする。

この、いわゆる松浦党の形成過程およびその性格については、これまで、外山幹夫氏による「松浦氏と平戸貿易」(国刊行会刊)、「松浦党のすがた」(松浦市刊)など多くの論究によって明らかにされてきているところであるが、これら文献史学からのアプローチに加えて、最近の発掘調査やフィールドワークの成果として、各地に割拠した松浦党各氏の城館の分布状況が、次第に明らかになってきている。

つまり、「日本城郭大系17巻 佐賀長崎」(外山幹夫編 新人物往来社刊)、「中世山城分布調査報告書」(佐世保市教育委員会)、「桜井田遺跡」(長崎県・松浦市教育委員会)などがそれであり、この調査に関わったほか、小値賀町膳所城跡調査、宇久町城ヶ岳城跡確認調査に参加した経緯から、県北部の中世山城の状況について述べることにする(第1表、第37図参照)。

『主要城郭一覧表』は、「城郭大系」を基礎に26城をとりあげ作表したが、形式、規模、遺構の遺存状況については従来の調査不足による誤りがありこの点を修正し、さらに、創築年代、創建者についても、その後の新しい知見を加えて若干修正したが、なお不明な箇所も多く残している。また、最近の調査にもとづいて膳所城など7城を新たにリストアップした。

県北部の旧平戸藩領域における中世山城の数は、このうち壱岐郡44、平戸市6、松浦市7、北松浦郡25、佐世保市25の総数107城にのぼるが、平戸市、松浦市など地域的に調査が進んでいない箇所もあって、今後、実数はもっと増えることが予想される。このうち、壱岐郡が44城と群を抜いて多いのは、分布調査が進んでいることの他、志佐氏や波多氏による地域的な争奪の激しさをうかがわせる。

城の形式については、およそ平山城が50%、山城が30%、平城が残りの20%の割合となり半数を平山城が占める。このうち、山城が30%と少ないので、全般的に山が低く小さいという県北部一帯の地形上の特性によるものである。平面、平山城と平城とが全体の70%を占めて多いのは、海岸部に立地して、朝鮮貿易への依存度が高かった県北部における武士団の在り方をよく示しているといえる。

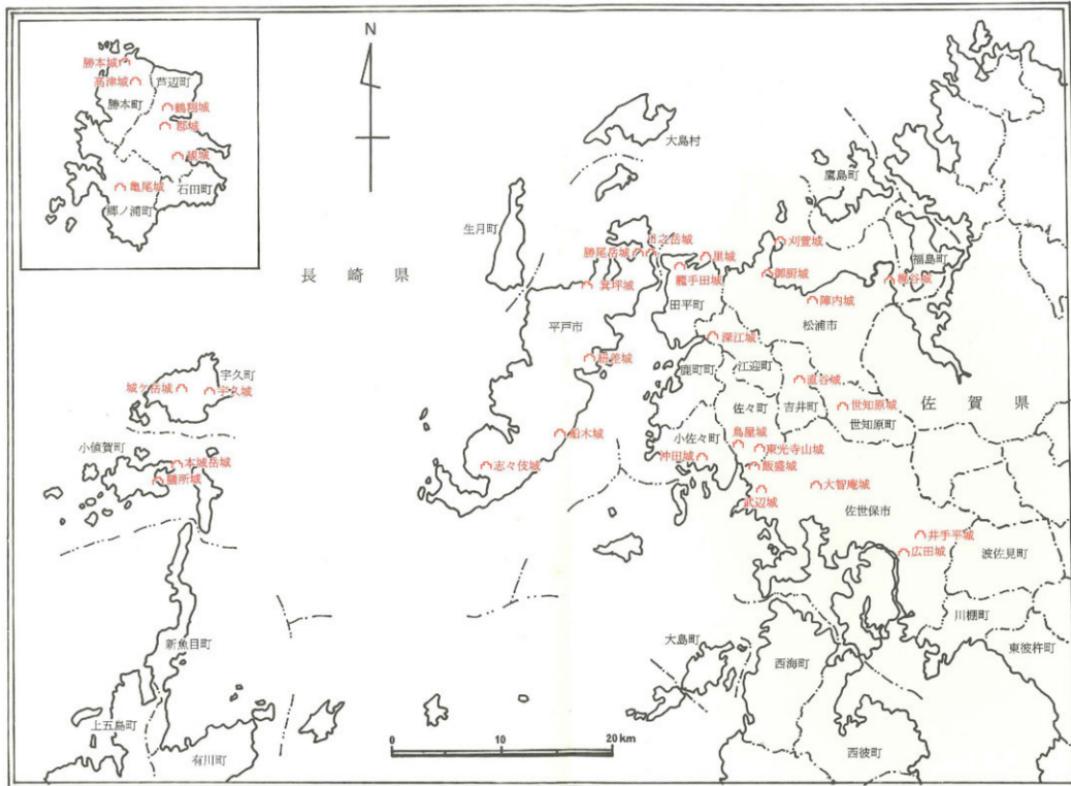
城の部位については、標高での最高位は、259mの城ヶ岳に築かれた城ヶ岳城跡(宇久町)、最低位は、海城的な館であった海拔10mの陣之内城跡(松浦市)であるが、その平均値は88mと県下の他地区に比べ高く、同様に、根小屋と山城との平均比高も高い。

城の規模については、調査を終えた城跡が直谷城跡ほか僅か4例に過ぎないことと、どこまでを山城の範囲とするか調査担当者の間で一定でないことから、城域の限定に差異がある。しかし、単純に比較して、県の中央部や南部の山城に比べて北部の規模は小さい。このことは広大な田地を基盤とする大村、島原地方の領主に比べ、北部では所領規模が小さいことをよく示しているといえよう。

創建時代については、平安時代末期の源平争乱期、南北朝の動乱期、戦国時代末期の3期に集中しており、築城の全国的な傾向とほぼ一致している。ただ、その歴史的な背景には地域性

第1表 県北部の主要城郭一覧表

No	名 称(別称)	所 在 地	形 式	規 様(m)	遺 墓 構	標 高(m)	創 築 年 代	創 建 者	主 要 文 献	指 定
1	勝本城(武末城)	勝本町	山城	122×61	本丸、礎石、石垣	79	天正19(1591)	松浦鎮信	老岐名勝圖説、老岐国続風土記	国
2	高津城(河頭城)	勝本町	平山城	40×30	空堀	80	応永年間(1394~)	志佐 義	老岐名勝図説、海東諸国記	町
3	鬼尾城(鬼丘城)	郷ノ浦町	山城	200×200	本丸、石垣	63	永仁1(1291)	波多宗無	老岐国続風土記	県
4	都城(埴留城)	芦辺町	平山城	60×30	内堀	114	応永年間(1394~)	塙津留經	壱岐国続風土記、海東諸国記	
5	鶴禪城(弦懸城)	芦辺町	山城		石垣	97	応永年間(1394~)	塙津留經	壱岐国続風土記	
6	龍城(广城)	芦辺町	平山城		本丸	19	平治年間(1159~)	長田忠政	壱岐国続風土記、海東諸国記	
7	勝尾岳城(白狹山城)	平戸市鏡川町	山城		空堀	68	南北朝時代	松浦 勝	家世伝、壱陽錄	
8	日之岳城(古城)	平戸市岩ノ上町	平山城	480×411	本丸、石垣、櫓台	50	慶長4(1599)か	松浦鎮信か	家世伝、壱陽錄	
9	箕坪城	平戸市牛馬町	山城	300×300	本丸、石墨、石垣	280	戦国時代初期	松浦弘定	家世伝、壱陽錄	
10	船木城(城山城)	平戸市船木町	平山城	100×200	空堀、井戸	45	鎌倉時代か	津吉氏	青方文書、山代文書	
11	紐差城	平戸市紐差町	平山城	200×150	堀切	99	鎌倉時代か	紐差氏	青方文書	
12	志々伎城(城山城)	平戸市志々伎町	平山城	50×100	空堀、堀切、七星	31	延慶1(1069)か	志々伎氏	青方文書	
13	鴨谷城(鵠谷城)	松浦市今福町	山城	200×300	本丸、二丸、館跡	197	平安時代末期	松浦 久	家世伝、家承跡編	県
14	陣内城(志佐城)	松浦市志佐町	平城	150×200	本丸、二丸、空堀	10	延徳年間(1499~)	志佐純次	壱陽錄、三光譜錄	
15	刈萱城(城山)	松浦市星鹿町	山城	200×200	本丸、土墨	125	建久2(1191)か	加藤重氏か (伝承)		
16	御厨城	松浦市御厨町	平城	80×120	館跡、空堀、門跡	20	永徳4(1384)	御厨氏	家世伝	
17	里城(田平城)	田平町	平城	100×150	本丸、空堀、石垣	45	建久3(1192)	峯 彼	壱陽錄	
18	籠手田城(城山城)	田平町	平城	75×75	本丸、空堀、水堀	35	文明年間(1469~)	籠手田栄	壱陽錄	
19	深江城	江迎町	平城	70×70	館跡、空堀	20	明応年間(1492~)	志佐純本	壱陽錄	
20	沖田城	小佐々町	平山城	40×50	本丸、館跡	112	室町時代初期	小佐々太郎	青方文書	
21	東光寺山城(佐々城)	佐々町	平山城	200×250	本丸、出丸、館跡	73	文明年間(1469~)	佐々 橋	家世伝	
22	鳥屋城(戸岡城)	佐々町	山城	50×80	本丸、空堀	216	文明年間(1469~)	志加田源藏	壱陽錄	
23	直谷城(内裏山城)	吉井町	山城	300×300	本丸、出丸、空堀	167	寛元年間(1243~)	志佐 貞	家世伝、壱陽錄	町
24	世知原城	世知原町	平山城	40×40	本丸、館跡	196	室町時代初期	世知原市正	壱陽錄	
25	宇久城(山本館)	宇久町	平城	200×300	館跡、石壁	28	鎌倉時代末期	宇久	青方文書	
26	城ヶ岳城	宇久町	山城	100×50	本丸、出丸、石壁	259	戦国時代か	宇久氏か	青方文書	
27	本城岳城	小値賀町	山城	50×50	本丸、出丸、空堀	111	室町時代初期か	源 定か	淨善寺文書	
28	鰐所城	小値賀町	平城	150×150	本丸、空堀、土塁	10	室町時代初期か	源 定か	淨善寺文書	町
29	井手平城	佐世保市新替町	平山城	200×300	本丸、出丸、空堀	50	天正年間(1573)	松浦鎮信	壱陽錄、印山記	
30	広田城(牛森城)	佐世保市広田町	平山城	300×100	本丸、石垣、堀切	50	天正年間(1573)	佐々清右衛門	三光譜錄、印山記	
31	大智庵城	佐世保市瀬戸燒町	平山城	300×350	本丸、空堀	60	寛後2(1490)	松浦 定	家世伝、印山記	
32	飯盛城	佐世保市相浦町	平山城	600×300	大手門跡、馬場	60	天文4(1535)	松浦 親	家世伝、三光譜錄	
33	武辺城(相浦城)	佐世保市竹迎町	平山城	500×600	本丸、空堀、石壁	50	建仁2(1202)	松浦 達	家世伝	



第37図 県北部の主要城郭分布図

もみられ、平安末期は松浦党の創出と発展に伴う築城が多く、南北朝期と戦国期は、所領の争奪に備えるためのものが多い。創建年代の最古は梶谷城の延久元年(1069)、最も新しいものは井手平城の大正年間であり、この間の年代差は約500年におよぶ。

遺構の残存状況は、必ずしも良好とはいえない。例えば、慶長4年頃創建の日之岱城(平戸市)は、完成間もなく焼かれ、その100年後、同じ場所に近世の龜岡城が築城されたことから、遺構の新旧を識別することが困難な山城である。他の山城も後世の損壊が著しく、主郭部平場や空堀、土塁を辛うじて視認できる状況であり、今後、発掘を伴う調査がますます重要となつてこよう。このような状況のなかで、直谷城(吉井町)、東光寺山城(佐々町)、広田城(佐世保市)などは、平戸藩が江戸時代の後期に作製した絵図と比較してみると、例外的に、かなり旧状を遺している山城であるといえよう。

創築年代や創建者を推定するための文献については、全般的に、江戸時代の編纂物にたよることが多く一等史料に乏しいため、やや正確さに欠ける。したがって、この欠点を補うため、発掘調査に加え、石造物を含む歴史調査、伝承の検討、地質学や地理学の応用など幅広いアプローチが今後ますます重要になってくる。

以上、主要城郭一覧表をもとに県北部の中世山城について概観してきたが、次に、直谷城跡の構成と特質について述べることにする。

3 直谷城の構成と特質

直谷城は、北松浦郡吉井町直谷免字内裏に所在し、佐々川の支流にあたる福井川の浸蝕作用によってつくられた河岸段丘の一つ、内裏山の山頂に築かれた山城である。

吉井町は、北松浦半島のほぼ中央にあって、かつて、戦国時代の末期には、北に梶谷城や軍城、西に深江城や沖田城、南に東光寺山城や飯盛城、東に世知原城など周囲を中世の諸城に囲まれる位置にあった。

この直谷城に関して、寛政10年(1798)の「福井内裏山古御城図」(松浦史料博物館所蔵)が伝えられる。これは、外國船の接近に対処するため平戸藩が急拠実施した城跡調査のうちの一図にあたるものと思われ、城の繩張りや遺構に加え、道路や河川など周囲の地理がかなり詳しく記載された72×99cmの絵図である(図版37参照)。

これによると、図中央の大岩立上の平場に長42間程、横21間程の本丸を描き、ここから、一の御門、二の御門、さらに一の堀、二の堀、三の堀を経て南東方向の山麓にむかって大手口道が下り、本丸の西には、二条の空堀を経て本尾口まで通路が延びている。このほかには本丸への道路ではなく、懸崖上に築かれた山城の特徴をよく描いている。

本丸周囲には、福井通道、内裏山通道、世知原通道の3通り、福井川、御手水川の2河川、かけひの谷、あはび谷、払門谷の谷筋、田、畑、松山、竹山の地目が描かれるほか、祥雲寺、

熊野権現宮、寺堂、墓所、福井殿屋敷の位置や、その距離に関するキャプションが付されるなど、自然、人文の両面からよく眺め渡した絵図といえる。

このように「御城図」は、廃城後200年を経て描かれた絵図ではあるものの、直谷城の綱張りを知るうえでの貴重な手掛りを与えてくれる。

今回の調査では、「後城図」に記載する遺構を確認したほか、新たに、次に示す遺構が確認され直谷城の綱張りが一層鮮明になってきた。

(1)一の土塁の武者櫓り。追手郭一の土塁の南北両端2か所にあり、北側のものは岩の露頭を転用し、南側のものは傾斜面の段築によるものである。

(2)主郭(本丸)南方120mの尾根上の出郭。50×70mの長円形の平場を造成して周囲を切岸、武者走りによって固めている。

(3)主郭(本丸)から山麓にいたる迷路。山頂から東南方向に下る尾根上に、延長400mにわたり尾根道が通じ上下をつないでいるが、この途中に(2)の出郭があることを考えれば、このルートが主な登城路であった可能性が強い。

(4)堅堀。主郭(本丸)周辺の斜面に多くのその痕跡がみられるが、今回、確認できたものは、主郭(本丸)東斜面に2条、登城路の北斜面に1条、本尾口(表木戸)道を南北両面から挟むかたちで2条など5箇所が認められた。

(5)物見台。主郭(本丸)の東に延びる短い分嶺の先端に、岩の露頭を転用した物見台があり、ここからは城下の眺望がもっとも開ける。

以上、「御城図」に描く綱張りと、今回の調査における新しい知見について述べてきたが、次に、これらの成果をもとに直谷城の規模と構成について考えてみたい。

一般的に、山城の範囲をどこまでにするかについては、山麓にかけて展開する遺構の状況と、これらの遺構の包括する地形の状況とが重要なポイントになるが、直谷城の場合、遺構の遺存度が高いことと、地形的に山地と沖積地の境界がはっきりしていることから、地域の線引きは比較的たやすいケースであるといえる。

つまり、直谷城は、西側の山地を除けば他の三方を、福井川とこの流路に発達した沖積地とによって区画される。

北は内裏山の分嶺が福井川によって削られる福井橋の周辺、東は福井川の右岸、南は弘門谷の開口部に鎮座する熊野神社境内地、西は本尾岳との接点を南北に通る町道内裏馬場川線をもってその範囲とし、700×600mのほぼ円形を示して、この面積はおよそ25haにおよぶ。また、内裏山の標高158mの平場にあった山城と、藤小屋(館)を含む城下集落との比高は72mを計る。

この直谷城の規模は、県北部の日之岳城や梶谷城の規模に匹敵して、県下においても最大規模の部類に属するといえよう。

次に、直谷城の構成について考えてみたい。

まずに、山城の構成を考える場合、根小屋(城主館)の位置が重要なポイントになるが、今回

の調査ではこの地点を限定するには至らなかった。しかし、遺構のひろがりや登城路の位置、あるいは内裏山の地形のあり方からすれば、現在の町立北小学校から祥雲寺にかけての台地に城主館が所在した可能性は非常に高いといえる。

このことを前提に、背後の内裏山に広がる(1)主郭、(2)大手郭、(3)出郭、(4)裏木戸の四つの郭についてみてみよう。

(1)主郭は、内裏山の山頂部全体を占め、中央の孤丘(天主台)を中心に、東側の一の郭と西側の二の郭とから成る。一の郭では、今回の調査で建物跡と多くの渡来磁器を検出したほか、平場東端に櫓台様の高台を置くなど城の中核を構成したと思われる。二の郭は、台所跡の伝承が伝えられるが、今回、この確証を得るには至らなかった。

主郭部の現状は、ほぼ150m×50mの東西に長い長円形の平場に天主台、櫓台の2つの高台をのせており、3つの孤丘が描かれた「御城図」の描写と少しちがっているが、これは、その後いく度か土地の再利用がおこなわれたことを物語っている。しかし、西端の分崖を除く周囲を平均高30mの自然崖によって囲まれるという地形には変わりはない。主郭西端に唯一の出入り口があり、連絡路が大手郭と裏木戸に通じている。

(2)大手郭は、主郭の南崖下に接した谷間にある。この谷は、北側の自然崖と南側の分崖に挟まれ、東南東の城下にむかって開口したかなり浸蝕の進んだ谷間であり、現在、山麓から山頂に至る遊歩道が敷設され登山ルートになっている。

郭は、谷の最奥から開口部にむかって延長200m、最大幅100mの三角形を示し、大手門跡の石垣、井戸跡、武者割りなどの遺構があり、「御城図」に描かれた土壘とこの間の空堀が谷を塞ぐ形で築かれるなど、往時は、主郭に次ぐ重要な郭を構成したものと思われる。

現在、土壘の中央を切って登山路が継続しているが、これは、便宜上、最近敷設されたルートであり、土壘の性格から推して築城当時の登城路ではあり得ない。また、1、2の土壘が擡き上げる土壘に対して、4の土壘は操り石を使った特殊なものであり、このことから、土壘のすべてが同時期に作られたものとは考えにくく、築造の時代差も考えられ精査が望まれる。

(3)出郭は、主郭から大手郭の谷間をはさんで南方120mの尾根上に造成された郭で、城下から主郭に通じる登城跡を確保するとともに、南方方向からの外敵を防ぐものであろう。

(4)裏木戸は、主郭の西150mの本尾口にあり、この間に、現在、延長170mの遊歩道が敷設されているが、かならずしも、築城当時の裏木戸道に沿っているとはい難い。

途中には、埋め戻された堀切り跡、自然の浸蝕による洞門、崖を補強した石垣、通路を敷設するための石垣、堅堀などの遺構がのこされ、さらに、裏木戸北側の谷には、「御城図」に描かれた水溜りがあり今も湧水が絶えることがない。

以上のような直谷城の郭配置のあり方から、次の3つの特質が挙げられよう。

第1に、自然の地形を最大限に生かした、堅固な中世山城であるといえる。

以下において、このような自然崖上の山城の例はなく、全国的にみても、古代吉備国(鬼ノ城)

(岡山県)、河内国の楠木正成の肩城赤坂城(大阪府)などその例は多くない。

第2に、主郭が大手郭を抱えこむ抱谷式山城であるといえる。

このように、主郭崖下の谷間を利用して、大手郭を構えた山城の報告はこれまでになく、おそらく直谷城独特的形式であるといえよう。

第3に、長期にわたって使用、拡充された山城であるといえる。

今回の調査では、直谷城創築の時期を推定することができなかったものの、南北朝の動乱期や戦国時代の緊張状態のたびに城域が拡大されてきた山城であり、あるいは、陣之内城(志佐城)に対する詰の城の役割を担ったことも考えられる。

4. 近世以降における吉井町直谷地区の様相

1. 吉井町のおこり

吉井町は旧藩時代は平戸藩主松浦氏の所領で吉田・福井郷の2ヶ村に分かれていた。福井村は横畠田村・世知原村・福島村・鷹島村の5ヶ村に組して代官所は世知原町栗迎免にあり、庄屋は福井免字大久保103番2にその跡があったが現在は畠となっている。

明治2年6月の版籍奉還により平戸藩主松浦詮が從来の領地を奉還したが、同時に平戸藩知事に任せられ旧領地を治めていた。しかし、明治4年7月廢藩置県により福井村も県の管轄となつた。明治5年4月には從来の庄屋・名主・年寄等の制度を廃して新たに戸長を置いて村内を管理させることになり、福井村には西薦太郎氏が任命された。

明治22年4月に福井村・吉田村を合併して吉井村とし、その後昭和26年12月に町制が施行された。

2. 主な交通・通信

藩政時代から明治の初期にかけては小道を通行し、年貢や荷は牛の鞍に積み、普通の運搬は人の肩荷でのんびりと佐々や志佐まで運ばれていたが、明治10年頃から明治20年頃までは大八車が用いられた。これは多量のものを運ぶのに適しており人力ばかりでなく牛に引かせて労力を節減することもできたので長い期間利用された。その後戦時中も含めて馬車に変わった。

明治23年福井・直谷地域の道路が開け始め、立石とも結ばれ福井線は軍事上や産業上において重要なものとなった。古来より利用されていた櫛木場線が明治28年には3m以上の道路となり、30年代には吉井村を南北を結ぶ（現在の県道）道路が貫通した。

明治39年には石炭輸送のため福井・直谷・立石を経て佐々海岸まで道路に板を敷き馬車を走らせた。その後、福井・吉井・佐々・小佐々の幹線道路に軌道を敷き、馬車を走らせ長く続いたが、産業が発達し道路が整備されるにつれトラック輸送が行われ、昭和26年11月にはバス路線が開通してこの地域は発達するに至った。

直谷城跡の裏門（掲手）に松原より福井に通じている内裏～馬場川線があり、これはそれまで使われていた里道を周辺の地主がお互いに土地を供出し、里道を拡幅するとともに若干の路線変更も加えて、林道や福井方面の住民の生活道路として活用されていた。昭和12年町道となるに至って橋梁の新設を行ったりしたが、雨が一度降ると道が荒れる状態で住民に不便をかけたため、昭和48年に舗装をして現在多いに活用されている。

また、内裏団地の人口増加とともに児童の通学道路新設の声が高まり、昭和61年内裏山の一画を通る内裏～北小塚が開通した。

大正の初期から福井方面の炭鉱が栄え、通信上の不便が感じられたため、当時福井地方の商業の中心的な存在であった青木商店主孫三郎によって、大正6年10月福井郵便局が開局された。その後大正9年6月吉井・福井両局に電信、電話が開通し、各地との通信連絡がすみやかとな

り、産業、経済、行政上大いに利便がもたらされた。

3. 北小学校

明治7年7月13日福井村の庄屋宅に福井小学校が開設され、明治29年11月になって現在の北小学校の地に校舎を新築して移転した。その後炭鉱の発展に伴って児童数が大幅に増えたため同時に校舎を増改築し、昭和39年12月19日に鉄筋2階建の校舎に改築したが、これも老朽化したため昭和58年度から60年度にかけて校舎の改築にともない学校敷地を現在のように広くする必要があり、敷地北側の山を削った際、そこに鎮座していた金比羅山を少し上部の山に移築した。

前述のように北小学校は明治29年以来、山を削り、田畠を埋めて少しづつ敷地を大きくし、往時の面影を残さないようになった。

4. 周辺の様相

祥雲寺は志佐六郎貞のころ巖石山松雲寺として開かれ、その後、瑞石山松雲寺と呼ばれ開創以来内裏山の向い側の会下にあったが、炭鉱の開発により門徒が増えたのと、鉱害により飲料水が乏しくなったので、大正8年に現在の地に移った。

古くから現在まで続いている民家は文書等が残っておらず詳しいことはわからないが、明治初期にかかれた旧字図が示すように、直谷区には39戸しか民家がなく、それも川の周辺の耕地を中心として生活が営まれていたと思われ、口承によるとその中でも土肥・城・間宮・久住呂家当の14戸があげられる。福井免においても吉野・和田・村川家等の旧家が現在でも続いている。

平成2年に地区住民の体力向上、健康増進のためにつくられた北部運動公園は内裏山を22,000m²余りを造成したものでこの時、2つの谷と3つの尾根が削られたのは非常に残念である。

5. 直谷城跡

直谷城天守台跡には安政4年建立 吉田邑告言 村田傳 領主許命松瀬藤助とある大きな石の祠があり内裏神社として祭っている。また、その隣には江口宝一氏が昭和37年6月11日に建立された安徳天皇像が安置しており、訪れた人に安徳天皇内裏山生存説を物語るものとなっている。

現在、直谷城跡にある遊歩道は昭和52年に見学者の便宜を図るために町当局により整備されその後、駐車場・便所が完備された。

(平 井)



第38図 直谷区、明治初期の字図

5. まとめ

直谷城跡は、直谷という地名が示すように、主郭の周囲を直立した砂岩の断崖がめぐり、特に“姫落とし”の所は、垂直ないしはそれより鋭い角度で絶壁を形成している。また、追手郭の南側にも、高さ10m、幅3mの砂岩の断崖が、本尾口木戸から武者通り④の首切堂に行く小道の所の手前まで延々と、およそ170mにわたって“衝立”的に屹立している。丁度、追手郭の場所は、北側と南側の絶壁に挟まれた形になり、守るに有利な、これ以上とない天然の要害となっている。

志佐氏は、この天然の要害に、初代の貞から15代の純高まで400年以上の長い間、直谷城を構え、『詰めの城』として強固なものにしていった。(10代からは田平峰氏系の志佐氏ということになる)

さて、今回この直谷城(地元では内裏山と呼ばれる伝説の地)が初めて考古学的に調査された訳であるが、結果的には、測量調査によって予想を越える追手郭の防衛施設が発見され、主郭の発掘調査では9箇所全部から建物跡が確認され、また、827点と多量の輸入陶磁器が発見されたのは驚きであった。そして、時代別にみた輸入陶磁器の流れをみてみると、点数が増えるのは15世紀後半以降で、15世紀後半～16世紀前半と16世紀後半あたりにピークがありそうで、明応年間(1492～1501)に大村・龍造寺連合軍に攻められ落城することと、永正10年(1513)に平戸の松浦興信と合戦、天正9年(1581)に平戸松浦隆信によって攻められるという【壇陽錄】等の記述と呼応した在り方を示すという興味深い結果がでた。

時期的に一番古い資料としては、11世紀中頃～12世紀初め頃の中国製の白磁が出土しており、この資料が直谷城の初源を示すものと思われる。

また、追手郭に築造されている複雑な防衛施設は、現存している遺構は最終的なもので、いくつかの時期にわたって築造されたものであろうが、今回の調査では追手郭の発掘までは至っていないので確認できていない。

糸の東麓地区では、1、11トレンチで建物跡の柱穴と中国製の磁器等が出土したが、4トレンチから検出された石敷道路状遺構が興味深い。というのは、この4トレンチの所は、地籍図をみると昔の里道だったところで、この里道は、南は久住呂氏宅の所から、北小学校のプール、運動場、そして5トレンチ、4トレンチ、3トレンチ、そして、安徳天皇の伝説地である“朕の潤”、昔の町屋跡といわれる町畠、そして、また安徳天皇の伝説地である“御手洗”へと降りて行くコースをたどっている。そして、今回の発掘でたまたま4トレンチに於いて石敷道路状遺構の一部を確認できた。この里道、石敷道路状遺構の事を知らなければ、現在の町道、県道は、全然違う場所を通っているので、“朕の潤”と“御手洗”は何の脈絡も無かった訳である。直接的に安徳天皇伝説に結びつくとは思わないが、この二つの伝説地をつなぐのが、昔の生活道である事に興味を覚える。

しかし、今回の調査では残念ながら肝腎の志佐氏の館跡をみつけることができなかつた。一番その可能性を予想していた北小学校地区で、2箇所の調査トレンチを入れてみたが2m程のボタ等の堆積があり、遺構は発見されず、中世期の出土遺物もなかつた。この場所が志佐氏の館跡の可能性が全くなくなつた訳ではないが、別の場所も考慮に入れておいた方が良さそうである。

南郷地区に於いても明確な建物の柱穴等は検出できていない。ただ、久住呂氏の旧宅から西へ50m程入った地点に、追手郭にある井戸と同形態のものが跡で発見され、この周囲に何らかの生活の跡があるものとは思われる。

調査を大まかに締めてみると以上のようになるが、今回の1次～3次にわたる調査の中で、1次と2次の調査では、追手郭における種々の防衛施設の発見や、主郭からの多量の中中国製の陶磁器等の出土遺物があったことから、当然、3次の築の根小屋の調査でも多量の出土遺物と建物の柱穴等の遺構の検出があるものと思っていたが、出土遺物、遺構の検出が少ないので予想外であった。結果からしてみれば、その当時（中世）の集落景観も、現在の集落のあり方と大差がなく、水田等の可耕地はできるだけ米をつくっていて、その水田の回りに、バラバラと家々があつたのかなと言つてはいた。

しかし、戦国時代になると合戦をする事が多くなり、詰めの城である直谷城の必要性も増したであろう。（実際、主郭から多量の出土遺物があったことは再三述べたところである）、とするとどこかに屋敷があつたはずで、昔の町屋の跡といわれる町畠や、直谷城主郭の西側にあたる“くらんど屋敷”跡付近、そして福井淡路之守の屋敷跡といわれる所等をその候補地として考えておく必要があつた。そして、戦国時代以前の初代の真から8代の義まではともかくとして、戦国時代の城主である9代の（純昌）から15代の純高までは直谷城付近に住んでいたであろうから、それらの直谷城主の館跡がわからぬのは不思議である。何故か根強く安徳天皇の内裏山伝説が残っているのに、安徳天皇より300年から400年も時代が新しくなる9代～15代の城主の館跡が伝説でも残っていないのが、これもまた不思議なことである。

調査は緒についたばかりで、まだわからない事が多いが、今後調査される事があれば、今後の新知見に期待したい。

(村川)

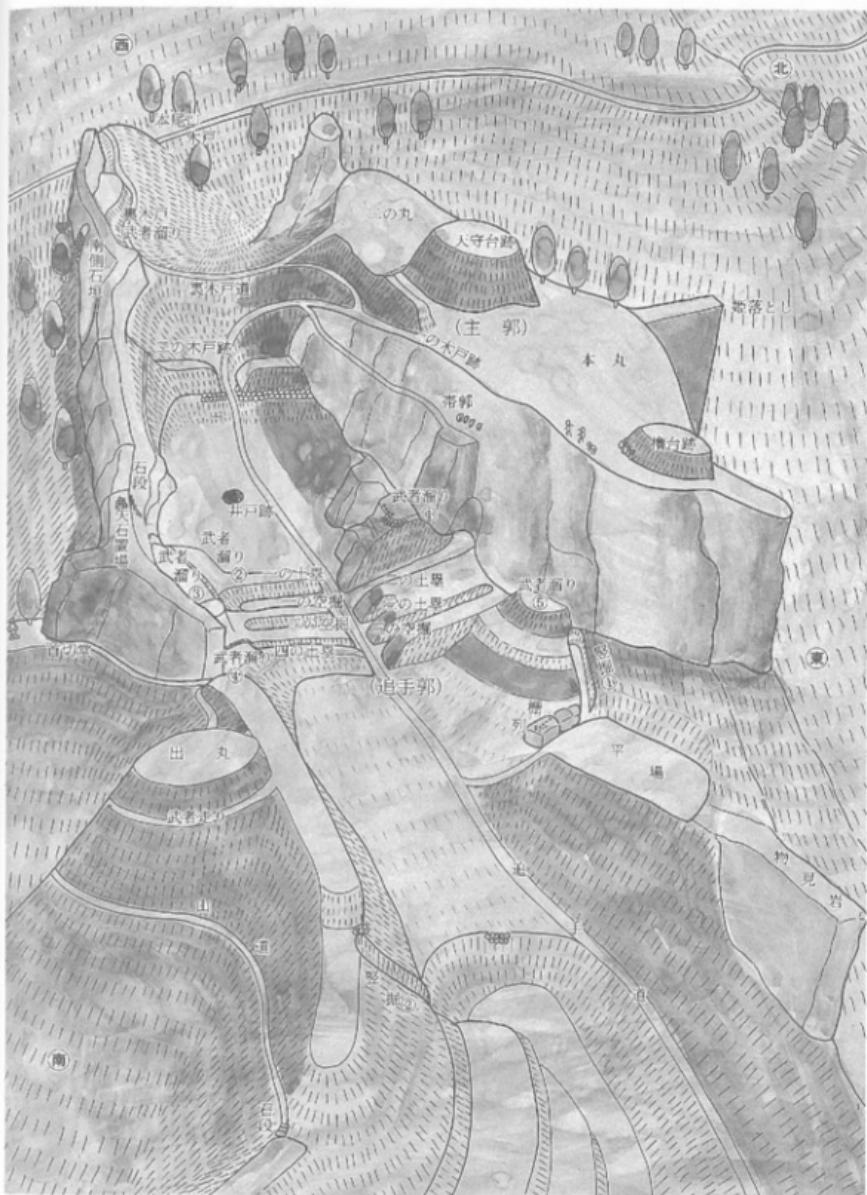
註

1. 『巣鴨郷土史』によれば、「一書に曰く下松浦志佐郷直谷城主志佐壹岐守源義壹岐の西間郷(現今石田村石田の舊稱なり)を領するに依り西間郷の人夫を志佐に呼べ名丘谷城(直谷城)の堀を穿たしむ依て其の池を青州細といふ……」という下りがあり、出典が明らかでないので鶴呑みにはできないが、追手郭の空堀が堅掘を巣鴨の石田の人が掘ったものであろうか。8代の義の時代かと思われる。P. P. 125『巣鴨郷土史』後藤正足著、歴史図書社。

第2表 直谷城関係年表

時期区分	天皇	城主	年号	西暦	城史(城主の動向)	日本史等	
平安時代	高倉	安德	貞	文治1 寛元2	1185 1244	志佐六郎。 志佐次郎札。	源ノ浦合戦、平家滅亡 1185
鎌倉時代	後嵯河 土匂深草 後宇多	初代 2代 3代	貞 (承) 祝	康元1 文永1 弘安4	1256 1274 1281	志佐小次郎祝源安泰率次の台り奮戦力闘する。弘安の役後の罪償として、所領の訴訟を求め、志佐が有田次郎源、山代又三郎家とともに、幕府に参向を許される。弘安10(1287)山代文忠。	文永の役1274 弘安の役1281
南北朝時代	御二条 御間翻上 御村上 新麥 後龜山	4代 5代	有 慶	元弘3	1333	志佐三郎有、……左近番監管岐守。博多に出陣し熊西探題(北条英時)を討つ(1333)	
	後小松 藤原光 後花園	6代 7代	國 重	応永7	1400	志佐巻城守謹。下松浦住人一揆焚露に加盟。1384	
室町時代	後土御門 後柏原	8代 9代	義 純昌	嘉吉3 (純勝)	1443	志佐巻城守重明との通交を最初に行う。志崎全島を併徳する。 志佐巻城守義。30回にも上る對辯貿易を行う。 唐津、岸岳城主成多泰に巻城を攻められ巻崎全島を失う。 巻岐守純昌。(純勝)	応仁の乱1467 応仁の乱が終り、戦国時代となる1477
	後奈良 正親町	10代 11代 12代 13代	純元 (元田平領 主耕昌) 純次 (純政) 純昌	永正7 天文10	1510 1541	志佐源四郎巻城守純元。直谷城に入る。1493 志佐源二郎巻城守純次。佐々木谷城主佐々嘉之の援助をうけ深江城を討つ。 志佐源四郎巻城守純昌。(純政)	三浦の乱(永正7) 1510 これ以後対郷貿易は途絶 信長生れる 1534 秀吉生れる 1536 家康生れる 1542
江戸時代	後篠城 後水尾	14代 15代 16代	純昌 純翁 純忠	天正9 文禄元 元和元	1581 1592 1615	非平戸能信は直谷城を攻めた。 志佐源七郎巻城守純意。秀吉が島津を征した那平戸鍋堂とともに、秀吉に従って戦功を立てた。 (病を得て帰城し、死亡する。1592.4月) 志佐源六純高。父の死後、名護屋へと移り、山代に安直順安城攻撃の際敗死。(30歳) 1592.6月 戰死で言頭を失う。平戸鍋堂の配下に入る。平戸の勢力範囲 一國一城令にて直谷城破却される。1615 松浦内匪動量忠。父義死後、文禄元年7月志佐源の内に生まれる。志佐から御崩、そして平戸大手に移り、改宗家家老となる。1625	率印は直谷城が攻められた時
						文禄の役 1592	
						家康征夷大将军となり江戸幕府を構く。 1603	

本報告I-4外山幹夫「直谷城主志佐氏の動向について」及び「吉井史談」創刊号の年表を参考に作成。



第39図 直谷城跡俯瞰図

図 版



直谷城跡遠景（北側から撮影）



直谷城跡遠景（東側から撮影）



“姫落とし”部を北東から撮影



同上南西から撮影
“姫落とし”部の遠景と近景



“姫落とし”近景（高さ28m）

図版 4



木 丸



櫓 台 跡



天守台跡



二 の 丸



二の丸南側下の石垣



二の丸から裏木戸道へ至る小道

主郭地区伐開後の状況



裏木戸武者溜り石垣



帶郭（岩壁に梁をわたす穴が 4 個穿ってある）



裏木戸武者溜り南側石垣



左に同じ（近接写真）



二の木戸跡（東側から撮影）



左に同じ（北側から撮影）

主郭及び追手郭地区の伐開後の状況



井 戸 路



武者溜り①



武者溜り①から西を向いたところ



武者溜り①南側野面積石垣



武者溜り②と③



武者溜り①上面の小穴（旗差穴の可能性あり）

追手郭地区の伐闋後の状況①



武者溜り③に至る石段



“矢石”置場に至る石段



“矢石”置場



一の土塁



手前二の土塁



右端二の土塁

追手郭地区の伐開後の状況②



首切堂に至る小道の掘り切り



堅 堀 ②



平場西側の、上端に棚列がある岩



左に同じ、棚列



堅 堀 ①



物 見 岩

追手郭地区の伐開後の状況③



主郭地区の発掘調査風景



A トレンチ (北側から撮影) 最初の遺構検出面
(降雨の後、この下の遺構の輪郭を確認した)。



A トレンチ (北側から撮影)



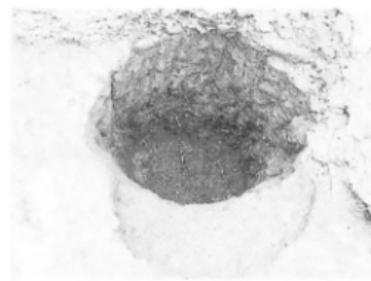
B トレンチ柱穴・溝検出状況。砂岩の基礎(福井層)
を振り込んで柱穴・溝をつくり出している。西側から撮影。



B トレンチ溝が逆丁字状に走っている。
北側から撮影。



B トレンチ柱穴。柱穴内の石は柱の根じめ。



B トレンチ柱穴掘削具の跡が縦に条痕としてついている。
主郭地区の遺構検出状況①



C トレンチ（東側から撮影）



D トレンチ（北側から撮影）



H トレンチ（西側から撮影）



左に同じ（東側から撮影）

主郭地区の遺構検出状況②

図版12



Bトレンチ（西側から撮影）砂岩の基盤を掘り込んで柱穴・溝をつくり出している



Gトレンチ（東側から撮影）

主郭地区の遺構検出状況③



E トレンチ遺構検出状況(西側から撮影)



左に同じ (東側から撮影)



橋台西側下の石垣



左に同じ (矢印は炭化物)



F トレンチ遺構検出状況(南側から撮影)

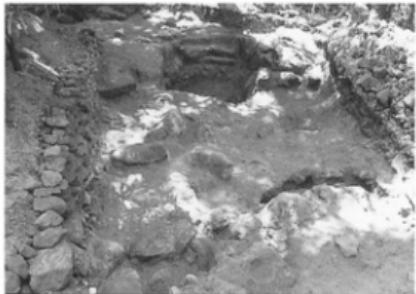


左に同じ (北側から撮影)

主郭地区の遺構検出状況④



I トレンチ遺構検出状況(東南から撮影)



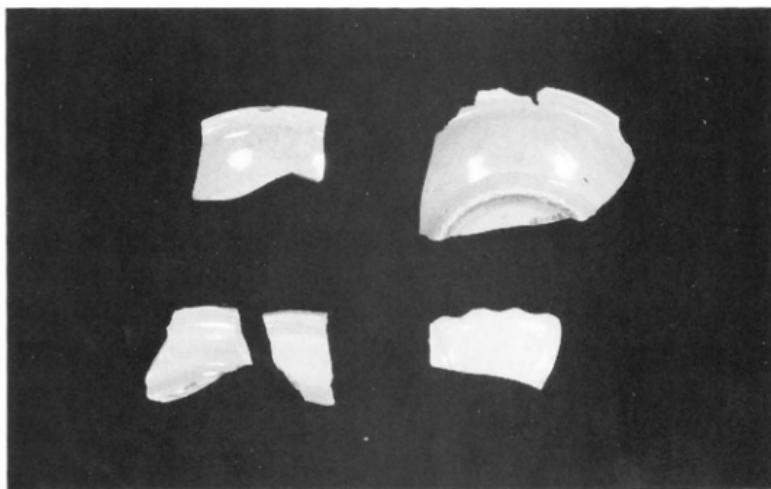
I トレンチ遺構検出状況(北東から撮影)



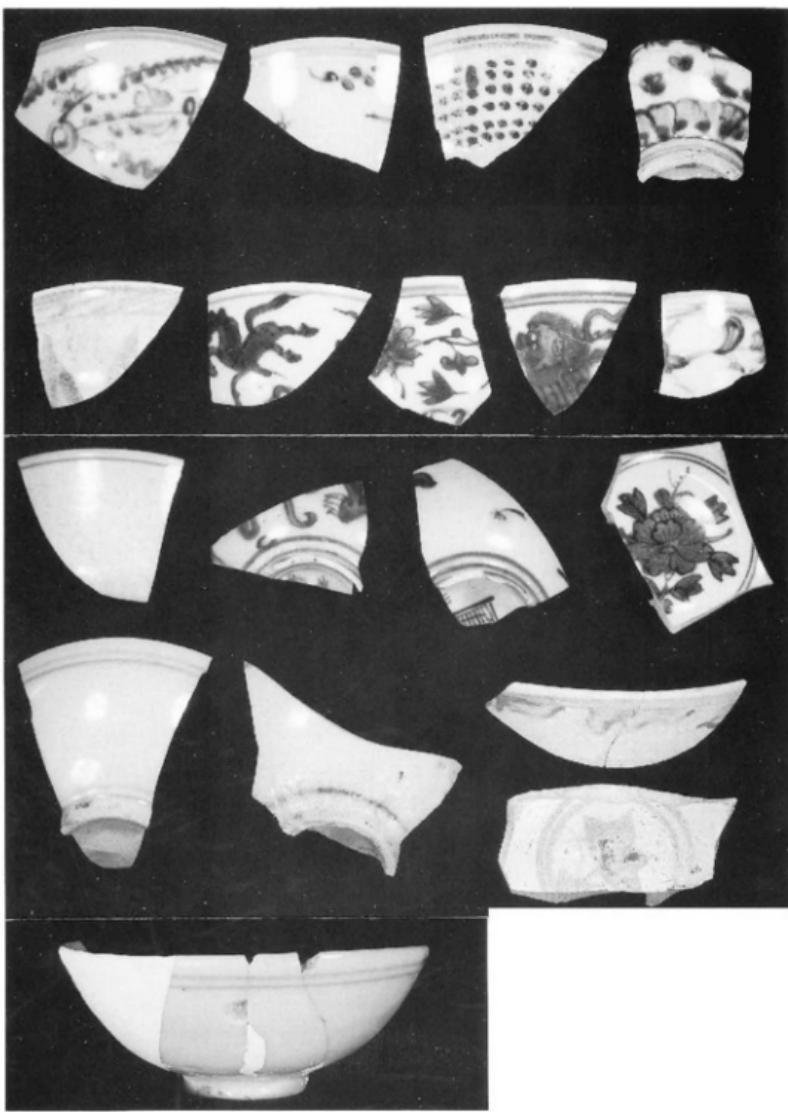
I トレンチ遺構検出状況(擾乱堆)



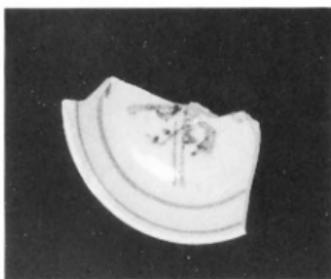
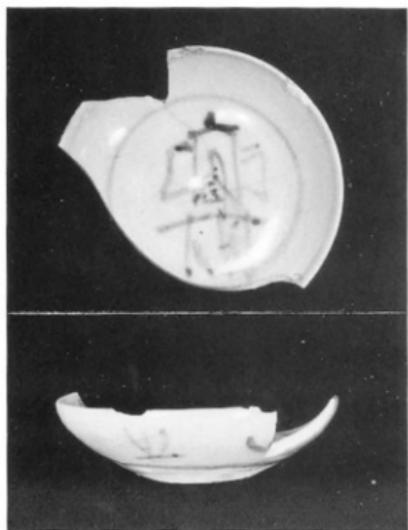
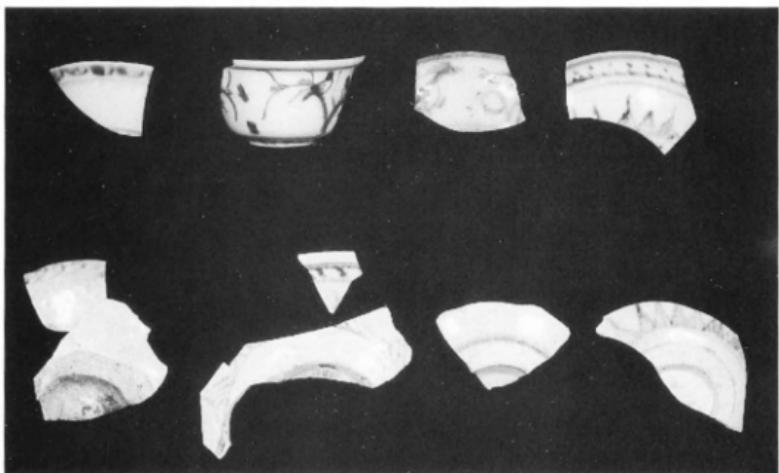
H トレンチ発掘状況
主郭地区の遺構検出状況⑤



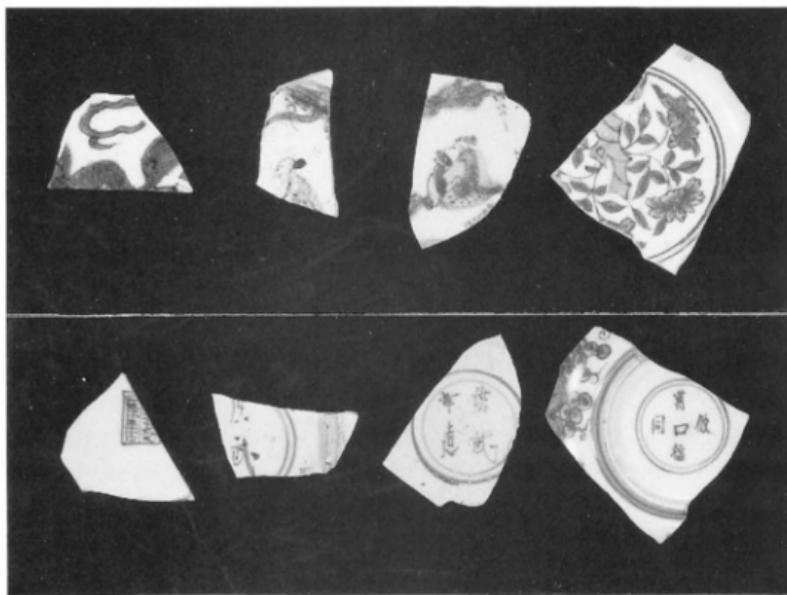
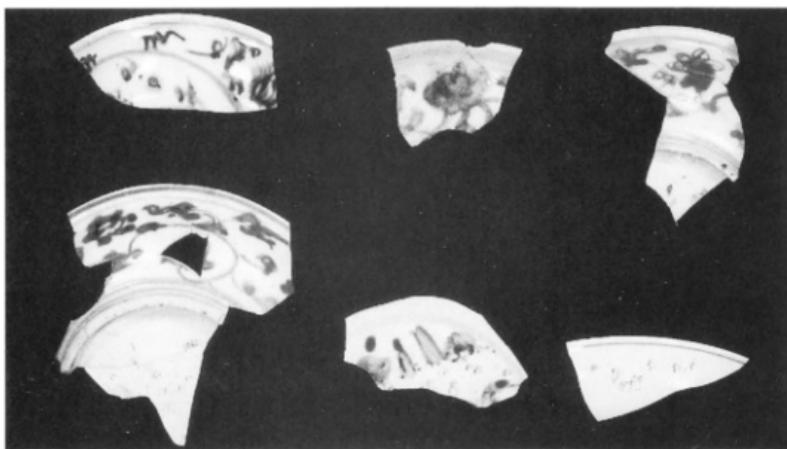
主郭地区出土土器·陶磁器① (1/2)



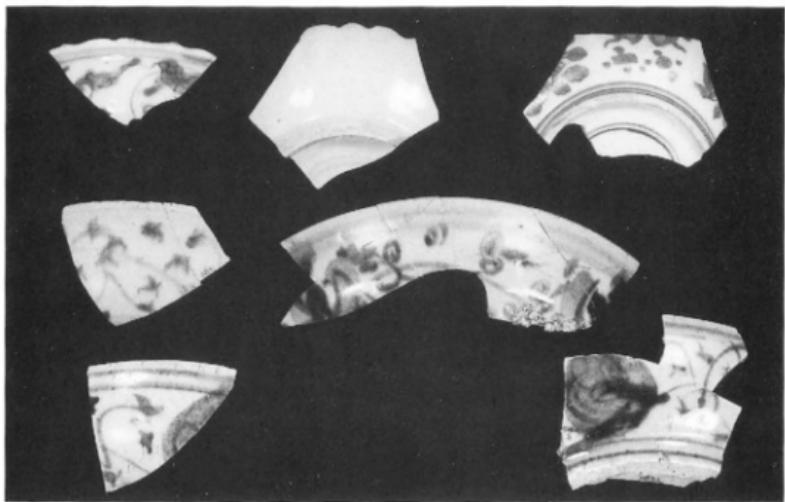
主郭地区出土土器·陶磁器② (1/2)



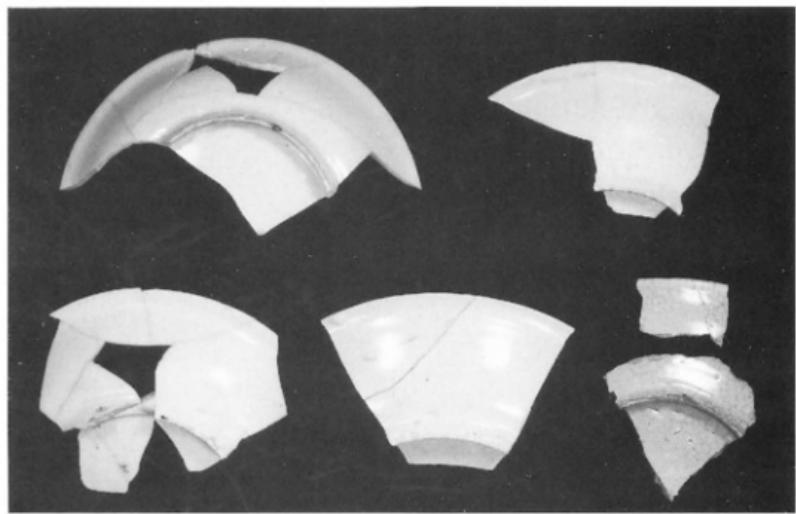
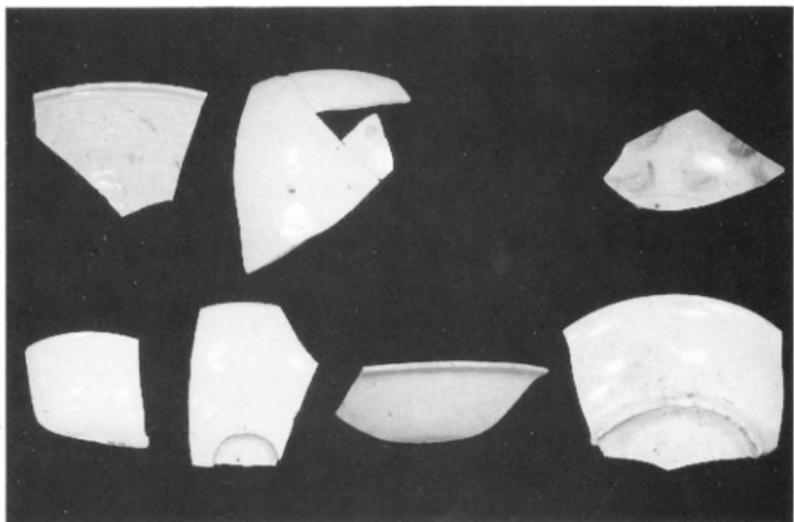
主郭地区出土土器・陶磁器③ (1/2)



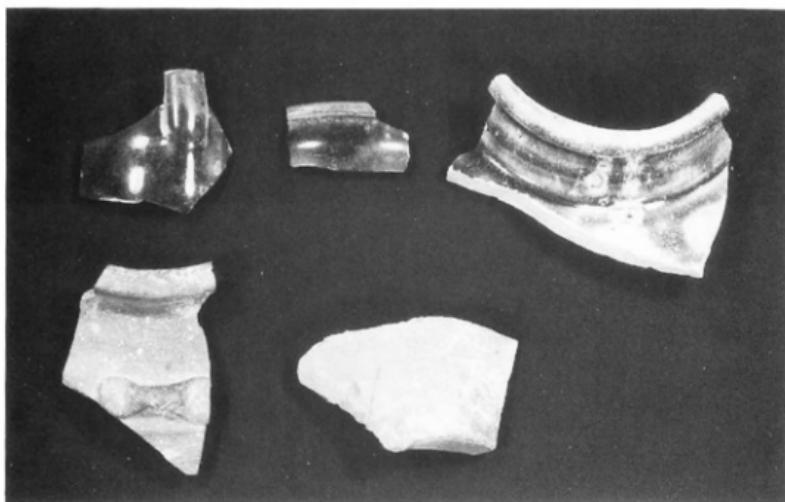
主郭地区出土土器·陶磁器④ (1/2)



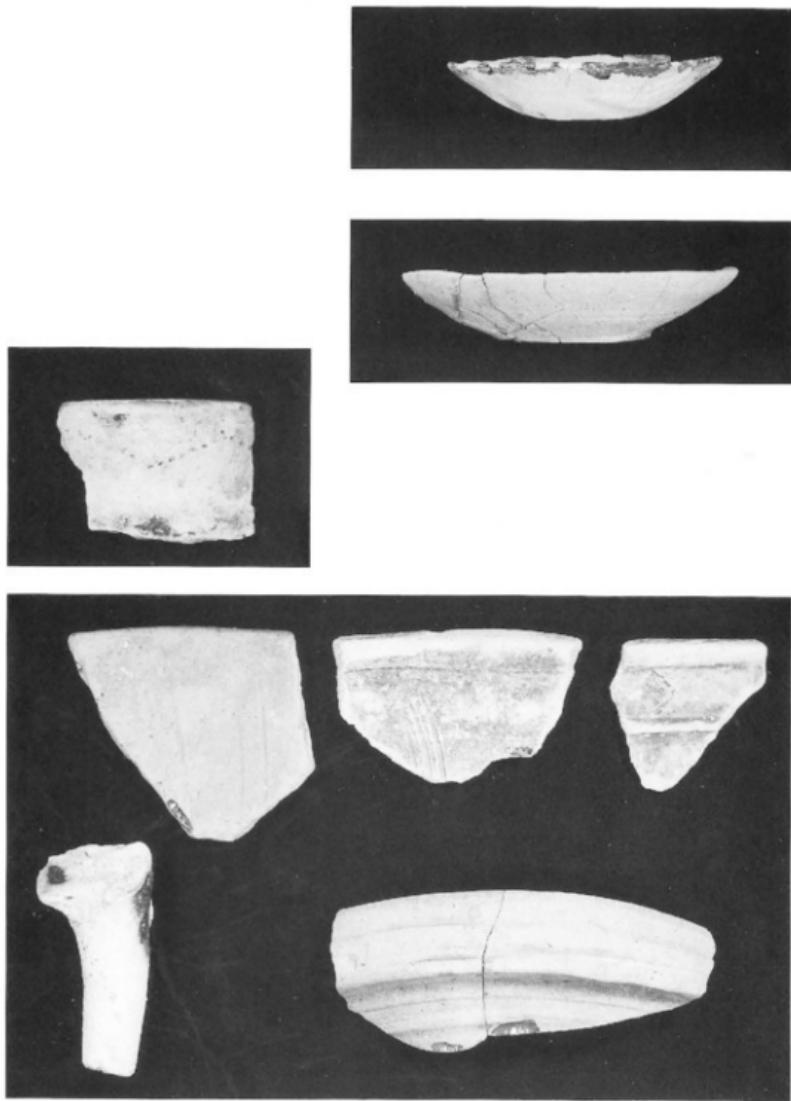
主郭地区出土土器·陶磁器⑤(1/2)



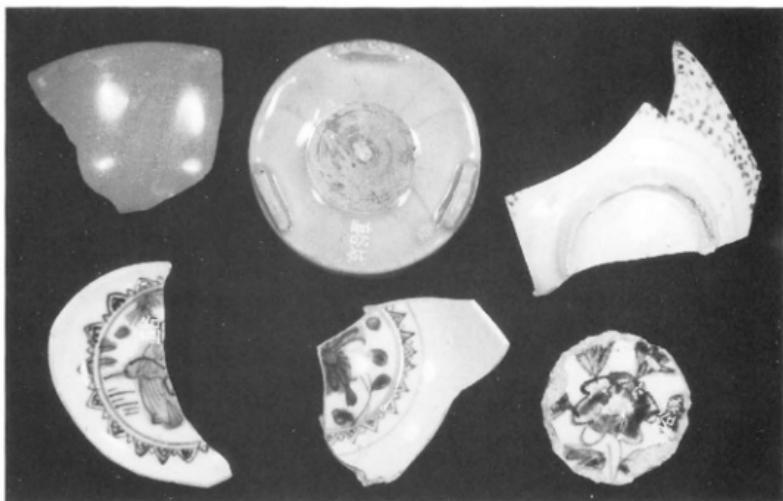
主郭地区出土土器·陶磁器⑥ (1 / 2)



主郭地区出土土器・陶磁器⑦（1/2）

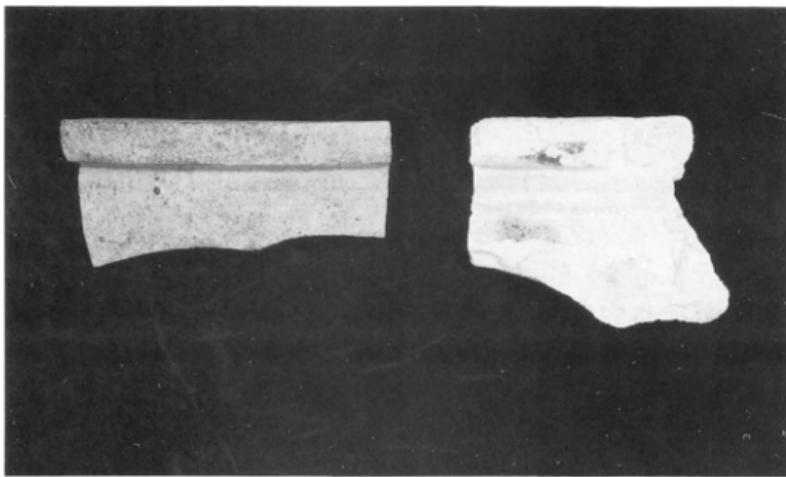
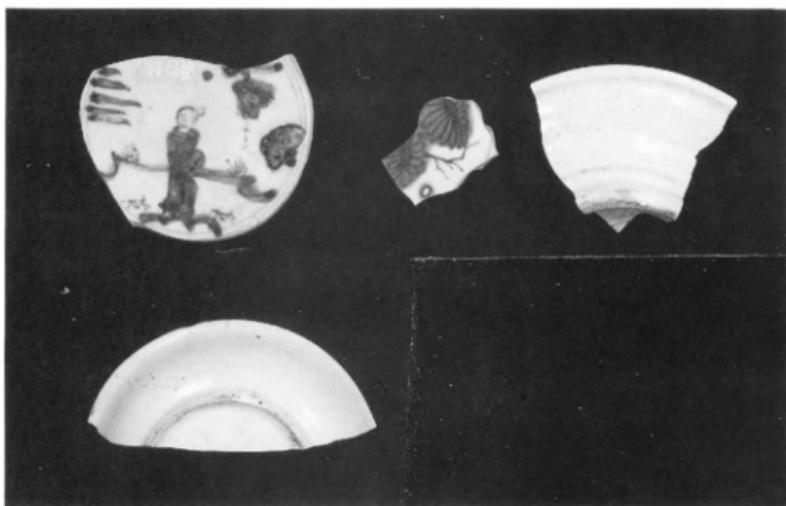


主郭地区出土土器·陶磁器⑧ (1/2)

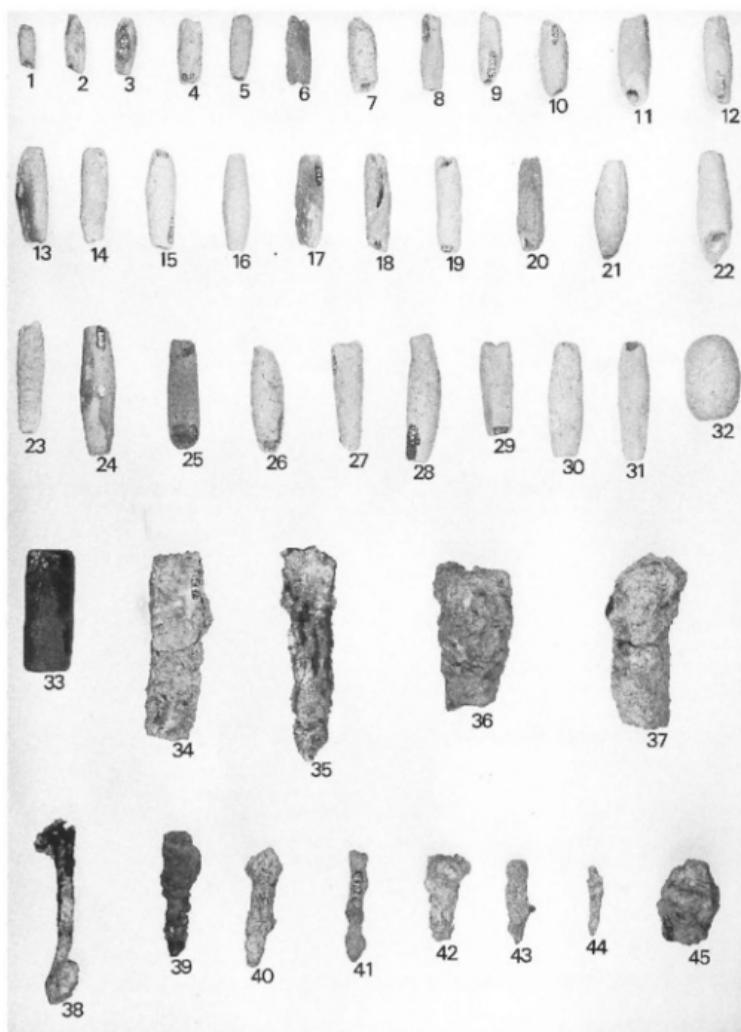


昭和41年主郭地区採集資料① (1/2)

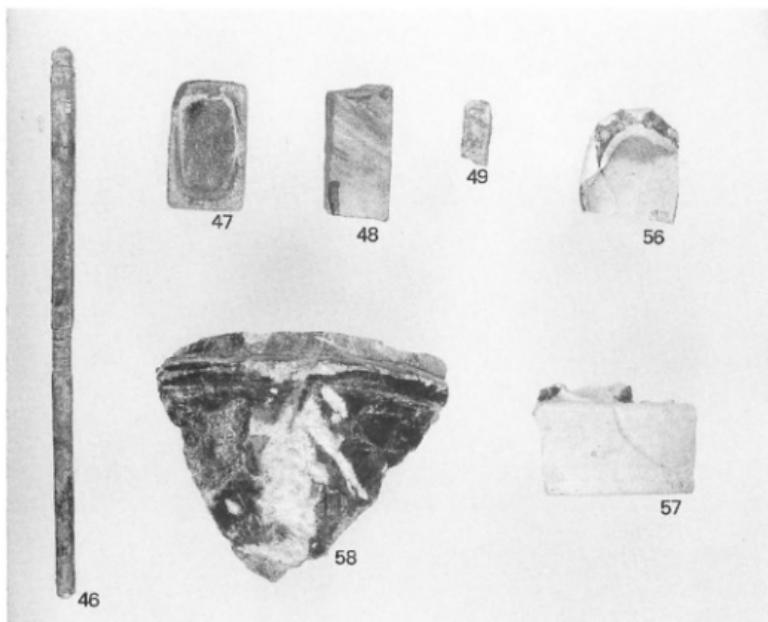
図版24



昭和41年主郭地区採集資料②（1/2）

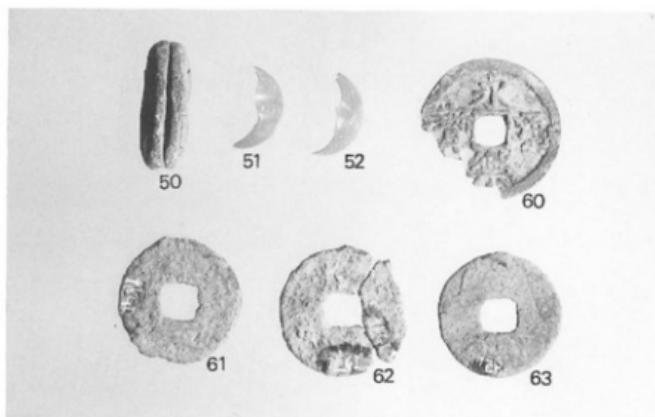


主郭地区出土、その他の遺物① (1 / 2)



主郭地区出土、その他の遺物②

46~58・1/2 55は2倍、59・1/1



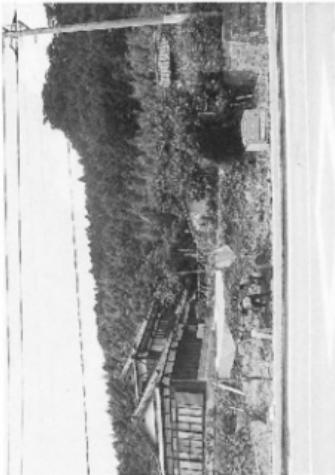
主郭地区出土、その他の遺物③（1/1）



東麓地区

北小学校地区

南尾地区



東麓地区 3 トレーナー発掘風景
東麓地区・北小学校地区・南尾地区発掘風景



北小学校及び東麓地区発掘



1、2 トレンチ調査風景(北側から撮影)



1 トレンチ調査風景(南側から撮影)



2 トレンチ遺構検出状況(西側から撮影)



2 トレンチ遺構検出状況(北側から撮影)



積石塚(御墓)、1 トレンチ西方13mの位置にある。

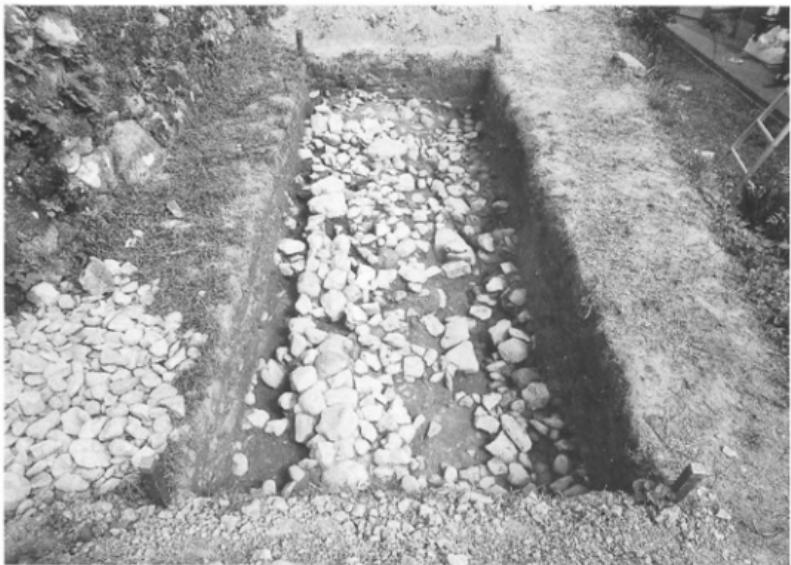


1 トレンチ遺構検出状況(南側から撮影)

東麓地区の調査状況



1 トレンチ遺構検出状況(北側から撮影)



1、3 トレンチ遺構検出状況(南側から撮影)。石敷道路状遺構

1、3 トレンチ遺構検出状況



東麓地区(5~7)トレンチ調査風景



4 トレンチ石敷道路状遺構下の地山の状況



6、7 トレンチ調査風景



下の矢印は11トレンチ発掘箇所、上の矢印は主郭



3 トレンチ完掘状況(東側から撮影)



4 トレンチ西側土層

東麓地区の調査状況①

図版32



6 トレンチ完掘状況(北側より撮影)



5 トレンチ完掘状況(北西より撮影)



7 トレンチ完掘状況(北側より撮影)



10 トレンチ西壁土層図

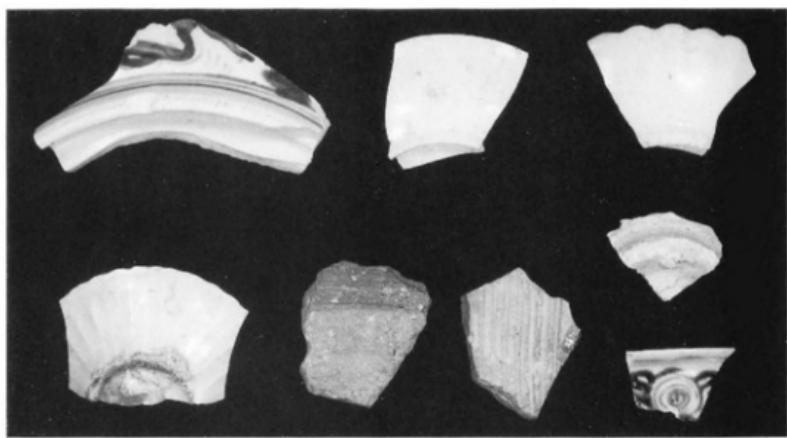
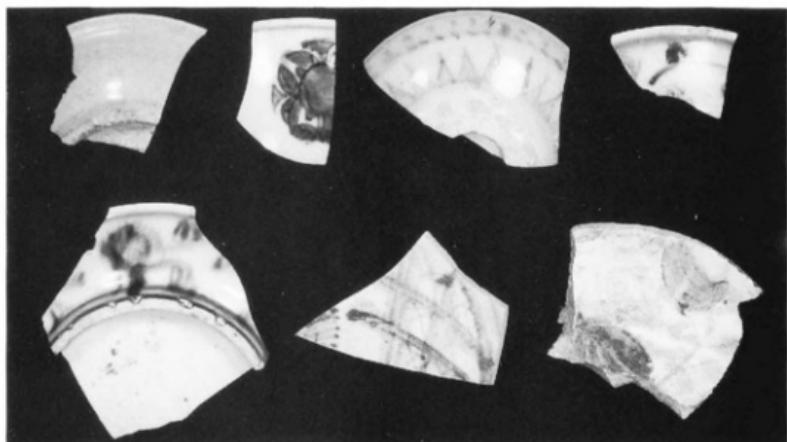


11 トレンチ遺構検出状況(南側から撮影)

東竈地区の調査状況②



10 トレンチ石垣正面部



東麓・南麓地区出土土器・陶磁器（1/2）

図版34



9 トレンチ調査状況(南側より撮影)



8 トレンチ調査状況(北側より撮影)



9 トレンチ完掘状況(南側より撮影)



8 トレンチ完掘状況(北側より撮影)



9 トレンチ東側土層



8 トレンチ東側土層

北小学校地区の調査状況



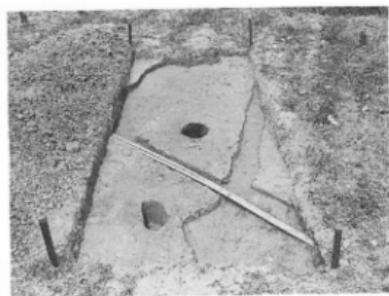
南麓調査風景(14トレンチ)



13トレンチ完掘状況



南麓調査風景(15トレンチ)



14トレンチ完掘状況



15トレンチ完掘状況



12トレンチ完掘状況

南麓地区の調査状況



堅掘②西側野面積石垣



山道と石段



直谷城主墓石塔群



直谷城主墓石塔群

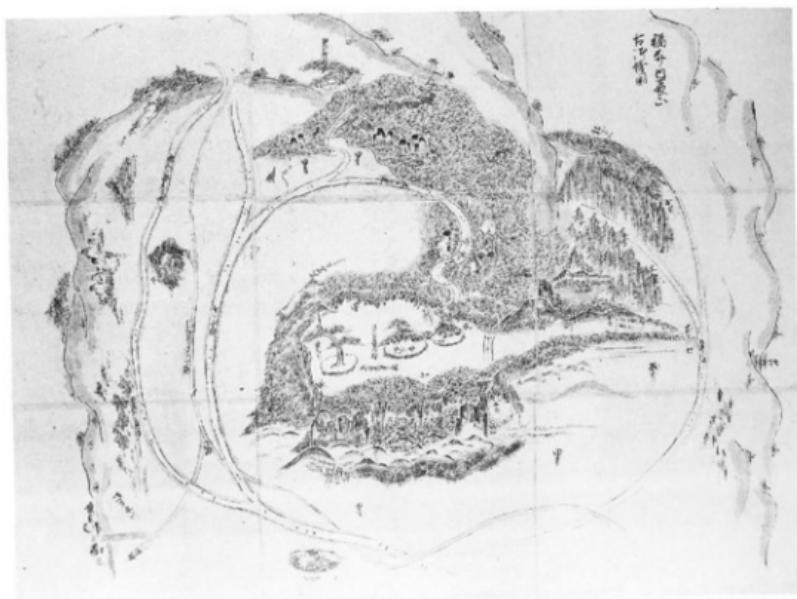


直谷城主墓石塔群



首切堂跡の宝篋印塔

直谷城主墓石塔群他



福井内裏山古御城図(松浦資料博物館所蔵)



内裏山近影(東山麓より)
福井内裏山古御城図・内裏山近影



今福城山遠望(旧寛陵寺より)



志佐城跡(寿昌寺山門)

今福城山(梶谷城)・志佐城(陣之内城)跡遠景

吉井町文化財調査報告書第1集

直 谷 城 跡

1991

発 行 吉 井 町 教 育 委 員 会
長崎県北松浦郡吉井町立石免474番地

印 刷 昭 和 堂 印 刷
長崎県諫早市長野町1007-2